

文部科学省特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」

# 教員養成系大学の特徴を活かした リベラル・アーツ型教育の展開

プロジェクト活動最終報告書

2015年3月



国立大学法人 愛知教育大学 教育創造開発機構

大学教育研究センター リベラル・アーツ教育部門

Aichi University of Education

## はじめに

平成 23 年度から 4 年間進めてきた本プロジェクト「教員養成系大学の特徴を活かしたりベラル・アーツ型教育の展開」（特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育の充実」）も、無事終了を迎えます。この事業は教員養成系大学における教養教育のあり方としてリベラル・アーツ型教育を提案しようとしたものでした。そして、多様な分野を有機的に結びつけ、複眼的な視点で、自己の問題に取り組むためのカリキュラムを構築し、実践することを目標としてきました。

「愛知教育大学憲章」に示された本学の目標には、「学部教育においては教養教育を重視し、教員養成課程では多様な教員養成プログラムを通して、平和な未来を築く子どもたちの教育を担う優れた教員の養成をめざし、学芸諸課程では、社会の発展と文化の継承及び創造に貢献できる広い教養と深い専門的能力を持った多様な社会人の育成をめざす」とあります。本学が「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する学問の府」（学則第 18 条）をめざす背景には、充実した「教養教育」により、高度な専門性を持った「教養人」を育むという目標があったとも言えます。

さて、本プロジェクトは、具体的には平成 25 年度から開始した教養教育の新カリキュラムの充実に向け、教員養成教育に資する教養教育の創造を目的とする活動を行ってきました。本学の教養教育は、リテラシー学修領域（「科学リテラシー」「市民リテラシー」「多文化リテラシー」「ものづくりリテラシー」）、基本概念学修領域、現代的課題学修領域、感性・創造学修領域から構成されます。愛知教育大学は、教養教育を通じて、学生の「汎用的能力（ジェネリック・スキル）」の育成を目指しています。平成 26 年度はプロジェクトの最終年度として、教養教育カリキュラムの編成に関する研究、防災教育の検討、リテラシー・マップの作成、汎用的能力を育成する教育方法の調査、クリッカーの活用研究などを行い、4 年間の調査研究の成果を総括してきました。そして、ここに最終報告として一冊の報告書にまとめることになりました。この間、多くの方々にご協力を賜り、最終報告できることとなりましたことを感謝申し上げます。

また、それと同時に、昨年度「ミッションの再定義」により、現代学芸課程は「第 3 期中期目標期間末までに規模の縮小とともに社会的要請を踏まえた抜本的な見直しを図る」こととなり、新たな教員養成大学としての「教養教育」のあり方が求められることとなります。今後とも多くのご協力、またご指導・ご鞭撻をいただき、教員養成大学として求められる「教養教育」を新たに創造していく予定であることを申し添えさせていただきます。

2015 年 3 月

国立大学法人 愛知教育大学副学長

中田 敏夫



## 目 次

はじめに

目次

### I 取組総括報告

「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」の成果…………… 3

添付資料 ①LA プロジェクト取組関係者一覧…………… 13

②LA プロジェクトの問題設置の経緯と実施内容…………… 14

③LA プロジェクト・イベント表（2011 年度～2014 年度）…………… 15

### II 2014 年度の取組概要（1）—成果と課題—

2014 年度プロジェクト活動一覧…………… 21

教養教育科目の実施に係る取組の概要…………… 23

学修領域における取組と課題

市民リテラシー…………… 27

多文化リテラシー…………… 29

科学リテラシー…………… 31

ものづくりリテラシー…………… 33

基本概念学修領域…………… 35

現代的課題学修領域…………… 37

感性・創造学修領域…………… 39

学生説明会の実施内容…………… 41

教養教育のカリキュラム編成の概要—授業構想の傾向と学生の自己評価から—… 50

### III 2014 年度の取組概要（2）—情報・議論の場の提供—

「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウム 2014…………… 85

シンポジウム所感…………… 99

リベラル・アーツ Edu セミナー…………… 101

防災教育の調査と実践…………… 104

おわりに…………… 113

組織体制（2011 年度～2014 年度）…………… 117



# I 取組総括報告



## 「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」の成果

### ■はじめに～課題の目標と取組内容の再述～

愛知教育大学は、平成 23 年度より 4 年間に渡って、文部科学省特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」の支援を受けて、「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」（以下、プロジェクトと記す）を進めてきた。

本報告では、まず教員養成系大学の特性を活かして教養教育を推進するための基本的アプローチを整理し、目標や教育方法の質的転換をどのように定めていったのか、取り組み内容等を提示する。次に、教育創造開発機構大学教育研究センターおよび関連組織など、教養教育推進を支える体制整備・連携の概要について説明する。続いて、プロジェクトの一環として行われたセミナー、シンポジウム、教養科目の改組に関連して行われた各種説明会など、教養科目の目標を周知して共有するための活動等を示す。そして最後に、年度目標等と照らし合わせながら、4 年間の取り組みの成果を自己点検したものを記述する。

取組の詳細については、各年度報告書に記載されているので、ここでは概要の記述にとどめることとする。

### 1-1 中期計画と年度目標への位置づけ

中期計画（平成 22-27 年度）では、①教育に関しては「学士課程において、愛知教育大学の特性を活かし教育科学、教養教育、幅広い専門教育を強化しそれぞれの関連性を深め、『学士力』を保証する」こと、②教育の実施体制等に関しては「全員担当を基本とする現在の教養教育の実施体制について、教養科目の内容及びグループ体制の再編を行い、教養教育を充実する」ことが掲げられている。

プロジェクトが開始した平成 23 年度から平成 25 年度までの 3 年間の取組は、①「学部化を視野に教育大学におけるリベラル・アーツ教育の役割を明確にするとともにカリキュラムの見直しについて検討」という教育に関する計画と、②「現代学芸課程が教養教育（リベラル・アーツ教育）の推進役としての役割を果たし得るよう、学部化を視野に全学の教養教育に責任を持つ教員配置案を策定する」という実施体制に関する計画の両面に沿って進められてきた。プロジェクト最終年の平成 26 年度においては、「平成 25 年度から実施した新しい教養教育についての検証を行い、更なる充実に向けて検討」という計画に基づき、自己点検・評価を行った。

### 1-2 教養科目の実施体制

本学は、教養科目を運営するにあたり、全学体制で実施してきた。教員を目指す学生が多くを占める教員養成系大学において、教養科目をいかに位置づけるのかが課題のひとつとなってきた。学生が備えるべき基礎を確実化するため、教養科目の内容及びグループ体制の再編を行った。1-3 で記述するように、文理融合を通じて複眼的視点を備えるという現代学芸課程の教育目標を教養科目に波及するために、当該課程担当教員のシェアを増や



すことを目指した。教養科目を担当する全教員のうち、現代学芸課程専任教員の比率は、旧カリキュラムの2012年度は19.3%であったのに対して、新教養科目を開始した2014年度は43.4%に増加した。ここから、現代学芸課程専任教員を、教養科目推進の中核とする、体制上の目標は概ね達成できたと言える。加えて、教養科目を担当する教員が、教養科目の目標や教育方法を共有するために、プロジェクト期間中、セミナー、教員FD、シンポジウムを開催し、FD・学習支援部門との共催とすることで、FD推進に努めた。その結果、教養科目を担当する専任教員のFD参加率は、上記の催し物全てをあわせて約8割という好結果となった。このように、現代学芸課程専任教員を主軸としながらも、全学的に問題を共有して、教養科目の目標・教育方法に関わる情報を共有し、意見交換をしながら、改善を重ねるといった形がとられた。

### 1-3 教養科目における現代学芸課程の位置づけ

本学では、現代学芸課程において、複眼的視野を育成するための文理融合型教育を、実践してきた。具体的実践としては、所属するコース（専攻）とは異なるコースの授業を履修することで、専門レベルで複眼的視野を持つことを目指す共通基礎専攻科目（以下、LA科目）を挙げることができる。2009年および2011年にアンケートを取った結果、履修可能科目が限られるなどの時間割編成上の制約、専門と基礎と両方に対応する授業実施の困難性などの課題が浮かび上がった。しかしながら、自分の専攻と異なる専門性に触れることは、世界に対する視野を広げ、新たに問題を発見するきっかけともなっていた。文系・理系の垣根を越えて授業を展開するにあたり、授業内容の理解を深めることができる授業方法の開発をあわせて進めることで、現代学芸課程のカリキュラムで確認された制度的な問題の解決を図った。

講義のなかにディスカッションを取り入れる合衆国の双方向型の授業を参考に、「読書課題」を通じたリテラシー向上と、思考・表現能力（ジェネリック・スキル）の獲得という、2つの具体的なキーワードを提示することで、多様な専門を持つ教員からなる教養教育をコア・プログラム化することを試みた。教養科目のなかで、現代学芸課程担当教員は、これまでの実践経験を発揮し、推進する位置づけとされた。1-2で触れた、セミナー、教員FD、シンポジウムで、授業報告等により登壇した教員は、全教員合せて31名である。そのうち、現代学芸課程専任教員は14名であり、複数回担当している教員も数名いる。また、新カリキュラム開始前に、14名中12名が授業報告等を行うなど、新たな教養科目の開始に向けて、積極的に情報提供が行われた。ここから、現代学芸課程において培われてきた知見を、教養科目に波及するという目標は、概ね達成されたと思われる。

### 2-1 教育創造開発機構大学教育研究センターの設置と運用

教養教育の整備・推進の取組のなかに、プロジェクトの活動を定位させるために、教育創造開発機構大学教育研究センター内にリベラル・アーツ教育部門が設置された。平成26年度の時点で、教育創造開発機構は、学長を機構長、副学長を副機構長として、合計6つのセンターから構成されている。大学教育研究センターは、4つの部門から構成されてお

り、リベラル・アーツ教育部門はその一部門に該当する。長期的な視野を持って、実施状況を把握しながら、カリキュラム編成等の改善を進めていくにあたり、当部門において、教養教育を推進するための教育内容・方法の研究およびカリキュラムの開発研究を担当することとなった。

## 2-2 学内の関連組織とプロジェクト推進のための協働

本プロジェクトは、学長を事業推進代表者、理事を事業推進責任者とし、教養教育の実施と研究の両面から事業を進めた。実施面については、教養科目の改組に伴う取り組み全般は、大学改革担当学長補佐またはカリキュラム改革担当副学長のリーダーシップのもと、大学改革推進委員会、教務企画委員会、現代学芸担当教員が中核的役割を担って進めていった。加えて、教務企画委員・現代学芸担当教員が、LAプロジェクトメンバーを兼ねることにより、後述する基礎調査・研究と接続するように配慮した。

新カリキュラム開始時の学生対象説明会については、教養科目コーディネーターおよび教務課の協力を得ながら、教育目標を教員と学生の双方が共有する場となるように、内容の吟味を重ねた。また、研究面については、大学教育研究センターリベラル・アーツ教育部門が中心となり、教養教育カリキュラムに関する基礎調査、およびリベラル・アーツ型教育の方法の研究開発を進めていった。リベラル・アーツ教育部門は、各種セミナーやシンポジウムの企画も担当し、学内における周知を徹底するために、同センターFD・学習支援部門と連携して実施する形とした。授業改善のためのアンケートについては、FD・学習支援部門が中心となり内容を刷新し教養科目専用のアンケートを作成した。検討・分析作業に、リベラル・アーツ教育部門および各関係者が協力する形とした。

新しく教養科目を開始するにあたり、関係者と円滑にコミュニケーションを図るために、平成25年度に、大学改革担当学長補佐が中心となり、各学修領域およびリテラシー分野のコーディネーター教員、および、大学教育研究センター長を含めた「拡大LA会議」が開催された。平成26年度は、「拡大LA会議」を発展させ、共通科目専門委員会の下部組織として、カリキュラム改革担当副学長を含めた教養科目部会を設置、それを実施面と研究面の中核として位置づけ、教養科目の改組を今後の全学的な改革のなかに位置づくようにした。

## 3-1 教養教育の目標の設定

教員養成系大学の特徴を活かした教養教育を目指すにあたり、プロジェクト期間中だけではなく、継続的に推進・改善していく恒常性が必須である。そこでプロジェクト期間中に、教養科目の目標を設定し、その達成方法を含む教育の枠組みを検討する機会を設けてきた。平成25年度の教養科目の改組に先立ち、まず、教養科目説明会（教員FD）を実施した。そこで、教養科目の目標・内容の方向性に関する資料を公表した。続いて、教養科目説明会（学生対象）を実施し、教育目標・内容を学生に明示すると共に、リーフレットを作成・配布することで、その理解の深化を促した。

平成26年度も引き続き、教養科目説明会（学生対象）を実施、説明方法等の改善を進め

た。なお、学生対象説明会で配布したリーフレットおよび使用したスライド資料（全体説明、各リテラシー分野説明、履修方法の説明等）については、学務ネットに掲示することで、教員・学生が随時閲覧できるようにした。また、2サイクル目の授業開始時には、あらためて教育目標を周知するために、学生対象説明会で配布した資料を依頼文と共に、担当教員全員に送付した。これらの資料は、いずれも教育の向上を目指して、様々な議論や実践を行う際の基礎情報になるものであり、今後も継続的に活用・修正されることが期待される。

### 3-2 旧カリキュラムの内容と課題

旧カリキュラムにおいては、人間尊重・人権尊重の精神、異文化理解、共感的な人間関係の形成、現代的課題の理解を目標に、基礎科目（人間と文化）の自然分野、人文分野、社会分野を必修として、主題科目（7つの柱のなかから1つを選択）の「入門」「展開1」「展開2」「セミナー」を履修するという形態がとられた。

このカリキュラムにおいては、「柱」を構成する学問分野の理解を「積み上げ」によって深化させることができる一方、基礎科目と主題科目の接続、「入門」「展開」「セミナー」の接続、履修できる学問分野の種類の制限などが課題として浮かび上がった。新カリキュラムにおいては、「積み上げ」から「組み合わせ」に転換し、各学修領域の役割の明確化を図った。領域横断的な履修を促進し、異なる学問分野の方法を学ぶことで、専門に橋渡しする基礎力育成を狙った。

### 3-3 新しい教養教育カリキュラムの構造（学修領域の説明）

以前の教養科目は、「柱」の選択による「積み上げ型」を基礎とするものであった。科目間の接続等の問題を踏まえて、平成25年度より、4つの学修領域（リテラシー、基本概念、現代的課題、感性・創造）から科目選択をする「組み合わせ型」に変更された。学生は、リテラシー学修領域を構成する①市民リテラシー、②多文化リテラシー、③科学リテラシー、④ものづくりリテラシーから3科目、その他の学修領域から1科目ずつ、履修希望科目として、選択システムを通じて登録する。その後、希望者数に応じて、システムによる抽選が行われ、履修科目が決定されるという流れとなった。

すべての科目に共通する趣旨として、A) 課題を発見する力、B) 情報を読み取る力、C) 複眼的に物事をとらえる力、D) 他者と協働する力の、4つの力を備えることの重要性を示した。多様な学問分野の知識・方法に触れることで、「市民」として行動するための基礎を身に付け、絶え間なく変化する今日の社会において、「主体的に学ぶ力」を備えることを、共通する目標として掲げた。各学修領域・各リテラシー分野の具体的な目標・内容等については、平成26年度の学生説明会報告箇所を参照のこと。

### 3-4 アクティブラーニングの試み

新教養科目の教育目標である「4つの力」を身に付け、さまざまな文脈で応用するためには、講義型の授業方法だけでなく、アクティブラーニングの教育手法を有効に活用する

必要がある。汎用的能力の涵養を促す教育方法について、平成 23 年度には、「対話型教育」「ディスカッション」などの学外の実践事例の収集をセミナーの開催を通して行ったほか、学内事例を冊子としてまとめ提供した。平成 24 年度には学内教員を対象とするアンケート調査及びヒアリング調査を行い、学内で実践されているアクティブラーニングの手法に関する現状と課題を把握するとともに教育方法に関するセミナーを開催した。

平成 25 年度は、学生と双方向的に関わって主体的学びを促すための手段として、ICT ツールの一つであるクリッカーの貸出体制を整備し、講習会の開催、活用方法等を記したリーフレット作成、使用事例の収集を行った。平成 26 年度は、教育目標と対応した教育方法の共有化を図るために、公開授業を実施するとともにクリッカーの実践事例を掲載したリーフレット作成を行った。アクティブラーニングを推進する取り組みの一部として、クリッカーの使用を教員に促していくために、FD・学習支援部門を通じて貸出等の手続きを行えるようにした。

#### 4-1 情報発信

プロジェクトの成果の発信手段として、平成 23 年度から毎年 1 回「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウムを実施し、その内容を学内外の教職員、学生と共有し議論を行う機会を設けてきた。これを含む活動内容の全ては、紙媒体の報告書として出版するとともに、ウェブページに PDF ファイルの形式で掲載し、情報提供を行っている。

プロジェクト用のウェブページについては、平成 23 年度のプロジェクト開始時から立ち上げ、各種イベントの案内や実施報告、活動報告書等の出版物を掲載してきた。平成 24 年度からは、リベラル・アーツ教育部門がそれらを担当することとなり、教育創造開発機構大学教育研究センター内の当該部門のウェブページに統合・整備し、初年度からの活動内容を随時閲覧できるようにした。活動の成果としての発行物を、主にリーフレット形式で掲載し、教員や学生がいつでも利用できるような仕方で提供している。

#### 4-2 学修領域の教育目標等の整理と公表

平成 25 年度に公表した教養科目の目標および内容は、複数の段階を経て定められている。まず、3つの学修領域と4リテラシー分野がそれぞれ目指す目標を、コーディネーター教員と授業担当者の議論を経て「定義項目表」に記入いただき、本学で実現可能な教育内容の方向性を確認した。そのうえで、文理を横断する多様な教養科目のコア・スキルを見出すために、授業担当者に「授業紹介項目表」を記入いただき、それぞれの専門的知見に基づいた「知識」「技能」「態度」を把握することを試みた。これらから共通項を抽出し、教養科目の目標・内容を明示したリーフレットを作成した。学生対象説明会において、それを配布すると共に、学務ネットに掲示することで、教員に対する周知を図った。

目標の達成度を高めるためには、教員同士もしくは教員と学生間の意見交換等を進め、そのプラットフォームとして、各資料を活用することが期待される。プロジェクト終了後も、セミナーを通じた話題提供や公開授業を継続的に行い、教養科目の内容・目標の妥当性を絶えず確認し、カリキュラム編成の一層の最適化を進める必要があり、各資料は検討

を進めるための材料になると思われる。

#### 4-3 FDの実践 (1) 基本的考え方

平成 25 年度後期から開始した新教養科目は、学修領域、リテラシーごとの教育目標や内容を持ち、授業担当者はこれを踏まえた授業を展開することが必須である。そのため、プロジェクトとして推進するFDは、教養教育の目標としての「4つの力」や、学修領域、リテラシーごとの教育目標や内容について、授業担当教員間における共有化を図ることを主たる目的として企画・実施してきた。共有化のための手段として、教養科目の目標・内容の方向性に関する資料をリーフレット形式で作成し、教養科目説明会、セミナーやシンポジウムの際に説明を行った他、必要に応じて参照できるように、大学教育研究センターリベラル・アーツ部門ウェブページに掲載した。また、目標や内容に適した教育方法については、セミナー、シンポジウムで授業担当の教員が実践報告を行うことで共有および議論を行う機会を設けた。

#### 4-4 FDの実践 (2) 関連する資料

愛知教育大学におけるFDは、教育創造開発機構大学教育研究センターFD・学習支援部門が中心となり、①「学生による授業改善アンケート」および「教員の自己点検」の企画・実施、②「公開授業」の実施、③全学FDシンポジウムを行っている。プロジェクトにおいて新教養科目に関するFDを進めて行く上でも、こうした従来のFDの枠組みに沿ってFD・学習支援部門との協働により推進し、主に以下の形式でFDを実施してきた。

(1) 教養科目アンケート項目の見直し、およびアンケート結果の調査分析、(2) 公開授業を含むセミナーの実施、(3) セミナーおよびシンポジウムの実施。

また、プロジェクト独自のFDのあり方として、共有化を目的とした資料提供（新教養科目の目標・内容を記したリーフレットや汎用的能力育成の方法を記したリーフレット）を行ってきた。活動に際しては、平成 24 年度には、教員を対象とする「ジェネリック・スキル教育アンケート調査」および聴き取り調査を行い、セミナーおよびシンポジウムで実施すべき内容のニーズを把握するための資料とした。また、平成 25 年度には初年次学生を対象に「ジェネリック・スキル自己評価アンケート」を実施し、教養科目アンケート項目案を作成するための参考資料とした。

#### 4-5 FDの実践 (3) 教育に対する評価に関する議論

教養教育を充実させていくにあたり、重要なことは、教育に対する評価をどのように行うのかという点であることが、2013 年度のシンポジウムで指摘されている。従来、大学における評価の基準は、教育よりも研究に多くが占められてきたという歴史的な経緯がある。しかしながら、大学に対する社会の要請が変化し、また、教員養成分野においては、教員の質的向上が求められており、学生の主体的学びを実現する双方向的な授業が期待されているという現状がある。

学生の主体的学びを促すアクティブラーニングの導入や、理解の定着を図るためのフィ

ードバックの充実化は、授業内容に関する学生の理解を深化・定着させるために不可欠である。その一方、授業以外のサポートや添削業務など、教員の負担が大きくなるという一面もある。そこで、教員の負担が過剰にならないように、e-ラーニング環境整備をより一層進めていくだけではなく、教育支援のあり方、および、学生アンケートの位置づけも含めて、教育に対する適切な評価方法を検討していくことが、今後の教養科目の推進のために重要になってくる。

### 5-1 教員養成に生きるリベラル・アーツ教育の探求

現代学芸課程は、もともと総合科学課程という名称で、最大時（2000年度～2007年度には学生定員を395名（教員定員111名）とする大規模課程であったが、中教審答申を踏まえながら、「リベラル・アーツ教育」を全面に出すという戦略をとってきた。専門的な技能を、より応用的に発揮するためには、それを裏づける知識体系を学んでいることが大切である。変化する社会のなかで様々な対応・判断が求められる今日の学校現場で活躍できる教員や高度専門職業人を育成するうえで、現代学芸課程がこれまで積み上げてきた専門性や教育を活かすことを念頭に置いて、カリキュラム編成が検討された。

### 5-2 防災教育

新カリキュラムのなかの「現代的課題学修領域」において、「自然災害と防災・減災の科学」と題する授業が開講した。東日本大震災における学校や教員の対応が、さまざまにクローズアップされるなか、教員養成をミッションとする大学で、いかに災害・減災に関する知識を伝えるのかを、考えていく必要がある。愛知県は、1944年の東南海地震、1945年の三河地震、1959年の伊勢湾台風、2000年の東海豪雨など、自然災害が少なからず発生しており、将来的に南海トラフ巨大地震が起こることが想定されている。

自然現象に関する知識を得たうえで、災害を乗り越える力を備えることを目標に開講されたのが「自然災害と防災・減災の科学」である。防災教育は、大学内の有志により実践されているが、それぞれの学問分野内にとどまっている。防災・減災は、理学、工学、法学、心理学、医学、情報通信学、危機管理を横断する特性がある。教員養成を踏まえると、教科活動、特に理科、社会科、保健体育科、さらに教科外活動、安全教育等を横断する科目が求められる。そこで、本学の複数の教員に加え、医療関係者、行政関係者、建築士、ボランティア関係者などの協力を得て、オムニバス形式の授業が新カリキュラム移行のタイミングで導入された。

### 5-3 ものづくりに対する着目

リテラシー学修領域の1つであるものづくりリテラシー分野は、ものづくりが盛んな愛知県の地域的特性を踏まえた領域である。だが、それ以上に重視しているのは、ものを実際につくり完成させるまでのプロセスを通じて、問題発見・問題解決のための力を備えることである。同分野を構成するのは、主に、実験科学に関連する分野、技術教育に関連する分野、創作など芸術に関連する分野である。実際に、ものをつくる活動を取り入れるこ

とを推奨したことを受けて、新たに授業内容を練り直すなどの創意工夫がなされる事例も見られた。しかし、教養科目は通常の講義形式で使用する教室が当てられていることもあり、踏み込んだ活動を導入することは、設備の制約上、困難であるようである。そのため、同分野を構成する授業の特性をさらに発揮できるように、授業支援者制度や教室の選定などを、改めて考える必要があると思われる。

#### 5-4 外国人住民を多く含む愛知県の地域的特性を踏まえた授業

愛知県は、2012年12月31日の時点で、外国人住民は192,041名であり、県内総人口に占める外国人住民数の割合は2.59%で、その内訳は、ブラジルが最も多く、中国、韓国・朝鮮、フィリピンが続いている（典拠：愛知県内の市町村における外国人住民数の状況[平成24年度末現在]<http://www.pref.aichi.jp/0000059106.html> より）。

このような特性を踏まえて、愛知教育大学では、初習外国語にポルトガル語が含まれているように、教員養成の見地から地域のニーズに応えうるカリキュラムが組まれている。教養科目においては、外国人住民に関連する学修領域・分野を設定していないものの、リテラシー学修領域の多文化リテラシー分野や現代的課題学修領域のなかに、外国人住民に対する理解を深めることを目標とする授業が含まれている。

これらの授業は、外国人居住地のフィールドワーク、外国人住民に対する聞き取り調査を、授業内・外の活動に取り入れている。学生の主体的な学びを促進することに力点を置く新教養科目をさらに充実させるためには、このような地域のニーズに応えながら、地域的特性を活かした授業が展開されることが望ましいと考えられる。

6-1成果と自己点検評価	
教員養成系大学の特性を活かした教養教育の開発および実践	◎
カリキュラム改革の検討	○
教養科目の目標の策定と公表 教員に対する明示化・周知(説明会等) 学生に対する明示化・周知(説明会等) 理念・目標等の議論の場の提供(セミナー等)  教養科目の改組案および実施計画の策定 関連部局等の組織的整備 全学的教育改革プログラムとの接合の検討	○ ○ ◎ ◎  ○ ○ △
主体的学びを促す教育方法の開発	◎
教育方法に関する情報提供 クlickerの使用法 ディスカッションの導入方法 教育方法のハンドブックの作成 教育方法に関する議論の場の提供 セミナー等の開催 公開授業の実施	◎ ◎ △ ○ ◎ ◎ ◎
教養科目の改組を支えるインフラストラクチャーの開発および改良	○
FDの推進	○
FDを通じた認識の共有化 教養科目のアンケート分析 選択システムのデータ調査・分析	◎ △ △
教養科目を支える組織整備	◎
教養科目部会の設置と運用 コーディネーター制度の設置と運用 リベラル・アーツ教育部門の設置と運用	◎ ◎ ◎
成果の発信・他大学等との情報交換	○
成果発信	◎
シンポジウムの開催 ウェブページにおける報告書等の公開 取り組み内容の他大学への波及	◎ ◎ △
情報交換	○
他大学講師招聘等を通じた情報交換 他大学の取り組みに関する情報収集	○ ○
総合	○

◎十分に達成できたもの ○ある程度達成できたもの △必ずしも十分ではないもの



## 6-2 今後の課題

自己点検の総括表(6-1)が示すように、4年間の活動を通じて、当初の計画内容を概ね遂行できたが、十分に達成されている段階にない課題、あるいは、さらに拡充していく必要がある課題も存在している。プロジェクト期間中に、試行的に実施できていたことを、期間終了後も持続的に展開していくことが望ましい。そこで、長期的な視野に立って、点検・改善していくべき点について整理したものを、以下に示すこととする。

### 6-3 今後の課題 (1) 未達成の課題について

- 教養科目の目標については、それらを策定のう え明示したが、授業担当者に継続的に周知していく方法の確立は、今後の課題として残されているところが多い。
- 教養科目を構成する学修領域・リテラシー分野の科目配置のバランスの問題については、履修システム等のデータを活用しながら、さらに検討していく必要がある。
- 教員養成系大学の特性を活かす教育プログラムを展開するにあたり、教養科目と専門科目の接続に関する議論が、これからの検討に待つところが多い。
- 主体的な学びを促す教育方法をさらに定着させるためには、T A・チューター制度、教員の教育に対する評価制度、研究活動とのバランスなど、多岐に渡る課題が残されている。

### 6-4 今後の課題 (2) 今後の展開について

- 教養科目の安定的な実施のためのカリキュラム編成の確認・改善。
- 教養科目の安定的な実施のための責任体制に関する議論。
- 主体的な学びを促すための e-ラーニング環境の整備(学びネットの使用促進など)。
- 教養科目に関するデータの蓄積と活用法の検討(教養科目アンケートの集計結果や履修選択システムのデータなど)。
- 教養科目の充実に関する全学的な議論の展開(卒業要件に占めるシェアや必要な単位数など)。

※次頁より、以下の資料を添付する。

資料① LA プロジェクト取組関係者一覧

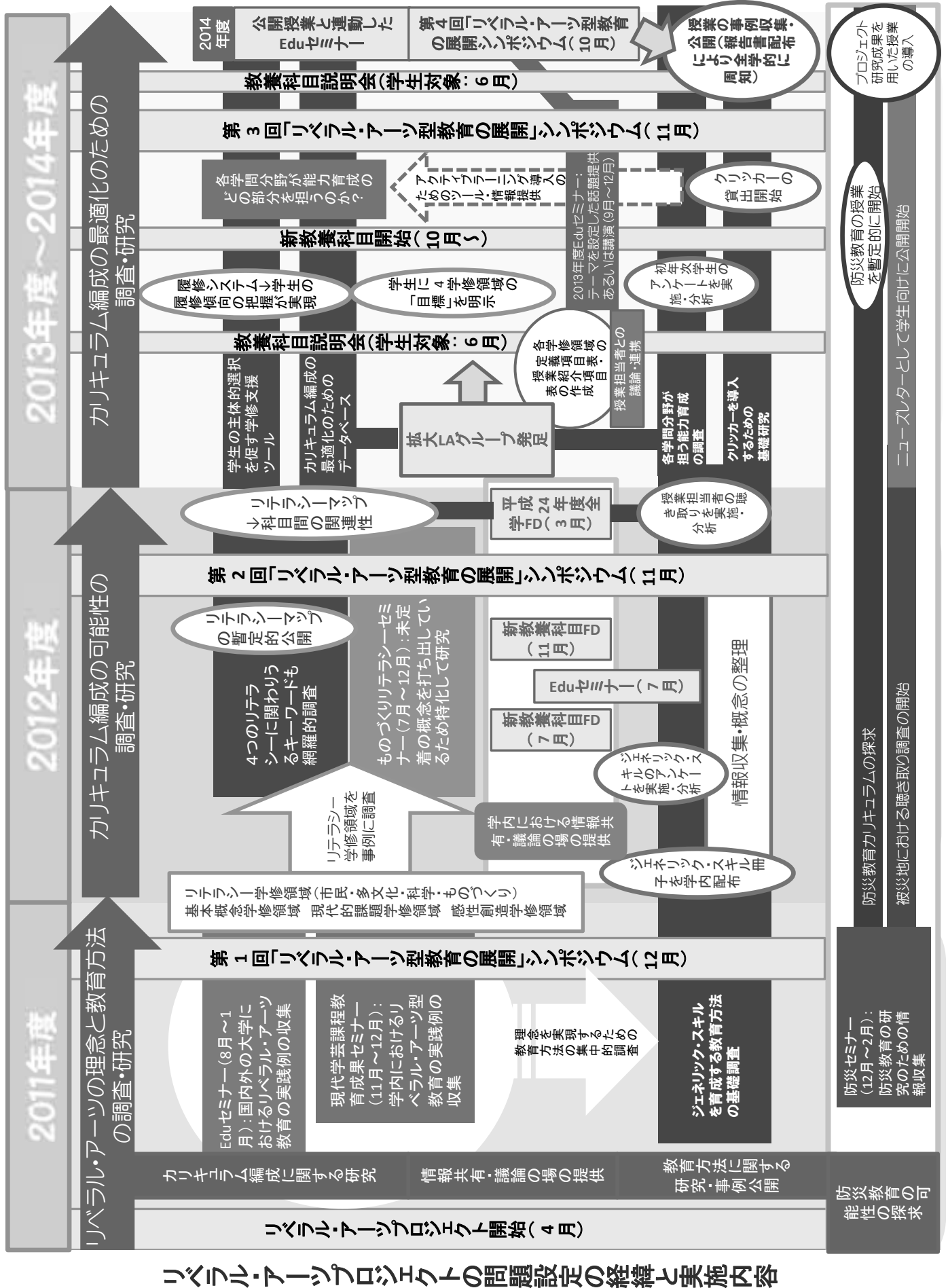
資料② LA プロジェクトの問題設定の経緯と実施内容

資料③ LA プロジェクトに関連する、イベント表(2011年度～2014年度)

## LA プロジェクト 取組関係者一覧

文科科学省特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」  
教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開

	26年度			25年度			24年度			23年度		
	学長・教育創造開発機構長 理事	後藤ひとみ※1 中田敏夫※1, 2	学長・教育創造開発機構長 理事・教育創造開発機構副機構長 理事	松田正久※1 折出健二※1 岩崎公弥※1, 2	学長・教育創造開発機構長 理事・教育創造開発機構副機構長 理事	松田正久※1 折出健二※1 岩崎公弥※1, 2	学長・教育創造開発機構長 理事・教育創造開発機構副機構長 理事	松田正久※1 折出健二※1 岩崎公弥※1, 2	学長・教育創造開発機構長 理事・教育創造開発機構副機構長 理事	松田正久※1 折出健二※1 岩崎公弥※1, 2	学長・教育創造開発機構長 理事・教育創造開発機構副機構長 理事	松田正久※1 折出健二※1 岩崎公弥※1, 2
事業推進 代表者	学長・教育創造開発機構長	後藤ひとみ※1	学長・教育創造開発機構長	松田正久※1	学長・教育創造開発機構長	松田正久※1	学長・教育創造開発機構長	松田正久※1	学長・教育創造開発機構長	松田正久※1	学長・教育創造開発機構長	松田正久※1
事業推進 責任者	理事	中田敏夫※1, 2	理事・教育創造開発機構副機構長 理事	折出健二※1 岩崎公弥※1, 2	理事・教育創造開発機構副機構長 理事	折出健二※1 岩崎公弥※1, 2	理事・教育創造開発機構副機構長 理事	折出健二※1 岩崎公弥※1, 2	理事・教育創造開発機構副機構長 理事	折出健二※1 岩崎公弥※1, 2	理事・教育創造開発機構副機構長 理事	折出健二※1 岩崎公弥※1, 2
事業実施 主体	副学長・教育創造開発機構副機構長	野田敦敬 ※1, 2, 5	学長補佐	清田雄治 ※1, 2, 5	学長補佐	清田雄治 ※1, 2, 5	学長補佐	清田雄治 ※1, 2	学長補佐	清田雄治 ※1, 2	学長補佐	清田雄治 ※1, 2
	大学教育研究センター センター長	小谷健司※2, 5	大学教育研究センター センター長	藤井啓之※2, 5	大学教育研究センター センター長 4月～9月 10月～3月	藤井啓之※2, 5	大学教育研究センター センター長 4月～9月 10月～3月	大澤秀介※2, 3, 4 藤井啓之※2	大澤秀介※2, 3, 4 藤井啓之※2	大澤秀介※2, 3, 4 藤井啓之※2	大澤秀介※2, 3, 4 藤井啓之※2	大澤秀介 ※1, 2, 3, 4
	LAプロジェクトメンバー リベラル・アーツ教育部門 兼任教員 日本語教育講座 教授 兼任教員 理科教育講座 教授 研究員(12月まで) 研究員(12月まで)	田村建一※3, 4, 5 高橋真聡※2, 3, 5 久保田祐歌 長谷川詩織	LAプロジェクトメンバー リベラル・アーツ教育部門 専任教員 社会教育講座 教授 兼任教員 日本語教育講座 教授 兼任教員 理科教育講座 教授 研究員 研究員	大澤秀介※3, 5 田村建一※3, 5 高橋真聡※3, 4, 5 久保田祐歌※5 長谷川詩織※5	LAプロジェクトメンバー リベラル・アーツ教育部門 兼任教員 日本語教育講座 教授 兼任教員 理科教育講座 教授 研究員 研究員 FD・学習支援部門 専任教員 社会教育講座 教授	大澤秀介※3, 5 田村建一※3, 5 高橋真聡※3 久保田祐歌 長谷川詩織	LAプロジェクトメンバー リベラル・アーツ教育部門 兼任教員 日本語教育講座 教授 兼任教員 理科教育講座 教授 研究員 研究員 FD・学習支援部門 専任教員 社会教育講座 教授	情報教育講座 教授 日本語教育講座 教授 理科教育講座 教授 研究員 研究員	情報教育講座 教授 日本語教育講座 教授 理科教育講座 教授 研究員 研究員	情報教育講座 教授 日本語教育講座 教授 理科教育講座 教授 研究員 研究員	佐々木守寿※1 田村建一※3 高橋真聡※1, 3 内山弘美 久保田祐歌	佐々木守寿※1 田村建一※3 高橋真聡※1, 3 内山弘美 久保田祐歌
	研究推進部 次長 研究推進部機構運営副課長 研究推進部機構運営副課長 研究推進部機構運営副課長	稲吉隆 伊藤純一 近藤修 井成浩文	教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長	稲吉隆 近藤修 井成浩文 原田美佳	教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長	稲吉隆 近藤修 井成浩文 原田美佳	教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長	稲吉隆 近藤修 井成浩文 知久あさみ	教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長	稲吉隆 近藤修 井成浩文 知久あさみ	教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長 教育創造開発機構運営副課長	稲吉隆 近藤修 井成浩文 知久あさみ
	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表 ※5 共通科目専門委員会 教養科目部会		※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表 ※5 拡大LA会議委員	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表 ※5 プロジェクトメンバー代表	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表 ※5 プロジェクトメンバー代表	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表 ※5 プロジェクトメンバー代表	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表 ※5 プロジェクトメンバー代表	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表	※1 大学改革推進委員会委員 ※2 教務企画委員会委員 ※3 現代学芸担当教員 ※4 プロジェクトメンバー代表



リベラル・アーツプロジェクトの問題設定の経緯と実施内容

2011年度～2012年度LAプロジェクト・イベント表

※ 講演者の肩書は講演当時のものです

計画	名称	目的	タイトル	内容	対象
2011年度					
リベラル・アーツ型教育理念の調査・研究	Eduセミナー	リベラル・アーツ型教育カリキュラム構築に向けた組織的取り組みの事例収集	第1回: 桜美林大学のリベラルアーツ―「なんで今さら」から「今だからこそ」へ	2007年度にリベラルアーツ学群を開設した桜美林大学の取組について、坂井 昭宏 氏(桜美林大学リベラルアーツ学群教授)が講演。	教職員・学生
			第2回: ハーバード・カレッジの一般教育―ディスカッション・セクションの教育方法を中心として―	教育助手であるティーチング・フェロー(TF)を活用し、ディスカッションを取り入れた授業を行うハーバード・カレッジの取組について、TF経験をお持ちの伊藤憲二氏(総合研究大学院大学先端科学研究科准教授)が講演。	教職員・学生
		リベラル・アーツ型教育の目標および対応する教育実践の事例収集	第3回: 初年次教育におけるジェネリック・スキルの養成―立教大学での取組を基に―	「入門演習」を導入教育として実施し、学科ごとに共通シラバスを用いる文学部の取組みを、河野哲也氏(立教大学文学部教育学科教授)が講演。	教職員・学生
			第4回: リベラル・アーツ教育の理念と実践―私の経験から―	複数の米国リベラル・アーツ・カレッジでの教授経験をお持ちの松井範博氏(帝京大学経済学部経済学科教授)が、ご自身のリベラル教育の理念や教育実践について講演。	教職員・学生
			第5回: 初等・中等教育における対話教育の可能性―教員養成大学で育むべき力とは―	教員養成系大学で学ぶ学生が特に身につけるべき力やその教育方法について、初等・中等教育における対話に基づく哲学教育を研究・実践する寺田俊郎氏(上智大学文学部哲学科教授)、土屋陽介氏(日本大学文理学部人文科学研究科研究員・茨城大学非常勤講師)が国内・海外の教育実践について講演。	教職員・学生
	Eduワークショップ	対話型授業の体験を通じた方法の修得	対話型授業の実践	本学学生がディスカッションやグループワーク等の対話による学習体験を通して、小・中・高の教育現場で対話型授業を行う手がかりを得ることを目的に、河野哲也氏(立教大学文学部教育学科教授)を講師として実施。	学生(教員)
	現代学芸課程教育成果セミナー	現代学芸課程の教育内容を調査および教育成果のアウトリーチ	第1回: ガラス工房の教育とリベラル・アーツ教育の展望	造形文化コースの教育成果について、ガラス工房での体験実習も交え、佐々木雅浩准教授が報告(コメンテーターは、美術教育の鷹巣純准教授)。	教職員・学生
			第2回: 造形文化コース教育とリベラル・アーツ教育の展望	造形文化コースの教育成果について、遠藤透教授(造形文化コース)が報告(コメンテーターは、美術教育の鷹巣純准教授)。	教職員・学生
			第3回: リベラル・アーツとしての経済学教育の展開	国際文化コース 国際社会履修モデルの教育成果について、水野英雄准教授(地域社会システム講座)が報告(コメンテーターは、社会科教育講座の土屋武志教授)。	教職員・学生
	防災教育構築のための調査・研究	LA防災セミナー	防災に関する知識の深化と意識の向上	第1回: 「地震とは」、「震災の体験から学んだこと」	①地震の基礎的知識および過去の地震災害・今後の地震予測について、戸田茂氏(本学准教授)が講演(「地震とは」)。②東日本大震災による釜石市の被災状況について、赤崎光男氏(釜石市市議会議員・震災復興特別委員会副委員長)が講演(「震災の体験から学んだこと」)。
第2回: DVD上映会 日本沈没				大震災に関する映画「日本沈没」(小松左京原作)のDVD版を震災予知から震災発生に至る過程で「自分ならどうするか」を想像させることを目的として上映。	学生
第3回: 東日本大震災と日本の転換―経済と教育の視点から―				東日本大震災やそれに伴う原子力発電所の事故によって未曾有の被害が生じた後の日本の行方を経済と教育の視点から捉えるため、岩田年浩氏(大阪経済法科大学客員教授)が講演。	学生・教職員
第4回: 自然災害と防災に関連した授業の実践―愛教大での事例紹介―				学部低学年次生を対象に本学が実施している災害・防災関連の授業内容について、星博幸准教授(理科教育講座)が紹介(本学で災害・防災関連教育を行う際に考慮すべき点について議論)。	学生・教職員
リベラル・アーツ型教育の場の提供	LAシンポジウム	教員養成系大学におけるリベラル・アーツ型教育の理念を検討する上での課題を検討・共有	教員養成系大学におけるリベラル・アーツ―教養教育の在り方を考える―	基調講演として「教員養成系大学とリベラル・アーツ」をテーマに、リベラル・アーツ教育の歴史や理念、教員養成系大学でリベラル・アーツ教育を行うことの意義を館昭氏(桜美林大学教授)と船寄俊雄氏(神戸大学教授)が講演。 パネルディスカッションとして「教師力を鍛える教養教育とは」をテーマに、コミュニケーション能力や批判的思考力などの汎用的スキルと、科学、市民、多文化、ものづくりの各領域のリテラシー(基礎的知識の運用能力)を鍛える教育に重点を置く本学の取組について、有効性、課題、現場からの要求との適合性について、横井邦彦氏(大阪教育大学教授)、清田雄治氏(本学学長補佐)、山田久義氏(本学教職大学院特任教授)が報告。	教職員・学生・一般

計画	名称	目的	タイトル	内容	対象
2012年度					
リベラル・アーツ型教育の調査・研究	Eduセミナー	「リテラシー」概念の研究・検討	第1回:リテラシーとは何か—批判的リテラシーを手がかりにして—	「批判的リテラシー」概念(単なる読み書きの能力ではなく、「ことばの獲得を社会的、文化的実践として、さらには、政治性や権力関係の文脈において理解するもの)」を参考にすることで、より豊かなリテラシー概念の構築を目指すために、竹川慎哉氏(愛知教育大学学校教育講座講師)が講演。	教職員・学生
		ジェネリック・スキルを育成する教育方法の検討・共有	第2回:ジェネリック・スキルの教育方法—授業実践報告に基づく検討—	ジェネリック・スキルを育成する教育方法について、本学教員の藤木大介氏(学校教育講座講師)、上田崇仁氏(日本語教育講座准教授)の報告に基づき議論を行う。	教職員・学生
	Eduワークショップ	ジェネリック・スキルを実践的に身に付ける機会の提供	【職員対象】「クリティカルシンキングを活かした問題解決の技法」	業務を行っていく上で生じる問題・課題に対して、クリティカルシンキング(情報を十分に吟味し判断する思考)を活かして原因を探り、解決策を見出すための方法を具体例に基づき学ぶワークショップを中井俊樹氏(名古屋大学高等教育研究センター准教授)と久保田祐歌(大学教育研究センター研究員)が実施。	職員
	ものづくりリテラシーセミナー	La科目を構成する「ものづくりリテラシー」の定義、およびカリキュラムの可能性の研究	第1回:ものづくり のまえ	本学大学院修了の美術作家、山本高之氏による講演。	教職員・学生
			第2回:エレン・リチャーズが今の世に伝えるもの—その思想と高等教育カリキュラムの可能性	住田和子氏(元北海道教育大学教授)による講演。公衆衛生学の確立とその教育に尽力した化学者エレン・リチャーズの思想を踏まえ高等教育カリキュラムの可能性についてお話し頂く。	教職員・学生
			第3回:ものづくりと言語表現の接点	中村吉秀氏(福井工業高等専門学校准教授)による講演。ものづくり教育における国語の役割についてお話し頂く。	教職員・学生
	科学リテラシーセミナー	学生の自然科学に対する関心の向上および「リテラシー研究」への反映	第1回:宇宙をめぐる過去/現在/未来『2001年宇宙の旅』DVD上映会	1969年のアポロ11号の月面着陸の一年前に公開された作品を鑑賞し、映画の宇宙再現と実際の見え方の違いなどを授業で得た知識と照らし合わせる。	学生
			第2回:人体のコズモロジー『ミクロの決死圏』DVD上映会	物質の縮小技術により人間が人体のなかに侵入、脳内出血の治療を完了するまでの過程を描いた作品を鑑賞し、そこで躍動的に表現されている人体内部の再現と自分が持つイメージとの違いを意識する。	学生
			第3回:「IF～」の世界を支える科学『バック・トゥ・ザ・フューチャー』DVD上映会	映画に登場する科学的視点として、タイム・スリップの論理に注意して鑑賞をする。	学生
			第4回:震災空間の地球科学『日本沈没』(2006)DVD上映会	気象の変化や地震のメカニズム、観測に基づく地震予知、沈没を免れる方法についての登場人物の語りから、自然現象の物理法則および防災の必要性について学ぶ。	学生
リベラル・アーツ型教育の全学的共有に向けた議論の場の提供	LAシンポジウム	4つのリテラシーの教育内容とジェネリック・スキルを育成する教育方法及び評価方法の検討	教員養成系大学におけるリベラル・アーツ—教養教育の内容・方法・評価のあり方考える—	基調講演として、安藤輝次氏(関西大学教授)が「学習成果を重視した教養教育とその評価—アルバーノ大学の事例をもとに」をテーマに講演。パネル・ディスカッション「新たな教養教育カリキュラム『4つのリテラシー』とジェネリック・スキルの検討」では、各4つのリテラシーを担当予定の教員4名が2013年度後期から実施される授業の構想について報告。	教職員・学生・一般
	新教養科目FD	4つのリテラシー科目の趣旨説明および教育内容・教育方法の検討	第1回:科学リテラシーと多文化リテラシーの教育内容および方法について	①菅沼 教生氏(理科教育講座教授)が「科学リテラシーをいかに教えるか、教育内容、教育方法について」をテーマに報告(科学リテラシー)。 ②川口 直日氏(日本語教育講座助教)が「日本社会における外国人労働者とその背景」をテーマに報告(多文化リテラシー)。	教職員
			第2回:市民リテラシーとものづくりリテラシーの教育内容および方法について	①前田 勉氏(社会科教育講座教授)が「『教養』と『市民リテラシー』—『ナショナルリズムを考える』—」をテーマに報告(市民リテラシー)。 ②太田 弘一氏(技術教育講座教授)が「ものづくりリテラシー」授業に向けての課題整理」をテーマに報告(ものづくりリテラシー)。 ③鎌田 敏之氏(技術教育講座准教授)が「ものづくりリテラシーと情報技術教育」をテーマに報告(ものづくりリテラシー)。	教職員
全学FD	新教養科目の理念や教育目標を共有し、リテラシーとジェネリック・スキルの獲得を目指す教育方法を検討	新教養科目の理念と授業内容	①清田雄治学長補佐が「新教養科目の理念と概要」を報告。 ②長谷川詩織研究員が「学習領域『リベラルアーツ』(La)リテラシー間のつながりの可能性」を報告。 ③久保田祐歌研究員が「ジェネリック・スキル育成に向けた教育方法」を報告。 ④高橋真聡教授(理科教育講座)が学習領域「基本概念」(Lb)の授業例として「起源と進化」を報告。 ⑤田村建一教授(日本語教育講座)が学習領域「基本概念」(Lb)の授業例として「言語とは何か」を報告。	教職員	

2013年度LAプロジェクト・イベント表

※ 講演者の肩書は講演当時のものです

計画	名称	目的	タイトル	内容	対象
2013年度					
リベラル・アーツ型教育理念の調査・研究	Eduセミナー	リベラル・アーツ型教育の方法	第1回: クリッカー講習会(初心者対象)—能動的学習を促す方法を学ぶ—	クリッカー初心者を対象として、クリッカーを授業で用いる意義や基本操作方法について、久保田祐歌研究員(大学教育研究センター)が紹介を行った。	教員
		リベラル・アーツ型教育の目標(「シティズンシップ」概念)の探究	第2回: 地球市民としての科学リテラシー	「太陽系」の広がりや近年多数発見されている(太陽系以外の)惑星系について、大西浩次氏(長野工業高等専門学校 一般科教授)に講演いただくことで、地球市民として身に付けておくべき科学リテラシーについて考える機会とした。	教職員・学生
			第3回: グローバル時代のシティズンシップ教育について—哲学的観点から—	大学におけるグローバル時代のシティズンシップ教育に必要な三つのポイント、①現代世界の正確な認識、②持続可能な世界へのビジョン、③社会に参加し変えていく力の養成について、LAプロジェクト教員の大澤秀介氏(社会科教育講座教授)が講演を行った。	教員
			第4回: よき市民のための? 科学リテラシー	「よき市民」を自然科学のなかでどのように捉え直すことができるのか、日常生活に関わる事例を交えながら、LAプロジェクト教員の高橋真聡氏(理科教育講座教授)が講演を行った。	教員・学生
			第5回: シティズンシップと教養教育	シティズンシップ教育の捉え方と新しい教養教育のあり方について、小玉重夫氏(東京大学大学院教育学研究科教授)が講演を行った。	教職員・学生
にリベラル・アーツ型教育の提議	LAシンポジウム	教員養成系大学におけるリベラル・アーツ型教育の理念を検討する上での課題を検討・共有	教員養成系大学におけるリベラル・アーツ—愛知教育大学における教養教育とリテラシー—	基調講演として「大学教育とリテラシー」をテーマに、を松下佳代氏(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)が講演を行った。 授業実践について、科学リテラシー分野の授業「自然の事象・事象について考える」担当の大鹿聖公氏(理科教育講座准教授)と、現代的課題学修領域の授業「自然災害と防災・減災の科学」担当の戸田茂氏(理科教育講座教授)が報告を行った。	教職員・学生・一般
各種FD・説明会への協力	新教養科目説明会	新教養科目の教育目標の説明	新教養科目説明会(教員FD)	まず、「新教養科目時間割表(2014年度を含む)および担当予定者一覧の確認」として清田雄治氏(学長補佐)が説明を行った。次に、各4リテラシーから、「市民リテラシーの定義づけ・説明案」について、山根真理氏(家政教育講座教授)、「多文化リテラシーの定義づけ・説明案」について、川口直巳氏(日本語教育講座講師)、「科学リテラシーの定義づけ・説明案」について、中野博文氏(理科教育講座教授)、「ものづくりリテラシーの定義づけ・説明案」について、佐々木雅浩氏(美術教育講座准教授)が報告を行った。	教員
		教養科目の概要・履修方法の説明	教養科目説明会(学生対象)	まず、「初習外国語科目説明会」として、担当教員4名が説明を行った後で、「教養科目全体説明会」として、清田雄治氏(学長補佐)が説明を行った。さらに、「教養科目(4リテラシー)個別説明会」として、以下の教員が説明を行った。 市民リテラシー分野: 堀内真由美氏(社会科教育講座講師)、阿部亮吾氏(地域社会システム講座講師)、清田雄治氏(学長補佐)、渡邊英幸氏(社会科教育講座講師) 多文化リテラシー分野: 北野浩章氏(日本語教育講座准教授)、川口直巳氏(日本語教育講座講師) 科学リテラシー分野: 中野博文氏(理科教育講座教授)、橋本行洋氏(数学教育講座准教授) ものづくりリテラシー分野: 太田弘一氏(技術教育講座教授)、佐々木雅浩氏(美術教育講座准教授)	学生

2014年度LAプロジェクト・イベント表

※ 講演者の肩書は講演当時のものです

計画	名称	目的	タイトル	内容	対象
2014年度					
リベラル・アーツ型教育の調査・研究	Eduセミナー	4学修領域の授業の教育方法の共有化と課題の検討	第1回: 基本概念学修領域「起源と進化」の授業	高橋真聡氏(理科教育講座教授)担当の授業「起源と進化」を参観した後で、授業担当者の報告に基づき、参加者とのディスカッションを行った。	教員・学生
			第2回: 現代的課題学修領域「地球環境問題を考える」の授業	岩崎公弥氏(地域社会システム講座教授)が担当する授業「地球環境問題を考える」を参観した後で、授業担当者の報告に基づき、参加者とのディスカッションを行った。	教員
			第3回: リテラシー学修領域: 市民リテラシー「暮らしのなかのジェンダー」の授業	堀内真由美氏(社会科教育講座講師)担当の授業「暮らしのなかのジェンダー」を参観した後で、授業担当者の報告に基づき、参加者とのディスカッションを行った。	教員
			第4回: 感性・創造学修領域「“現代の音楽”を気楽に体験してみよう」の授業	麓洋介氏(幼児教育講座助教)担当の授業を参観した後で、授業担当者の報告に基づき、参加者とのディスカッションを行った。	教員
			第5回: 基本概念学修領域「離散の世界(身近な離散数学)」の授業	須田庄氏(数学教育講座助教)担当の授業「離散の世界(身近な離散数学)」(担当: 第1回～第8回)を参観した後で、授業担当者の報告に基づき、参加者とのディスカッションを行った。	教員
			第6回: リテラシー学修領域: 多文化リテラシー「日本とアジア～『描かれた日本』」の授業	上田崇仁氏(日本語教育講座准教授)担当の授業「日本とアジア～『描かれた日本』」を参観し、授業担当者の報告に基づき、参加者とのディスカッションを行った。	教員
リベラルに向けた議論型の教育の全学的共有	LAシンポジウム	教員養成系大学におけるリベラル・アーツ型教養教育科目の授業実施に関わる課題を検討・共有	教員養成系大学におけるリベラル・アーツ—学生と教員で考える教養教育—	第一部「教員による授業報告」として、福田博美氏(養護教育講座准教授)が、現代的課題学修領域の授業「現代社会における健康」について、井上歩氏(数学教育講座講師)が、基本概念学修領域の授業「表現の世界(数と図形)」について、担当授業の報告を行った。 第二部では、「教員による実践報告と学生からの感想」として、国府華子氏(音楽教育講座准教授)が、感性・創造学修領域の授業「西洋クラシック音楽を聴こう」について報告を行った後、三浦明日香さん(初等教育教員養成課程教育科学専修2年)、紅谷李緒さん(特別支援学校教員養成課程2年)が、受講した感想を述べた。さらに、伊東正人氏(理科教育講座准教授)が、ものづくりリテラシー分野の授業「歴史を変えた物理実験」の報告を行い、これを踏まえた報告を、鯖戸小鶴さん(現代学芸課程日本語教育コース2年)が、他の受講者の意見も含め授業の感想を述べた。	教職員・学生・一般
説明会への協力	新教養科目説明会	教養科目の概要・履修方法の説明	教養科目説明会(学生対象)	まず、「初習外国語科目説明会」として、担当教員4名が説明を行った後で、「教養科目全体説明会」として、野田敬敬副学長が説明を行った。さらに、「教養科目(4リテラシー)個別説明会」として、以下の教員が報告を行った後、教務課担当職員が履修の流れを説明した。 市民リテラシー分野: 堀内真由美氏(社会科教育講座講師) 多文化リテラシー分野: 北野浩章氏(日本語教育講座准教授)、川口直巳氏(日本語教育講座講師) 科学リテラシー分野: 中野博文氏(理科教育講座教授)、ものづくりリテラシー分野: 遠藤 透(美術教育講座教授)	学生

## Ⅱ 2014年度の取組概要（1）—成果と課題—





## 2014年度プロジェクト活動一覧

### 【リベラル・アーツ・プロジェクト】

#### <リベラル・アーツ Edu セミナー>

○2014年5月27日(火)

第1回「基本概念学修領域『起源と進化』の授業」

講師：高橋 真聡（理科教育講座教授）

○2014年6月10日(火)

第2回「現代的課題学修領域『地球環境問題を考える』の授業」

講師：岩崎 公弥（地域社会システム講座教授）

○2014年6月26日(木)

第3回「リテラシー学修領域：市民リテラシー『暮らしのなかのジェンダー』の授業」

講師：堀内 真由美（社会科教育講座講師）

○2014年10月16日(木)

第4回「感性・創造学修領域『“現代の音楽”を気楽に体験してみよう』の授業」

講師：麓 洋介（幼児教育講座助教）

○2014年10月21日(火)

第5回「基本概念学修領域『離散の世界（身近な離散数学）』の授業」

講師：須田 庄（数学教育講座助教）

○2014年11月21日(金)

第6回「リテラシー学修領域：多文化リテラシー『日本とアジア～“描かれた日本”』の授業」

講師：上田 崇仁（日本語教育講座准教授）

#### <リベラル・アーツシンポジウム>

○2014年10月22日(水)

「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウム2014

「教員養成系大学におけるリベラル・アーツ—学生と教員で考える教養教育—」

「趣旨説明」

田村 建一（リベラル・アーツ・プロジェクトメンバー代表）

「教養教育における学修領域の教育目標と内容」

長谷川 詩織（大学教育研究センター研究員）

## 第一部 教員による授業報告

- 【報告①】現代的課題「現代社会における健康」  
福田 博美（養護教育講座 准教授）
- 【報告②】基本概念「表現の世界（数と図形）」  
井上 歩（数学教育講座 講師）

## 第二部 教員による実践報告と学生からの感想

- 【報告①】感性・創造「西洋のクラシック音楽を聴こう」  
國府 華子（音楽教育講座 准教授）
- 【感想①】  
三浦 明日香（初等教育教員養成課程教育科学選修2年）  
紅谷 李緒（特別支援学校教員養成課程2年）
- 【報告②】ものづくりリテラシー「歴史を変えた物理実験」  
伊東 正人（理科教育講座 准教授）
- 【感想②】  
鯖戸 小鶴（現代学芸課程日本語教育コース2年）

## 【教養科目説明会】

○2014年6月25日（水）

教養科目説明会（学生対象）13：30～15：30

- 「初習外国語科目説明会」      マイヤー オリバー（外国語教育講座准教授）  
   フレス アントワーン・ピエール（外国語教育講座准教授）  
   時 衛国（外国語教育講座教授）  
   二井 紀美子（外国語教育講座准教授）
- 「教養科目全体説明会」      野田敦敬（副学長）
- 「教養科目（4リテラシー）説明会」  
    市民リテラシー分野： 堀内 真由美（社会科教育講座 講師）  
    多文化リテラシー分野： 川口 直巳（日本語教育講座 講師）  
    科学リテラシー分野： 中野 博文（理科教育講座 教授）  
    ものづくりリテラシー分野： 遠藤 透（美術教育講座 教授）
- 「履修の流れ」                      教務課

## 教養科目の実施に係る取組の概要

愛知教育大学では、平成 23 年度から平成 26 年度にかけて、文部科学省特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」の支援を受けながら、「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」（以下、プロジェクトと記す）と題するプロジェクトを推進してきた。現代学芸課程で取り組まれてきたリベラル・アーツ型教育を教養科目に組み込み、それを組織的に実施するための体制を整備しながら、平成 25 年度後期に新しい教養教育のカリキュラムが開始された。開始に合わせて、教養科目の体系を見直すと共に、体系に即して目標を策定するために、各学修領域・リテラシー分野のコーディネーターを中心とする教員グループにより一連の検討作業を進めてきた。

平成 26 年度は、プロジェクト期間の最終年度であることから、教養科目が新たに開始され、どのような成果と課題があるのかを抽出・点検することに力点が置かれた。2 サイクル目の実施状況も踏まえながら、教員養成の質保証を実現する教育体制の確立を目指して、教養科目部会による成果と課題の検討、アンケート実施によるデータの蓄積と分析、公開授業を介した授業内容の点検を実施し、プロジェクト期間終了後も継続的に教養科目の実施状況を点検・改良するための仕組み作りが進められた。

第一に、カリキュラム改革担当副学長を含む教養科目運営の関係者が集まり、4 学修領域を軸とする教養科目の履修モデルの妥当性の度合いを検討する、PDCA サイクルの確立を目指した。4 月から 5 月にかけて、前年度の課題を共有したうえで資料を改善（Action）、5 月に学生説明会および教員に対する周知の計画を確定し（Plan）、6 月に学生説明会、10 月から 2 月にかけて教養科目を実施し（Do）、12 月から 1 月にかけて、成果と課題を報告する期間を設けて実施成果を検証（Check）、次年度の資料改善（Action）の土台を作った。各学修領域・リテラシー分野の連携を強化しながら、課題を明確化したうえで目標を設定し、計画、実行、検証するプロセスを確立することで、継続的な改善を進めていくための基礎を作った。



第二に、平成 25 年度に刷新した、学生を対象とする授業改善のためのアンケートの、教養科目に関する質問項目の見直しを行ったうえで、全授業においてアンケートを実施した。まず、その結果を、授業担当教員に個別にフィードバックし、授業担当者が授業内容を自己点検・評価することを促した。そのうえで、各学修領域・リテラシー分野ごとの傾向をグラフ化し、各々の成果と課題を抽出することで、組織的展開の程度を把握することを試みた。本報告書に、その概要を掲載しており、本報告書は学内の全教員に配布する予定である。それにより、全学的な情報・問題共有を推進し、カリキュラム編成の改良を継続的に行うための土壌としていく考えである。

第三に、教養科目の目標に即した授業を組織的に展開するために、プロジェクトとして行われていた Edu セミナーを公開授業と連動させ、教育方法等を教員間で点検し合い、教育改善につなげるための機会を設けた。公開授業の実施に際し、広報活動を充実させることで、教養科目担当者および関連分野の教員の参加を広く呼びかけた。Edu セミナーとして公開授業後に、コーディネーター教員および同学修領域・分野の教員が先導的役割を担い、各授業における目標設定、教育方法、直面している課題および解決案などを議論した。その結果を、授業担当者が報告書としてまとめ、大学教育研究センターFD・学習支援部門に提出した。このような作業を経ることで、複数の視点から授業内容を点検できるようにした。シンポジウムにおける報告および議論の内容についても、今年度のセミナー報告と共に冊子のなかに採録し、当日に参加できなかった教員が共有できるように全学的に配布した。

以下、後述される報告に先立ち、教養科目の実施に焦点を合わせ、どのような体制により、いかなる取組が推進されたのかを概観する。主に、①目標策定のプロセス、②教員間の議論の場の提供、③学生に対する情報提供という、3つの観点に分類して、それらの概要を報告する。

#### ①目標策定のプロセス

平成 25 年度から開始された新カリキュラムでは、4つの学修領域（リテラシー、基本概念、現代的課題、感性・創造）から科目選択をする「組み合わせ型」に変更された。さらに、リテラシー学修領域については、市民リテラシー、多文化リテラシー、科学リテラシー、ものづくりリテラシーの4分野に細分化された。教養科目を受講する学生は、大学入学以前の履修状況が一定しておらず、各自の関心も多様である。それゆえ、各カテゴリーの趣旨を明確に定め、目標を分かりやすく提示することが要された。新カリキュラムの開始に向けて、「学び続ける」ための基礎を備えるため、教養科目の目標を、A) 課題を発見する力、B) 情報を読み取る力、C) 複眼的に物事をとらえる力、D) 他者と協働する力（平成 26 年度の時点）という、4つの観点から策定するに至った。

また、各学修領域・リテラシー分野のコーディネーター教員を中心に、授業担当者が議論を重ねながら、各領域・分野の目標を「知識」「技能」「態度」の3つを軸に定めた（各領域・分野は、それぞれの特性に応じて修正を加えているため、必ずしも、「知識」「技能」

「態度」の3観点により整理されているとは限らない)。このような作業を経ることで、本学内にある知的リソースを活用しうるカリキュラム編成の実現を目指すと共に、授業担当者が授業構想を自己点検し、新教養科目の開始に向けて修正を加えていけるようにした。これらの目標の詳細は、Ⅱの「学生説明会の実施内容」のなかに掲載されているリーフレットにて確認することができる。

## ②教員間の議論の場の提供

新たに開始された教養科目は、学修領域およびリテラシーの特性に対応した教育目標が設定されているため、授業担当者は、それを踏まえて授業内容を計画することが求められる。プロジェクト期間中、新教養科目の趣旨に対する理解を求めると同時に、目標設定およびカリキュラム編成の方向性を定めるための材料を集めるという2つの目的を達成するために、FD活動および議論の場が設けられた。

まず、大学教育研究センターリベラル・アーツ教育部門が中心となり企画されたのが、Eduセミナーを始めとするセミナー、各年度の総括を兼ねたシンポジウム、新教養科目の趣旨等を周知するためのFDである。学外の専門家の講演により、教員の専門性の多様な展開を探ると共に、教養科目を担当する予定の教員自身が、構想あるいは実践を報告することで、教員間で情報や課題を共有しながら授業改善に取り組んだ。セミナーおよびシンポジウムの概要は、本報告書の「Ⅲ 2014年度の取組概要(2)―情報・議論の場の提供―」にて詳述されている。

また、各学修領域・リテラシー分野に2名のコーディネーター教員を配置することで、各領域・分野内で情報や問題を共有するための制度構築を進めた。新たな教養科目の開始に向けては、コーディネーター教員を中心に授業担当予定者も目標設定の検討に加わることで、各領域・分野のなかで授業を無理なく配置すると共に、教員が趣旨・目標等を理解したうえで授業の準備を行うことが出来るようにした。各領域・分野の活動については、Ⅱの「学修領域における取組と課題」にて、コーディネーター教員による報告が掲載されている。

さらに、今後の教養科目の質的向上のための議論の土台とするべく、学生対象の授業改善のためのアンケートに新たに加える関連質問項目の内容についてFD・学習支援部門と共同で検討した。プロジェクト期間中の取組としては、教養科目に該当する質問項目を、学修領域・リテラシー分野ごとに再集計した結果を、シンポジウム等で配布するなど、各領域・分野において組織的に授業改善に取り組むための資料提供を行った。平成25年度(1年後期)、平成26年度(2年前期)のアンケート結果については、Ⅱの「教養教育のカリキュラム編成の概要―授業構想の傾向と学生の自己評価から」のなかに一覧を掲載している。

## ③学生に対する情報提供

本学は、教員養成系大学であることから、相対的に教員を志望する学生が多く、それゆえに、教員としての仕事と直接の関連が見え難い教養科目の重要性を、どのように伝える

かが課題のひとつであった。そこで、プロジェクト期間中、②の取り組みと同時進行する形で、学生に対する教養科目の趣旨説明の方法の策定が行われた。平成 26 年度は、6 月 25 日に行われた学生説明会に向けて、リーフレットの説明内容を整理すると共に、学生自身がある場で考えることができるように、スライド活用法や説明内容を大幅に見直した。

また、本学が教員養成系大学であるという位置づけ上、今後、教員が防災に関する知見を有することが一層求められるという想定のもと、プロジェクト初年度より、東日本大震災の被災地にて小学校・中学校・高校教員に対する聴き取り調査を行い、報告書を作成すると共に、その内容をニュースレター形式にて学生がウェブ上で閲覧できるように整理した。それらを、現代的課題学修領域の「自然災害と防災・減災の科学」のうち、2014 年 7 月 23 日実施の授業「震災時の学校」で使用し、学生の防災意識を高めると共に、教養科目としてどのような防災教育を展開できるのか、考察を進めた。授業実践を含めた報告については、Ⅲの「防災教育の調査と実践」が該当する（ニュースレターについては、今年度に編集・掲載したものを採録している）。

## リテラシー学修領域の取組と課題（市民リテラシー）

コーディネーター 青嶋 敏（地域社会システム講座）

コーディネーター 渡邊 英幸（社会科教育講座）

### 「市民リテラシー」の概要

共通科目 La「市民リテラシー」は、2014年度現在、10名の教員によって授業が運営されている。「リテラシー」とは狭義には「読解力」を意味するが、本学教養科目における「市民リテラシー」は、現代の民主主義社会において「市民」として生活していくために必要な基本的概念や知識を理解する力と、それを実際に活用できるスキル—いわば「市民である」ための教養を意味している。そして、ここでいう「市民」には、参政権を持つ主権者という近代的な「市民」のみならず、そこから排除されてきた女性・少数者・社会的弱者をも含めた形で、多様性と主体性を相互に承認しあい、社会に参画する人々が含意されている。グローバル化が進展する世界にあって内在・表出する「差異」や「境界」、あるいは「格差」の存在を見つめつつ、差別なき他者理解と、抑圧なき共生社会の実現を目指して、自ら積極的に知識を獲得して社会に関与しようとする「市民」である。

こうした「市民」となるためには、異なる意見を抑圧したり、暴力的な方法に訴えたりするのではなく、問題の本質や成り立ちを客観的に理解し、対話や討論を通じてその解決策を模索する姿勢が必要となる。言うまでもなくそれは、一人一人が「市民」であることを求められるばかりでなく、将来多くの「市民」を養成する立場となる教員養成系大学の学生にとって、とりわけ必須な素養となるはずである。

当グループでは、かかる「リテラシー」獲得のための授業の構築を目指し、2013年度の立ち上げ当初から、担当者相互間で各授業の内容や方法について活発な意見交換や認識のすり合わせを行ってきた。個々の授業テーマは担当者に委ねられたが、その内容は期せずして、以下のごとく「市民」や「リテラシー」といった基本的概念から、国民の司法参加、ジェンダー、ナショナリズム、多文化共生社会、国際関係論など、現代市民社会に関わるアクチュアルな諸問題を幅広く覆うものとなった。

- ・リテラシー論：清田雄治「読書と市民生活」、岡田宏太郎「現代日本の市民と政治」
- ・「市民」概念と生き方：徳久美生子「自己の生き方と市民リテラシー」
- ・リーガルマインド：青嶋敏「国民の司法参加」
- ・ジェンダー論：山根真理「共生のためのジェンダー論」、堀内真由美「暮らしのなかのジェンダー」
- ・多文化共生社会：阿部亮吾「グローバル化と「移民の時代」の日本を生きる」
- ・ナショナリズム論：前田勉「ナショナリズムを考える」、渡邊英幸「歴史学の現在とナショナリズム」
- ・国際関係論：福島崇宏「国際政治—アクターの多元化と多様化」

### 各授業の取り組み



次に各授業の取り組みについて報告したい。授業テーマや指導法はさまざまであるが、そこには幾つかの共通点を見出すことができるように思われる。それは第一に文字資料や図像・データの読解を通じた「読む」力の養成である。例えばテキスト読解を通じて背後の世界を読みとる（清田）、氾濫する情報を読み解くメディア・リテラシーの習得（岡田）など、「リテラシー」の涵養に主眼を置いた授業があり、ほかの授業でもテキストや情報の読解を求めるものが多い（青嶋・山根・堀内・阿部・前田・渡邊）。

第二に、発表・討論の重視である。テーマを定めたグループ・ディスカッションやプレゼンテーション（清田・青嶋・山根・徳久・阿部・前田・渡邊・福島）、コメントペーパーなどを用いた教員とのコミュニケーション（岡田・山根・堀内）など、多くの授業で学生参加型の学びや、教員との間で意見を交わす双方向の授業が試みられている。

第三に、現実的な体験や関心の重視である。多くの授業は教室での講義や討論が中心であるが、中には裁判の傍聴（青嶋）や移民女性の労働環境の現地観察（阿部）など、教室を飛び出してフィールドワークを行う授業もある。また教室を出ないまでも、貧困や国際問題、ジェンダーなどアクチュアルな問題への関心を高める授業が多い特徴がある。

そして第四に、以上の三つの方法を通じてなされる、批判的思考力の養成である。このグループの多くの授業では、制度や慣習の殻に覆われた「常識」を疑い、他者との関わりの中で直面する問題を認識することが求められている。

#### 成果と課題

多くの授業では、テーマに関する基礎的な理解や、問題の存在への「気づき」が受講生に認められた。これは授業担当者による関心の掘り起こしや常識の相対化など様々な働きかけ・工夫の成果であろう。また教員志望という立場から、ディスカッションに積極的に参加したり、社会問題に関する鋭敏な関心を示したりする意識の高い学生も認められた。これは教員養成系大学における教養教育がもつ大きな可能性を示すものである。

だがいくつかの課題も報告されている。その内容は大きく三つに分かれる。一つは教員を志望する学生の中にも、専門や個性によって、関心の高さに大きな「差」が認められた事実である。「批判的思考」は権威や常識に対してのみならず、それまでの自己の無関心や凡庸さにも向けられるべきものである。多くの場合、それはいくらかの「痛み」を伴う。学生の中には、こうした経験と向き合うことに拒否反応を示す者も見受けられた。問題の存在を認識することと、自己の問題として考えることの間には大きな隔りがある。

二つ目は、一つ目と関連するのだが、学生の振り分けの問題である。現在の履修方法では、グループ毎に学生の選択肢が固定されてしまうため、学生によっては前提となる知識が不足していたり、授業に参加する意志が欠如していたりする場合も見受けられた。選択の範囲をもう少し広げ、履修した以上は相応の関心と積極性を求める形が望ましい。

三つ目は、担当教員と負担の問題である。現状では、授業担当と負担計算の基準が明確化しておらず、負担の平均化がなされていないとする問題提起が複数寄せられた。今後の安定的な授業運営のためにも、教員養成系大学の強みを活かしたりベラル・アーツ教育の充実のためにも、教養科目に対する全学的な認識の共有と基準作りが求められると考える。

## リテラシー学修領域の取組と課題（多文化リテラシー）

コーディネーター 川口 直巳（日本語教育講座）

コーディネーター 真島 聖子（社会科教育講座）

### 「多文化リテラシー」の概要

共通科目 La「多文化リテラシー」は、2014年度現在13名（専任7人、非常勤6名）の教員で授業が運営されている。「多文化リテラシー」は、「人種」「言語」「宗教」「教育」「性」「社会・経済的格差」「移民」など多岐に渡る問題を対象としており、「文化」の違いや異質性をどのように理解し、それらにどのように向き合うかを各授業から学ぶことを目指している。「文化」というと、食べ物や音楽、服装、言語、工芸などの「目に見える文化」と人間関係や時間概念、礼儀、問題解決の行い方、美意識などの「目に見えない文化」に分けられるが、「目に見える文化」と「目に見えない文化」を知るだけではリテラシーを身に付けたことにはならない。自文化・自国文化を中心化した思考から脱却し、多様な文化の存在を承認し、対等・平等に考える姿勢を身に付け、他者と意見交換する力を備えることを目標としている。多文化リテラシーの具体的な教育目標として、①「理解」、②「他文化との接触」、③「文化を相対的に捉える」の下記3点が掲げられている。

- ①理解：グローバル化した世界に存在する、様々な文化に関する知識・情報を収集・理解し、他者とコミュニケーションをとりながら対話により問題処理・解決するための基礎を備えることを目標とする。
- ②他文化との接触：映像分析、生活様式の体験、聞き取り調査等を通じて、自己のものは異なる文化に実際に接し、文化の差異を理解してコミュニケーションをとるための基礎を修得することを目指す。
- ③文化を相対的に捉える：自文化・自国文化を中心化した思考から脱却し、多様な文化の存在を承認し、対等・平等に考える姿勢を身に付け、他者との意見交換する力を備えることを目標とする。

### 各授業の取り組み

教育目標に向かって、下記の授業で様々な取り組みが行われている。

- ・異文化への驚きと理解ーロシアと日本ー
- ・ブラジルの社会と日系人
- ・日本社会における外国人労働者とその背景
- ・世界の諸言語①、②
- ・中国の言語概論
- ・古代ギリシャのポリス文化
- ・イスラム社会と文化
- ・現代中国社会の諸問題

- ・フランスの歴史・地理・文化
- ・言語と文化
- ・日本語を考える
- ・ロシアの社会と文化①、②
- ・日本とアジア～「描かれた日本」

授業名を見ても明らかなように、多文化リテラシーの授業で扱う内容は、「文化」「歴史」「社会」「地理」「宗教（日本・海外）」「言語（日本語・外国語）」「現代社会における問題（日本・海外）」など多岐に渡っている。各教員はそれぞれの授業において創意工夫を行い様々な取り組みをしている。

言語を扱う授業においては、他国の言語文化と自国の言語文化について比較することができる力、自国の文化の代表である母語（日本語）に対して客観的な認識力を培い、日本語の現状への観察力と分析力などを養っている。普段何気なく使っている会話や表現に対して「なぜ？」という姿勢を持つことにつながっている。

海外の社会と文化を扱う授業においては、諸外国との比較から自国の社会、文化の特質を相対的に把握する力、批判的に物を見る力と、論理的に考える力の獲得や多様な文化や価値観に対して柔軟に対処するための思考力の獲得、積極的な理解が誤解による不必要な対立の回避につながることを認識などが教授されている。

以上のような様々な授業のなかで、共通している点は、表面的な知識を身に付けるだけでなく、物事の本質を考える力の獲得を目指しているという点である。自ら考えることをどの授業においても重要課題としている。

### 各授業での成果

様々な授業における取り組みから、いくつかの成果があがっている。下記にあげるのはそのうちの二例である。

「日本社会における外国人労働者とその背景」では、学生達は授業開始時には「外国人労働者」を「外国人労働者の利益（金もうけ）」という視点でしか捉えていなかったが、日本の経済状況や人口問題、少子高齢化などの様々な問題と関連していくうちに広い視点で「外国人労働者」を考えることができるようになっており、学生達の変化が見受けられた。

「日本とアジア～「描かれた日本」」では、情報が伝わらない中での日本の描かれ方を紹介し、自分たちが他者について「知っている」と思いこんでいる情報のあいまいさに気付くとともに、客観的批判を伴わない中で行われる教育の怖さについて実感できたことが授業後のレポートから汲み取れた。

### 今後の課題

現在の大きな課題としては「学生の差」があげられる。学生の前提知識の違いにおいては、担当教員がそれぞれ工夫して対処しているが、学生によっては「知識の獲得」止まりで完結してしまうケースもある。人数的な問題もあり、そうした状況の確認や、その後のフォローアップまでもっていけないこともある。「自ら考える力」の獲得に向け、授業内容を工夫している必要がある。

## リテラシー学修領域の取組と課題（科学リテラシー）

コーディネーター 中野 博文（理科教育講座）

コーディネーター 橋本 行洋（数学教育講座）

科学リテラシー分野で開講されている授業は、自然科学を中心とした、物理学、化学、生物学、地学（地球科学）、天文学、統計学である。共通の教育目標を決定する上で考慮した点は次の通りである。

疑問を認識し、新しい知識を獲得し、科学的な事象を説明し、科学が関連する諸問題について証拠に基づいた結論を導き出すためには、科学的知識や概念が必要である。また、科学的な能力は、科学的な疑問を認識し、現象を科学的に説明し、証拠に基づいた結論を導き出す能力である。この科学的な過程（方法）には、例えば、実験・観察の手続きやデータとその解釈および限界、相関と原因、様々な理論等が含まれる。さらに、科学技術に深く根ざす今日の社会を生き抜くため、科学や技術の関わる政策や日常生活に関する問題について興味や関心を持ち、意思決定や行動する能力が重要である。

以上のことより、共通の教育目標を以下の様に決定した。

- ・【科学的知識または概念】  
多様な自然現象や進歩する科学技術を理解するために、自然科学の基本的な知識や概念を理解する。
- ・【科学的プロセス（科学的能力）】  
習得した科学的知識や概念を活用する能力を身につける。
- ・【状況認識と科学的態度】  
社会的問題や日常現象などについて、状況認識し、科学的態度で意思決定するための能力を身につける。

以下に、取組みの内容と今後の課題を記す。

### 授業内容と成果について

授業内容や授業方法については、自然科学各分野の特性の違い、広範囲に渡ることなどから、統一しておらず、担当教員の創意工夫に任せている。それらの取組のいくつかの例を以下に示す。

「自然の事物・現象について考える」において、受講生が専門外の学生であるので、生活に必要な科学など一般的な科学事項についてできるだけ分かりやすい話をし、体験的な学習を授業に入れた。また、自分たちの成果を人に説明できる様に「科学コミュニケーション」の必要性も強調される様になってきているので、プレゼンテーション活動（4人グ

グループで授業最初の1時間でプレゼンテーションを作成し、各グループ1分間のプレゼンテーションを行った)を授業に組み込んだ。

「生命の科学」では、授業内容が理解しやすい様に、分子模型を利用した。また、他者と協力して行動できる様にするために、クラス全体で協力する様な巨大な分子模型の組み立てを試みた。具体的には、数人のグループで $\alpha$ -グルコースの分子模型を組み立て、次に2つのグループのものを組み合わせ2糖であるマルトース、さらに2糖と2糖で4糖、8糖、そして16糖、この様にして教室内を横断するデンプンの分子模型を作成することができた(右の写真)。さらに、授業内でもなるべく分子模型を使い、3次的に生体分子の構造が認識できる様にした。そして、マスコミで話題になっていること(例えば、科学者や企業の不正行為、実験ノートの書き方、危険ドラッグ、食品偽装等)を授業で扱い、日常生活において科学的態度でものごとを見る能力が身につくように授業を展開した。

また、科学的な実験や観察を通じて、自然界における法則性を理解する能力を養うことは非常に重要である。「私達の体をつくる細胞」において、「顕微鏡の使用法について学び、各自が実際に操作する事によって自主的に学ぶ力」、「様々な細胞を観察し、特徴を捉えることによって、自然現象を注意深く観察する能力」、「グループ内で話し合い、正解を探るコミュニケーション能力」を養うことを目的とした実習を行った。「生命の科学」では、先に述べたデンプンの分子模型の作製し、分子のイメージをつかんだ上で、補講としてデンプンに関する実験(定性試験、アミラーゼによる加水分解とその生成物との比較)を行った。さらに、「やり直し物理学」では、できるだけ実験(振子の実験のデータを取りエクセルでまとめる、ピンホールカメラ、クリップモーター、霧箱での観察)を交えながら、難しい数学は使わない様に留意して授業を行った。



#### 今後の課題

ある科学リテラシーの授業の「授業改善のアンケート」の集計結果から、この授業のための週辺りの学習時間(課題・レポートに費やす時間も含む)が、0時間26%、1時間以内49%、1~2時間18%、2~3時間0%、3時間以上0%と非常に少ないことが明らかになった。対応する学期の教養科目の平均が、0時間36%、1時間以内34%、1~2時間14%、2~3時間4%、3時間以上4%であるので、一般的に教員が想像する以上に学習していないようである。今後、自ら興味を持って学習できる様な課題等を工夫する必要がある。

## リテラシー学修領域の取組と課題（ものづくりリテラシー）

コーディネーター 太田 弘一（技術教育講座）

コーディネーター 遠藤 透（美術教育講座）

「ものづくりリテラシー」は、現実の諸問題を科学と技術を使って解決する為の道理を考察し、実現する為の方法を創造する能力を身に付けることを目標とします。素材・技術・道具の扱い方を学ぶ、ものづくりの意義と問題を見出し未来の生活のあり方を構想する、使用する立場にたち「もの」を評価する等、それぞれの授業のテーマに即して考察を深め、自己の生活を意識的に振り返り、倫理的な視点に基づいて判断し行動する姿勢を身に付けます。

本学における「ものづくりの定義」

「もの」とは、製造物・農作物・工芸品などから絵画・彫刻や音楽、文芸などの精神世界と関わる芸術作品、または情報・社会・システムなど、人が作り出す概念やサービスまでも包括する。

### 目標1 素材・技術・道具についての理解

素材・材料に対する科学的知識、素材・材料を加工し、組み立てる技術、「もの」が作られた背景や歴史、環境・食糧・エネルギーなど「もの」の背後にある社会問題を理解することを目標とします。

### 目標2 ものづくりのプロセスの体験

問題発見→論理的思考→問題解決→批判的思考といった「ものづくり」における一連の流れを理解し、経験を通じてそれらの能力を習得することを目標とします。

### 目標3 社会における対応

問題解決の様々な可能性を考察し、制作や実験等の経験を通じて、解決に必要な手段を自分で発見できる力を備えることを目標とします。

### ① 教育目標の実現のための取り組み

- 1) 科目の開始当初に、担当教員で会議を行い、また、メールでの意見交換も行って、教養科目とリテラシー科目の体系と意義の確認と、その中でのものづくりリテラシー科目の位置づけを確認し、ものづくりの定義を含めた教育目標についての内容を共有できるように努めた。
- 2) 学生向け教養科目説明会での分かりやすいプレゼンテーション資料を作成して、教育目や内容についての解説を行った。
- 3) 各授業担当者が目標の実現に向けて、以下のような授業改革に取り組んできた。
  - ・問題発見力や論理的思考力・批判的思考力を養う授業を行う。
  - ・授業は受講生との対話を基本とし、疑問を投げかける形式とする。
  - ・興味が持続できるよう、1回1テーマ完結とする。
  - ・緊張の緩和に配慮し、90分間の授業で集中を切らさず、受講生を観察しつつ進行させる。

- ・興味を持てるよう、実験や制作を行う。
- ・毎回の授業がどのような内容であったのかを記録するよう求め、ノートの写真を送信させる。
- ・ものづくりに関して人間の持っている能力と欠けている能力について考察し、自分たちの行動を考える授業とする。

② どのような成果がえられたのか

1) 「ものづくり」についての幅広い内容、それを支える様々な知識と技能があることを知り、その中のいくつかについて、実践的・理論的に学んで身につけることができ、もっとも基本的なところで社会を支えている「ものづくり」に関する教養の力、あるいは身につけたリテラシーやスキルは学生の将来を支える能力につながると思われる。「科学リテラシー」とのつながりでの理解がさらに大きな力になると考えられる。具体的には以下のようなこともある。

- ・リベラルアーツ授業の特性として専攻をまたがる科目であることから、多様な考えを受講生相互が知ることができる。
- ・受講生に、考えさせられる授業だったとの声があった。
- ・授業アンケート集計結果に現れない肯定的評価があることを知ることができた。
- ・学生は熱心です。今期が始めての授業であり手探りで進めている。

③ どのような課題がのこされているのか

1) 授業の人数が多いために、スキルに関わる体験的学習での全員実施に困難がある場合がある。

2) 最近の学生の傾向として、考えようとしなない傾向や論理的な思考が苦手な傾向があり、単純な説明や作業は喜んで行っても、問題解決的な学習がなかなか成立せず、多人数である事もあわせて、ものづくりリテラシーの基礎となる技術や化学の方法論や認識論を理解させるための考えさせる授業の展開についてよい方法を検討する必要がある。

- ・受講生の期待に寄り添わないことで軋轢を生むことがある。
- ・学習支援サイトの運用を行ったが、受講生の中にはコンピュータの操作について対応できない学生が多数いる。
- ・退職される先生の授業の後任についてどのようにするのか、担当教員組織について検討をお願いしたい。
- ・テーマの選定と考えるための予備知識をいかに与えるかが課題である。

ものづくりリテラシーは、造形文化、宇宙・物質化学、技術、理科に所属する教員で構成されているため、授業内容は多岐にわたる。学生はシラバスで授業内容を読み解き選択するが、必ずしも第一希望の授業を選択できるとは限らない。すべての受講生を満足させるシステムを構築することは不可能であり、教員が教えたかった授業内容と的外れた学生との間にずれが生じることがある。担当教員は受講生に「いかに興味を持たせることができるのか」が鍵となっている。

## 基本概念学修領域の取組と課題

コーディネーター 田村 建一（日本語教育講座）

コーディネーター 高橋 真聡（理科教育講座）

この学修領域で開講されている授業が扱う分野は、数学、化学、生物学、情報科学、宇宙物理学、哲学、論理学、言語学と多岐にわたっているが、共通の教育目標として次の点を掲げている。

- ・ 私たちの知識や考え方の根源にどのような基本的概念が存在するのか、その概念の形成過程・時代背景・変遷も探りながら考える。
- ・ 抽象性の高い概念が、どのように言語化、記号化、数式化されているかについて学び、それらを能動的に使用する技能を身に付ける。
- ・ 基本的な概念についてのこれまでの捉え方を批判的に検討することをとおして、客観的に物事を見る態度を身に付ける。

以下、全員ではないが授業担当者（数学3名、情報科学、化学、言語学各1名）から寄せられた報告に即して、取組みの内容と今後の課題を記す。

### 授業方法について

授業方法に関して統一性は図られておらず、各教員の創意工夫に任せられているが、以下のような取組みがなされている。例えば数学や情報科学では、「結ばれた紐を区別するにはどうすれば良いのか、紐をいじりながら考えさせる」といった作業を取り入れるなど、手を動かす活動をとおして学生が授業に参加することを促す工夫がなされた。

学生による発表やレポートに関しては、例えば数学では、「身近な事例から、数学的な問題に焦点をあて、実際に手を使って複数人で考えてもらい、それを全体の前で発表」させたり、「実生活に用いられている数学を能動的に考えてもらい、それをレポートとして提出させた」りした。言語学では、指定した本の内容について各章ごとに学生に割り当て発表させた。化学では、授業で取り上げたテーマについて「自分の意見を求めるような出席レポートを書かせて、講義への積極的な参加を促した」。

### レポートに関する問題点

発表やレポートを課すのは、学生に授業で学んだ基本概念を能動的に使用する技能を身に付けさせるための方法として有効であるが、1クラスに45～50人の学生が受講するので、発表者は一部の学生に限られるし、レポートはたとえ字数に制限を加えるにしても採点に膨大な時間が取られるため、そう何度も課すことはできない。というのは、授業内容とは別の次元で、レポートの書き方、あるいは文章の書き方に問題のある学生もいて、それを直そうとすると時間がいくらあっても足りなくなるのである。したがって、きめ細か



い手直しは断念せざるを得ない。

アメリカのリベラルアーツ型の大学で必修科目として課している **Academic Writing** に相当する内容の指導は、本学では初年次演習、教養科目、専門科目のそれぞれに委ねられているが、具体的に何年生のいつまでにレポートの書き方の何を身に付けなければならないか、ある程度統一的な基準が必要であるように思われる。もちろん、すべての授業がレポートを課さなければならないというわけではないが、レポートを課す以上は、教員によって書き方の指導内容が異なるのは望ましくないと考える。

#### 授業内容と成果

授業内容に関しては、例えば数学では「高校までの数学の授業に多くみられるような計算練習に時間を割くのではなく、公式の成り立ちについて複数の視点から議論をしたり、何が本質なのかを考えたりすることに重点を置いて」講義がなされたり、あるいは「一見抽象的に見える概念を実生活への応用と共に理解してもらおう」努力がなされた。情報科学では、思考力の育成を目標に、「その手段として、情報科学の分野で用いられているアルゴリズム的考えや論理名・物理名、仮想化、透明化などの考えを講義した」。言語学では、女ことばや方言、外来語などの使用がもつ社会的な意味合いを探ることに重点を置いた。

こうした取組みに対して、以下のような成果が得られた。「不変量という概念に楽しみながら触れたことで、その意義を理解し、またこの概念を日常から探そうという態度を育んだ」(数学)。「(実生活に用いられている数学について)多くの題材に関するレポートが集まり、解説した概念への理解、興味を高めることができた」(数学)。

#### 今後の課題

今後の課題としては、化学から、文系の学生に教える場合には工夫が必要であることを指摘したうえで、「敬遠しがちな内容の科目でも受けてみると意外な発見があり、将来に生きてくることがあるので、その点をどのようにして学生に納得してもらえるのか」という点が挙げられた。情報科学からは、学生の授業時間外での学習が極端に少なすぎるという問題点や「興味を感じない学生に、どのように授業に積極的に参加させるか」という点が、課題として挙げられた。また、言語学からは、上述したようなレポート採点にかかる時間的な負担の大きさが挙げられた。

それぞれの分野で扱われる基本概念を能動的に使えるようになるためには、レポート等による授業外での学習も必要であると思われるが、それをどの程度課すか、またどのようにチェックするかが課題として残されていると考えられる。

また、他の学修領域にも言えることであるが、基本概念の場合、学生が選択できる授業の種類が 2~3 に限られる。必ずしも当初から強い関心をもって授業に臨むわけではない受講者の関心を引くために、上述のように日常生活との関連性に配慮した授業もなされているが、さらに他分野、特に受講学生が専攻する分野と関連する内容を取り入れるなどの工夫が必要であると考えられる。

## 現代的課題学修領域の取組と課題

コーディネーター 上田 琢哉 (学校教育講座)

コーディネーター 加藤 淳太郎 (理科教育講座)

本学修領域は、名称の示す通り「現代社会の抱える問題を様々な角度から取り上げる」ものである。そのため扱う内容は、地球環境問題、食糧問題、農業問題、健康科学、心理学、障害や福祉、死生学等と極めて多岐にわたっている。

それら多岐にわたる授業内容における共通の教育目標として、次の点が掲げられている。

- ・ 一見豊かで便利になった現代社会が課題を抱えていることを認識し、それについて自ら関連する情報を収集する力を備えること。
- ・ 収集した情報をもとに、問題の所在を深く追求し、メリットとデメリットを共に考察する中で、ひとつの課題について多面的に見る力を養うこと。
- ・ さらに、レポートやグループディスカッションなどの作業を通じて、その課題を解決するための方策を提案できる力を身に付けること。

以下、寄せられた報告に即して、取組みの具体的内容と今後の課題を記す。

### 1) 授業内容と成果

授業内容・方法に関して上記で述べたように、内容が多岐にわたるため、あえて統一を図ることはせず、各教員がそれぞれの授業で創意工夫を行っている。

具体的には、以下のような取組みがなされている。

・「環境からみた私たちの健康」では、受講者の関心の高い環境因子について積極的に意見収集し、「PM2.5」、「アスベスト」、「においと消臭剤」、「化学物質過敏症」などのテーマを追加して解説することで、学生の興味を引くようにされている。

・「死生学」では、講義内でグループインタビューを学生に行わせ、自ら、現代社会の「死生観」について意識的に考える姿勢を養っている。

・「微生物学入門」では、学生がこの講義ではじめて微生物学に触れることを想定し、人類の社会活動と微生物の関わり、感染症、免疫学などの紹介が行われている。その結果、これまでとは違った視点で世の中を見ることができるようになってきていると感じると言う意見が学生から得られている。さらに、一般的な生活で必要とされる感染症の流行やワクチンの仕組みなどを通して、リテラシーとなる基礎知識、科学的・論理的な思考法と考え方についても教授している。

・「健康科学入門」では、巷にあふれる健康産業や美容産業のうたい文句に対して「科学的根拠に基づいた判断」ができない等の事例が散見されることから、身体について生理学・運動生理学的視点を講義で解説し、それらの知識をもとにインターネットやメディアなどの媒体にあふれる情報に対しての考察の仕方を取り上げている。この結果、論理的思考ができるようになった学生や、科学的根拠に基づき自身の意見を提示できるようになった学生が見出されている。

以上のように、講義内容は様々であるが、①内容を通して、学生が新しい視点で世界を見ることができるようになることを狙っている。②学生の興味をひくことができるように各教員が授業内容を工夫している、③グループインタビューやレポート課題を通して、一方通行の知識の吸収ではなく、自ら考える力を養うことを狙っている、などの点で共通した取り組みがなされているようである。

加えて、授業を通して、その内容だけでなく、科学的な思考法や論理的な思考法が身についたとする意見が多かった。これらは大学生が身につけるべきリテラシーの基本であり、教養教育視点から大事な成果であると判断される。

一方で、科学の知では解決しない問題があること、さらに科学の発達で新しい課題が起きていることも事実である。「こころの健康」では、副題に「臨床の知とは何か」を掲げ、新しい知のパラダイムとしての「臨床の知」というありかたが講義されている。「臨床の知」という考えは、主観的で、一回的、かつ「関係による意味の変化」が生じ、「科学の知」とは異なるパラダムであるが、フィールドが対人場面となりがちな教員養成においては重要な知のあり方であろう。「臨床の知」は、すでに信州大学教育学部で、それを柱に据えた教育システムが構築されている事例もあるが、本学修領域のなかでこのような講義ができることも、教養教育、特に現代的課題領域の利点であると考えられる。

## 2) 今後の課題

学生のバックグラウンドがさまざまであることや、彼らがどのような予備知識をもっているかが不明でありかつ不統一であるため、授業内容を構成することに苦勞されているという意見が散見された。また、「リテラシーのような複数時間からの選択」ではなく「時限が固定」されることから、実際の授業の選択肢の幅は2ないし3と少なく、その授業にあまり興味のない学生が受講していると思われるという意見もあった。

それぞれの講義内容については、現在は試行錯誤の段階であるとして、明確な課題として提示されたものは少なかった。

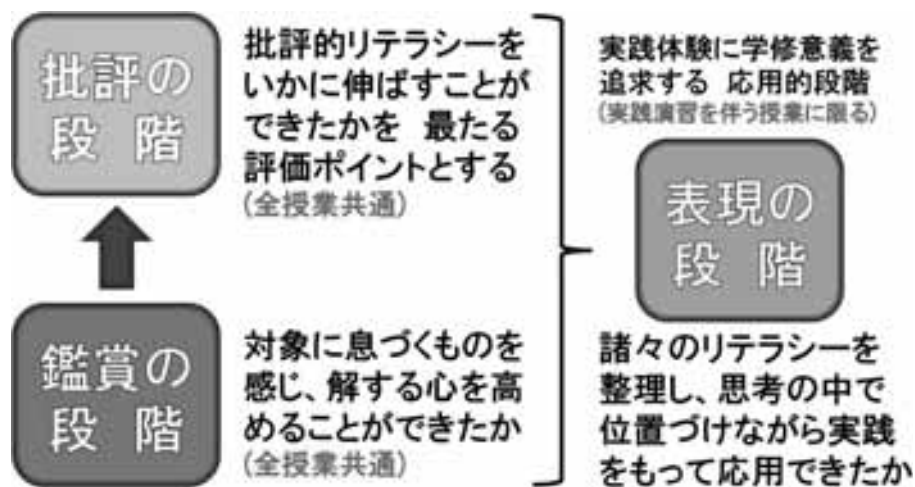
## 感性・創造学修領域の取組と課題

コーディネーター 橋本 剛（音楽教育講座）

### 感性・創造の定義および授業目標

感性・創造学修領域(以下、Ld)では感性・創造を「人間個々の総合的直観力の下地を担う両輪である」と定義し、これらを育むために「鑑賞する力」「批評する力」「表現する力」を段階的に習得することを目標に掲げているが、授業によっては実技演習を伴わないものもあるため、少なくとも批評する力までは養わせることを領域内共通の授業目標としている。

### Ldにおける学修段階および評価の観点



2013年度入学生対象のサイクル(2013年度後期～2014年度後期)においては国語7・国際文化2・造形5・音楽6の計20コマが開講されたが、2014年度入学生対象のサイクルからは幼児教育の1コマが新たに加わり、現在20タイトル・21コマが開講されている(造形の「素材と表現」のみ対象学年を違えて2コマ開講している)。

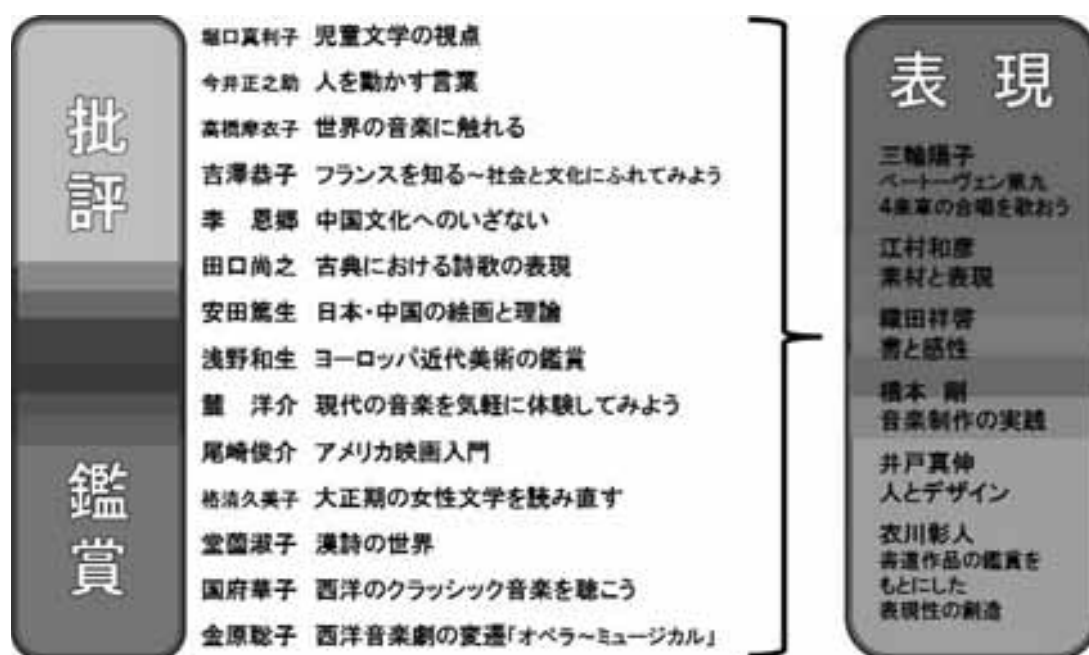
授業方法に関しては統一したマニュアルのようなものは存在しないながらも、全授業のシラバスを一望するに、Ldが掲げる学修段階「鑑賞→批評→表現」の流れに則したものとなっており、各教員ともに対象となる他教科の学生に自身の専門領域を分かりやすく紹介するための工夫を凝らしつつ、履修者の鑑賞・批評の力を育むための独自の方法をそれぞれに盛り込んでいる。うち「表現の段階」まで設けた授業の担当教員は、学生が積極的に実技演習を行える環境づくりにも努め、一定の成果を実現させるよう促している。

なお、Ldからは、これまで2013年度後期末に吉澤恭子先生(音楽)が、2014年度前期を終えて国府華子先生(音楽)がそれぞれFDにて授業報告を行い、今年度10月には麓洋介先生(幼児)が公開授業を開講している。

### 教育目標の実現のための取組み および今後の課題について

出席率や受講態度以外の面で評価に個人差をつけるならば、レポート・作品等の提出や実技試験を課すことになるが、受講人数が多いほどそれらの採点作業は過酷である。なかには最終成績評価の裏付けを確実にするための詳細な評価集積を目指してより多くの提出物を課した授業もあったが、学生もまた所属の専科における授業とはまた違った体験に新鮮な思いをもってこれらLdの授業を履修できているようで、寄せられた提出物にも意欲

## Ld2014 各授業の重点別マッピング(位置づけ)



【注】この図はあくまで力点の度合いを示すものであり、偏りを示すものではない。  
すべての授業において「鑑賞」「批評」に触れることに注意。

的な仕上がりのもが多く見受けられた。

授業後のアンケートの自由記述を見るに、授業で得た鑑賞や批評の観点に新鮮な感覚をおぼえたもの、受講後の自身に前向きな変化が生じたもの、授業で得たことを早速日常で応用しようとするもの、創作表現において試行錯誤する過程がとても楽しかったと振り返るもの、「表現して伝えることの大切さや楽しさを教員になってからも生かしたい」と将来への意欲へつなげたもの等、Ldの履修が自身によい影響をもたらしたと語る学生が多く出たことがうかがえる。これもまた授業がもたらしたひとつの成果といえよう。

また、創作表現活動を班で行わせた授業にあっては、コミュニケーションのはかり方を学ぶことができ、同科の同級生の意外な側面に触れたことで科内の親睦が深められたと感じた学生が多く、表現の段階におけるグループワークに意義を見出したとの声が多く寄せられていることは注目すべき点である。最終的に「人とつながる」というところに感性創造の究極の目的があるのではとあらためて気づかされる集計結果となった。

今後の課題としては、作品等の提出物の評価に要する膨大な時間の問題が主に挙げられる一方で、授業内容に言及する以前の問題として、学生の授業選択のシステムそのものに対しての意見が寄せられていることも見逃せない。現に、La から Ld まで一見してバラエティに富んだ授業が開講されているが、その実、学生には選択の自由がないことが問題視されている向きが確かにある。教養科目というのは、多くの選択肢の中から興味のあるものを自由に選べるというのがあるべき姿ではないかとの指摘は Ld 授業担当者の中からもあり、関連して「授業によって履修者数に差が生まれることはむしろ自然なことではないか」、「全教員が一人1コマ開講するくらいの勢いがないと全学的取り組みとはいえないのでは」といった自由な意見も出ている。ポイント制によって講座別の開講数が決められていることや、時間割、教室の空き状況や収容人数等、さまざまな周辺事情があつての現況であるわけだが、事実として現行の在り方に疑問の声があることへはなにがしかの改善へ向けた真摯な対応が望まれるところである。

## 学生説明会の実施内容

長谷川 詩織

日時：平成 26 年 6 月 25 日（水）13：30～15：30

場所：愛知教育大学 講堂

プログラム：

初習外国語科目説明会

ドイツ語

マイヤー オリバー（外国語教育講座 准教授）

フランス語

フレス アントワーン・ピエール（外国語教育講座 准教授）

中国語

時衛国（外国語教育講座 教授）

ポルトガル語

二井紀美子（外国語教育講座 准教授）

教養科目全体説明会：

愛知教育大学教養科目説明会

野田敦敬（愛知教育大学 副学長）

市民リテラシー

堀内真由美（社会科教育講座 講師）

多文化リテラシー

川口直巳（日本語教育講座 講師）

科学リテラシー

中野博文（理科教育講座 教授）

ものづくりリテラシー

遠藤透（美術教育講座 教授）

履修の流れ

教務課

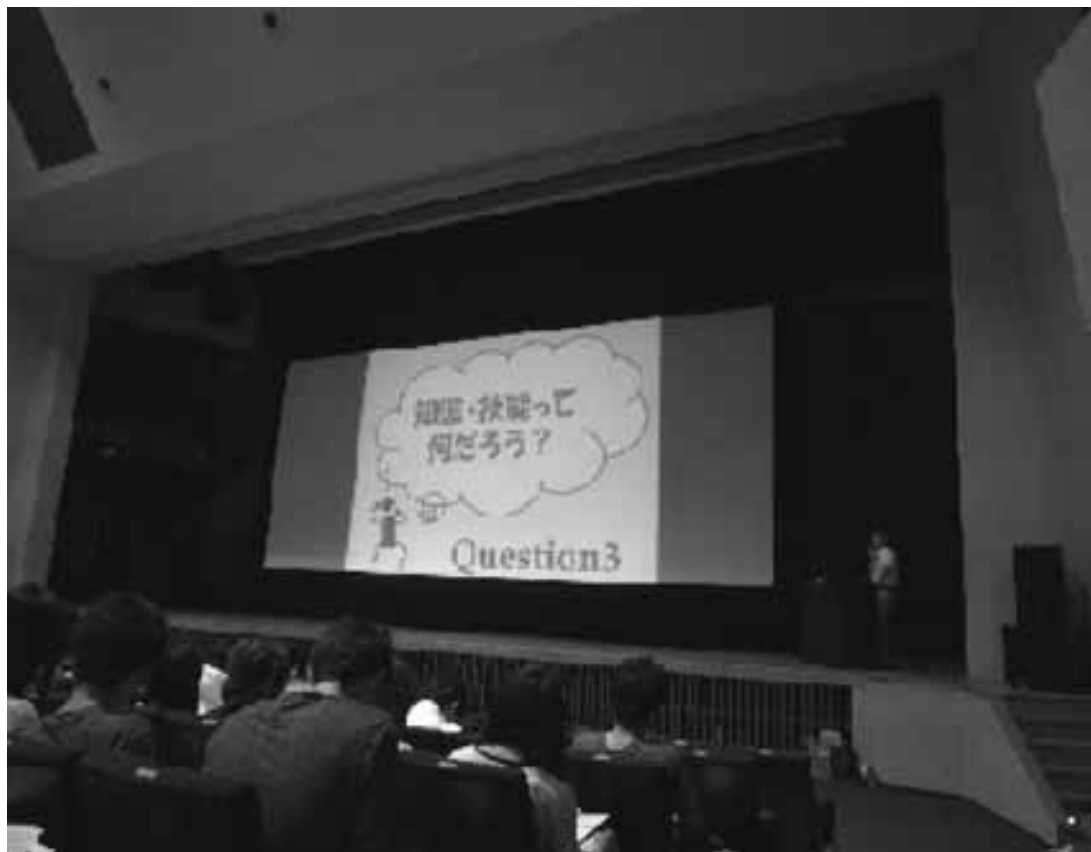
概要：

本学では平成 25 年度から、リテラシー学修領域（市民リテラシー分野、多文化リテラシー分野、科学リテラシー分野、ものづくりリテラシー分野）、基本概念学修領域、現代的課題学修領域、感性・創造学修領域と、計 4 つの学修領域から構成される教養科目が開始された。6 月 25 日に、1 年後期から教養科目を履修する学生を対象に、教養科目を通じて学んでほしいこと、身に付けて欲しい力などを、各学修領域の内容・目標と共に説明する場が設けられた。

初習外国語（ドイツ語、フランス語、中国語、ポルトガル語）の概要が説明されたあと、新教養科目の全体説明会が行われた。まず、野田副学長が、教養科目の概要と意義を説明、「市民として行動するには？」「主体的に学ぶとは？」「知識・技能とは？」等の質問を投げかけ、学生にその意味を考えさせたうえで、「主体的に学び続ける」ことの大切さを説明された。リテラシー学修領域は、「市民」「多文化」「科学」「ものづくり」の 4 分野のうち、3 つを選んで履修する必要があるため、それぞれの担当教員による説明が詳しくなされた（詳細はプログラムを参照のこと）。最後に、教務課担当者により履修の流れが説明さ

れ、説明会は定刻通りに終了した。

昨年度の学生説明会における学生の反応を踏まえて、教養科目の概要と目標を記したリーフレットに修正を加えて、今年度も引き続き配布した。今年度は、目標等に対する理解を深めるために、「愛知教育大学教養科目説明会」のスライドを作成、リーフレットを見ながら説明を聞くことができるように改善を加えた。「市民」や「技能」は、大学でどのように学んでいくべきかを考えるうえで欠かすことができない重要なキーワードである。入学して間もない学生にとっては、あまり馴染みがない用語であったようだが、リーフレットを読みながら自分なりに考えている様子を垣間見ることができた。今後も、説明内容の分かりやすさなど改善を重ねる必要があるものの、説明のなかに「考えさせる」「議論させる」などの活動を導入することは、教養科目に対する意識を高めるうえで有効な方法であることを確認する機会となった。

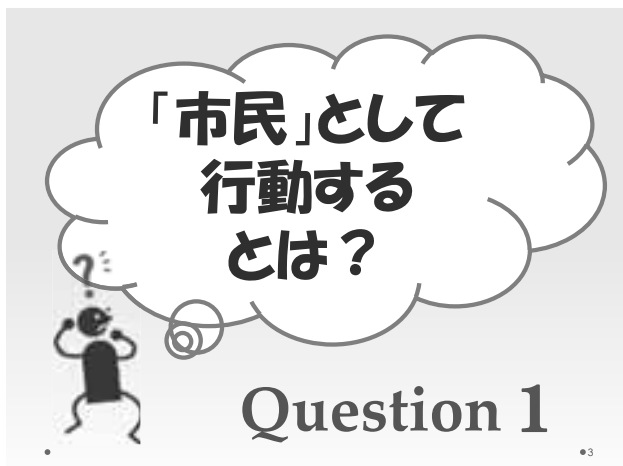




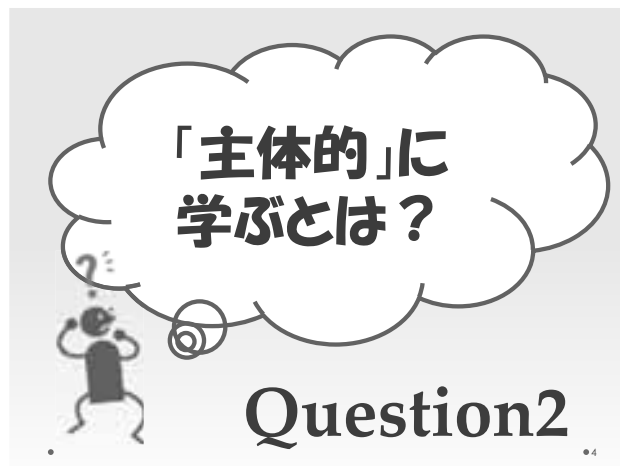
1



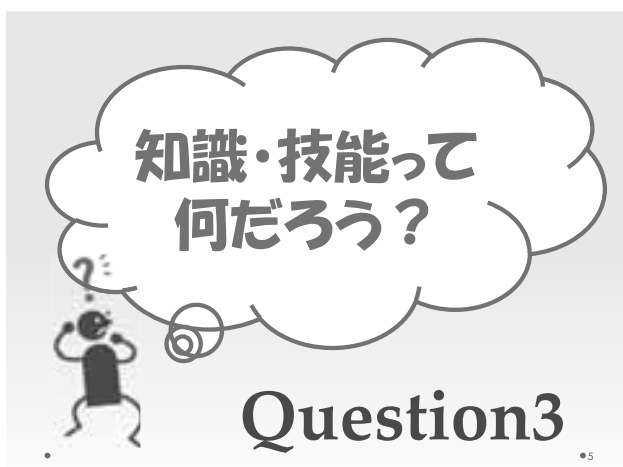
2



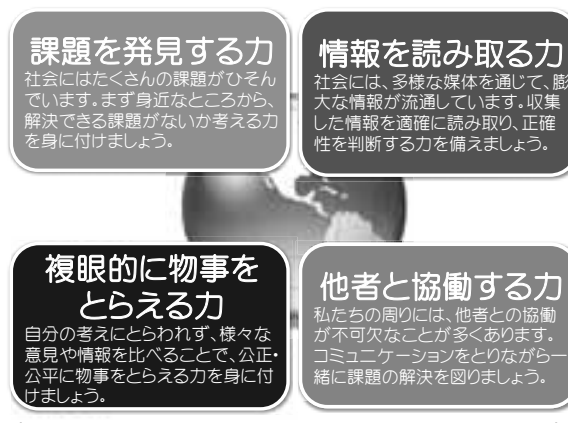
3



4



5



6



## 教養科目の構成

- ◎リテラシー学修領域
- ◎基本概念学修領域
- ◎現代的課題学修領域
- ◎感性・創造学修領域



7

必ず3科目  
を選択!

La

## リテラシー学修領域



- 1 市民リテラシー
- 2 多文化リテラシー
- 3 科学リテラシー
- 4 ものづくりリテラシー

8

必ず1科目  
を選択!

Lb

## 基本概念学修領域

教育目標	各授業に関連する基本概念を吟味することにより、客観的に物事を見る力を付けることを目指します。
教育内容	私たちの知識や考え方の根源に、どのような基本的概念が存在するのか、その形成過程も探ります。
(例) このようなことを考えます	<input type="checkbox"/> 「概念」はどのように言語化されているのか？ <input type="checkbox"/> 「概念」はどのように記号化されているのか？ <input type="checkbox"/> 「概念」はどのように数式化されているのか？

9

必ず1科目  
を選択!

Lc

## 現代的課題学修領域

教育目標	現代における課題の存在を認識することを出発点に、課題に関連する情報を収集し、多面的に見る力を付けることを目指します。
教育内容	生活に関わる課題、地域や自然環境に関わる課題、グローバルに関わる課題などを考えていきます。グループ・ディスカッション、プレゼンテーション、レポート等の文章化の作業を行うこともあります。
(例) このようなことを考えます	<input type="checkbox"/> 課題のあいだにはどのような関連性があるのか？ <input type="checkbox"/> 課題には、どのようなメリット/デメリットがあるのか？ <input type="checkbox"/> 情報の内容にはどのような共通点や差異があるのか？

10

必ず1科目  
を選択!

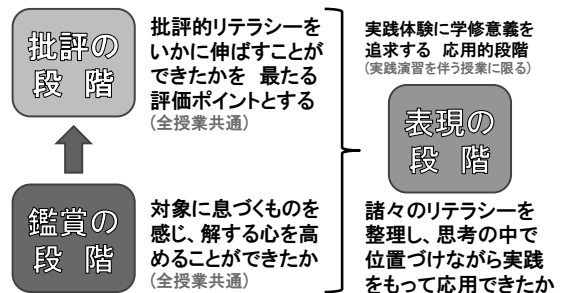
Ld

## 感性・創造学修領域

教育目標	事物や作品に触れ、その「よさ・魅力」を感じ取るとうとする心高め(鑑賞力)、それを踏み込んで考察し、他者に語り伝える力(批評力)を備えることを目指します。
教育内容	鑑賞力を高めるために、歴史、技法、哲学・思想について学び、批評力を身に付けるために、討論、作品分析、批評文作成等を行います。応用の機会として実践演習を伴う授業もあります。
(例) このようなことを考えます	<input type="checkbox"/> 作品には、どのような「よさ・魅力」があるだろうか？ <input type="checkbox"/> 作品は、どのような背景のもと作られているのか？ <input type="checkbox"/> 「よさ・魅力」を、どのように伝えることができるのか？

11

【参考】Ldにおける 評価の観点



12

## 【参考】Ld各授業の重点別マッピング(位置づけ)

批評		表現
	堀口真利子 児童文学の視点	三輪陽子
	今井正之助 人を動かす言葉	ペーター・ヴェン第九 4楽章の合唱を歌おう
	高橋麻衣子 世界の音楽に触れる	江村和彦
	吉澤森子 フランスを知る～社会と文化にふれてみよう	素材と表現
	李 恩郷 中国文化へのいざない	織田祥啓
	田口尚之 古典における詩歌の表現	書と感性
	安田篤生 日本・中国の絵画と理論	橋本 剛
	浅野和生 世界遺産を考える	音楽制作の実践
	籠 洋介 現代の音楽を気軽に体験してみよう	井戸真伸
	尾崎俊介 アメリカ映画入門	人とデザイン
鑑賞	格清久美子 大正期の女性文学を読み直す	衣川彰人
	堂園淑子 漢詩の世界	普通作品の鑑賞を もとにした 表現性の創造
	国府華子 西洋のクラシック音楽を聴こう	
	金原聡子 西洋音楽劇の変遷「オペラ～ミュージカル」	

【注】この図はあくまで力点の度合いを示すものであり、偏りを示すものではない。すべての授業において「鑑賞」「批評」に触れることに注意。

Next...

リテラシー  
4分野の説明

# 愛知教育大学教養科目説明会

「学びの主体」の形成

## 教養科目の趣旨

愛知教育大学では、教養教育を「人生と学術体系における自分の正しい位置を理解し、**市民として行動**できる土台を築くために、すべての学生に共通の教育」と考えています。本学の教養科目は、変化する社会のなかで、「**主体的に学び続ける**」ための基礎力の獲得を目指すものです。大学卒業後、教員になる人も公務員・企業等に勤める人も、それぞれの進路先で、経験したことのない課題に直面する可能性があります。このような課題に取り組むためには、知識を詰め込むばかりでなく、課題解決に必要な**知識・技能**を主体的に学び続ける力＝「**汎用的能力(ジェネリック・スキル)**」が必要になるでしょう。

本学の教養科目は、4つの学修領域(リテラシー、基本概念、現代的課題、感性・創造)から構成されています。各学修領域は、それぞれ異なる学修目標に基づいて設計されています。それぞれの科目の専門的知識や方法は、将来みなさんが未知の課題に直面したとき、問題の所在を発見し解決するための、「**ケース・スタディ**」となるかもしれません。履修した科目を通じて、「汎用的能力」の4つの要素を身に付けて欲しいと考えています。

### 教養科目を通じて身に付けて欲しいこと

#### A) 課題を発見する力

現代社会は、国際紛争とそれに伴う難民の受容問題、森林破壊や化学物質汚染による環境変動、食の安全性をめぐる問題など、国内だけに限定されないグローバルな課題に直面しています。現実社会の事象は、多岐に渡る問題が複雑に絡み合っ生じています。教養科目を通じて、自分の身近な問題に引き付けながら、事象や問題の関連性を見出し、複数の視点から現実を読み解き、課題を発見する能力の修得を目指しましょう。

#### B) 情報を読み取る力

現実社会を読み解くためには、諸媒体を通じて発信される多様な情報を収集・分析し、主体的に考察することを通じて情報の客観性・妥当性を見極めることが必要となります。新聞やインターネット情報を読む力、それらの情報を整理し分類する力、情報の正確性・客観性を判断する力などが必要となります。教養科目を通じて、各専門分野に関する知識や分析方法を学び、情報リテラシーを身に付けましょう。

#### C) 複眼的に物事をとらえる力

社会に潜む問題を発見し、解決に向けて取り組むためには、問題を論理的・実証的に分析をし、総合・統合して応用するプロセスが大切です。ここで言う「クリティカル」は、「否定的・消極的評価」だけを指すのではなく、状況に応じて複数の視点から物事を考え、評価することを意味します。教養科目を通じて様々な視点に触れ、結果として公正・公平なものを見方をするための方法の基礎を身に付けることを目指しましょう。

#### D) 他者と協働する力

課題を処理して問題を解決するためには、A)からC)までのプロセスを踏まえて判断を下し、それを実行に移すことが必要です。その際に、他者との協働が不可欠なことが多々あります。相互に尊重、理解、信頼する態度を前提に、対話や議論を通じて課題の解決を図る能力や姿勢が求められます。教養科目を通じて、様々な文化や価値観があることを理解し、多様な背景を持つ人々とコミュニケーションをとりながら協働するための基礎を身に付けましょう。

## リテラシー学修領域(La)

## ①市民リテラシー

「市民リテラシー」では、現代の民主主義社会で一人の「市民」として生活していくために必要な、基本的概念・知識を理解し、それらを実際に活用できるようなスキルを身に付けます。ここでいう「市民」とは、「主権者」として政治に参加する資格を持つ近代的な市民像に加え、そこから排除されてきた女性・少数者・社会的弱者をも含めた多様な人間を意味します。「市民リテラシー」では、こうした現代市民社会における様々な課題の学習と、クリティカル・シンキングの修得を通じて、差別なき他者理解と抑圧なき共生社会の実現を志向し、そこに主体的に関与する「市民」としての自己形成を目指します。

## 目標①

**理解:**各授業テーマに沿った基本概念の理解を通じ、社会で生活したり社会に参画したりする上で必要な知識、および現実の社会を読み解き、課題を発見する力を身に付けることを目指します。

## 目標②

**クリティカル・シンキング:**テキストや映像の読解・分析、フィールドワーク等を通じて、距離を置いて世界に向き合い、既存の現実社会や支配体制に対して自己の考察を深めることを目標とします。

## 目標③

**市民としての社会への関わり:**対話や討論を通じて「他者」と「自己」を理解し、一人の市民として社会に関与するための基礎的素養を備え、さらに広く課題を追究してゆく姿勢の修得を目指します。

## ②多文化リテラシー

「多文化リテラシー」は、「人種」「言語」「宗教」「教育」「性」「社会・経済的格差」「移民」など、多岐に渡る問題を対象とします。「文化」の相違や異質性をどのように理解し、それにどのように向き合うことができるのかを、授業を通じて考えることを目的とします。外国語を学ぶ、外国の風習や生活様式を知るだけでは、リテラシーを身に付けたことにはなりません。自己の文化を絶対的尺度とする見方から脱却し、「文化」が成立する歴史、「文化」の接触・衝突により生じうる問題、目に見えないあるいは語られないマイノリティをめぐる問題について思考を深めます。

## 目標①

**理解:**グローバル化した世界に存在する、様々な文化に関する知識・情報を収集・理解し、他者とコミュニケーションをとりながら対話により問題処理・解決するための基礎を備えることを目標とします。

## 目標②

**他文化との接触:**映像分析、生活様式の体験、聞き取り調査等を通じて、自己のものとは異なる文化に実際に接し、文化の差異を理解してコミュニケーションをとるための基礎を修得することを目指します。

## 目標③

**文化を相対的に捉える:**自文化・自国文化を中心化した思考から脱却し、多様な文化の存在を承認し、対等・平等に考える姿勢を身に付け、他者との意見交換する力を備えることを目標とします。

## ③科学リテラシー

「科学リテラシー」は、数学、物理学、化学、生物学、地球科学、天文学等の手法、論理体系、発想方法を通じて、科学的な思考のあり方を理解することを目指します。仮説から出発し、論理的思考を重ね、結論に達するプロセスを学びます。その思考方法を通じて、科学と技術が関係する社会や日常生活を認識し、現代社会に生きる市民として、科学に関わる諸問題の理解に必要な基礎の修得を目指します。

## 目標①

**理解:**多様な自然現象や進歩する科学技術を理解するために、自然科学の基本的な知識や概念を理解することを目標とします。

## 目標②

**知識や概念を活用する方法の修得:**実験・観察の手続き、データの解釈とその限界、事象の相関や原因、科学を支える諸理論を学び、知識や概念を活用する能力を備えることを目標とします。

## 目標③

**意思決定・行動力:**科学技術に深く根ざす今日の社会を生き抜くために、科学や技術に関わる政策や日常生活に関する問題に興味・関心を持ち、意思決定や行動をする力を身に付けることを目標とします。

#### ④ものづくりリテラシー

「ものづくりリテラシー」は、現実の諸問題を科学と技術を使って解決するための道理を考察し、実現する為の方法を創造する能力を身に付けることを目標とします。素材・技術・道具の扱い方を学ぶ、ものづくりの意義と問題を見出し未来の生活のあり方を構想する、使用する立場にたち「もの」を評価する等、それぞれの授業のテーマに即して考察を深め、自己の生活を意識的に振り返り、倫理的な視点に基づいて判断し行動する姿勢を身に付けます。

目標①	<b>理解:</b> 素材・材料に対する科学的知識、素材・材料を加工し、組み立てる技術、「もの」が作られた背景や歴史、環境・食糧・エネルギーなど「もの」の背後にある諸問題を理解することを目標とします。
目標②	<b>ものづくりのプロセスの体験:</b> 問題発見→論理的思考→問題解決→批判的思考といった「ものづくり」における一連の流れを理解し、経験を通じてそれらの能力を修得することを目標とします。
目標③	<b>社会における応用:</b> 問題解決の様々な可能性を考察し、制作や実験等の経験を通じて、解決に必要な手段を自分で発見できる力を備えることを目標とします。

#### 基本概念学修領域(Lb)

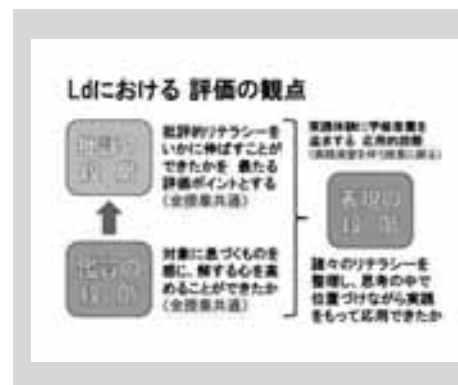
基本概念学修領域では、私たちの知識や考え方の根源にどのような基本的概念が存在するのか、その概念の形成過程・時代背景・変遷も探りながら考えていきます。さらに、抽象性の高い「概念」が、どのように言語化、記号化、数式化されているかについても学びます。私たちの知識や考え方は、自然科学、社会科学、人文科学などのなかで体系化されていますが、それらの学問分野を超えて使われる普遍的な概念もあります。また、同じ「用語」で表現されているものの、異なる使い方や意味づけがされている事例もあります。各授業を通じて、基本的な概念について掘り下げて考え、客観的に物事を見る力を身に付けることを目指します。

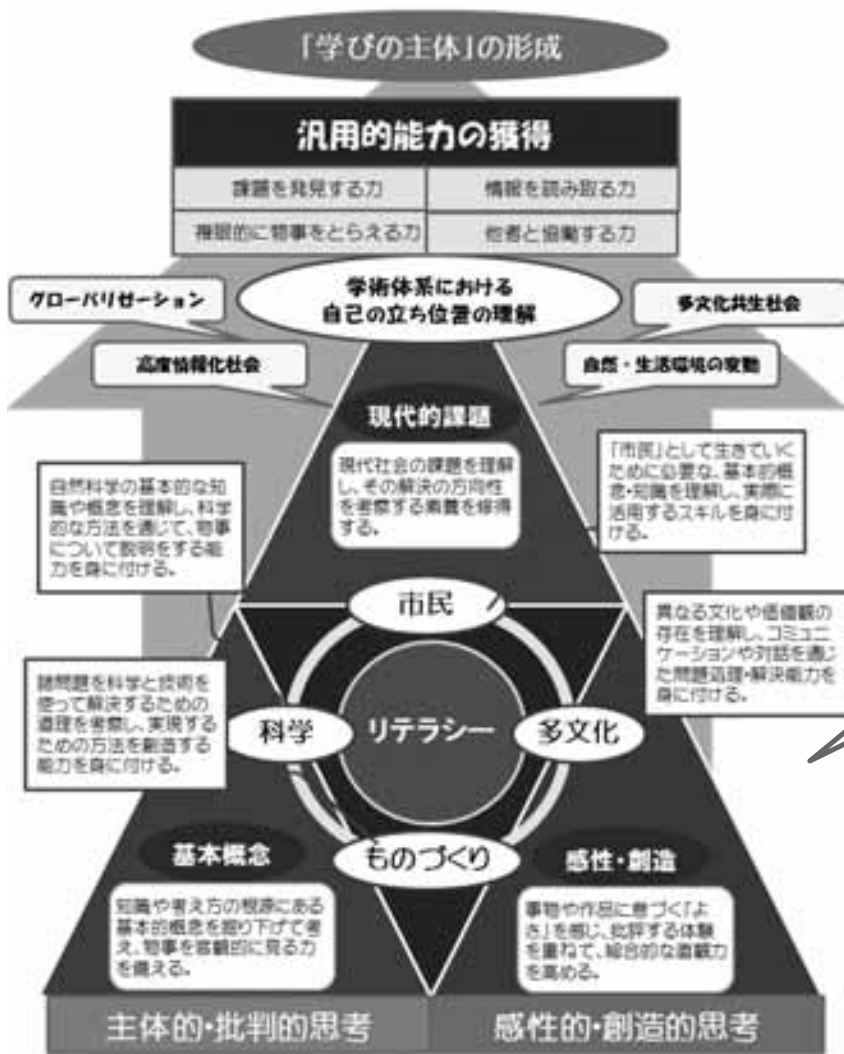
#### 現代的課題学修領域(Lc)

現代的課題学修領域では、課題の存在を認識することを出発点に、課題に関連する情報を収集する力を備えることを重視します。新聞、テレビ、インターネットなど異なるソースで、話題の扱われ方がどのように違うのかを認識し、それをもとに課題の本質を的確に把握する素養の修得を図ります。収集した情報をもとに問題の所在を深く追求し、メリットとデメリットと両方を考察することで、ひとつの課題について多面的に見る力が備わります。グループ・ディスカッション、プレゼンテーション、レポート等の文章化の作業を通じて、複数の立場から考えをまとめ、解決策を他者にも提案する力を身に付けることを目標とします。

#### 感性・創造学修領域(Ld)

感性・創造学修領域では、感性と創造力の両方を育むことで、総合的な直観力を高めることを目指します。事物や作品に触れ、その「よさ・魅力」を感じ取ろうとする心を高め(鑑賞力)、「よさ・魅力」を踏み込んで考察し、他者に語り伝える力(批評力)を備えることを目標とします。鑑賞力を高めるために、歴史、技法、哲学・思想について学び、批評力を身に付けるために討論、作品分析、批評文作成等を行います。知識を整理し、実践を通じて応用する機会として、実践演習を伴う授業もあります。





リテラシー学修領域は、①市民、②多文化、③科学、④ものづくりと、4つの分野により構成されています。そのなかから、3つの分野を選択して、履修登録をしてください。

4分野すべてを履修登録することはできません！！各リテラシーの説明・参考資料・シラバス等を読んで、どの3分野を選ぶか考えましょう。

リテラシー学修領域を履修登録する際の注意点！

必要な資料は「学務ネット」で確認すれば万全にゃん♪



教養科目選択システム(希望科目の登録の流れ)		確認資料
Step1	説明会配布資料、学務ネットに掲載されている資料をよく読み、教養科目の構成を押さえます。各学修領域の定義や目標は、授業を選択する際の参考になります。	説明会配布資料 参考資料全般
Step2	履修の全体の流れを把握しましょう。「履修の流れ」に、希望科目登録の作業内容が詳しく記してあります。「簡易マニュアル」に、選択システムの操作方法が記してあります。	履修の流れ(資料2) 簡易マニュアル(資料3)
Step3	自分がどの「組」に所属しているのか確認しましょう。「組」により履修できる科目が異なります。「組」を確認したら、組ごとの「履修可能科目一覧」をプリントアウトする等して、自分が履修できる科目を確認してください。	履修可能科目一覧(資料4)
Step4	履修を希望する授業を決めましょう。「履修可能科目一覧」を踏まえて、シラバスを確認し、第1希望、第2希望、第3希望の3パターンを考えてください。	シラバス(資料5)
Step5	Step1~4が終わったら、学籍番号+パスワードでまなびネットにログインして選択システムに入ってください。選択システムに入ると、各自が履修できる科目が出てきます。第1希望~第3希望まで、履修を希望する科目をクリックしてください。	まなびネットにログインし、 選択システムで希望科目の登録をする
Step6	すべてクリックを終えたら、「確定」してください。(注意)確定ボタンを押すと修正できません。データの確定後は履修選択科目の変更は認めませんので、必ず最終画面を見直して、登録ミスがないかを確認してから、「確定」を送信してください(30分でタイムアウトしますのでご注意ください)。	

選択システムの作業をスムーズに行うために、事前にしっかり準備をしましょう。

## 教養教育のカリキュラム編成の概要 —授業構想の傾向と学生の自己評価から—

長谷川 詩織

平成 25 年度は、新教養科目の初年度であることから、教員がどのような授業を構想しているのかを示すことで、学生の履修選択に役立ててもらうために、「授業紹介項目表」の記入を依頼した（項目表については、平成 25 年度プロジェクト報告書を参照）。本報告は、各学修領域・リテラシー分野ごとに、どのような授業が構想される傾向があったのかを、とくにグループワークやプレゼンテーションなど、学生の能動性を促す教育方法を中心に整理する。これは、各学修領域・リテラシー分野で、どのような教育方法上の特徴があるのかを把握することを目的とするもので、個々の授業を対象としていない。そのため、授業開始後のシラバスの変更、非常勤講師等の担当者交代は、今回の報告のなかに反映していない。

また、教養科目の開始に際して、授業改善のためのアンケートの教養科目の質問項目（以下、教養科目アンケートと記す）を刷新した。教養科目を通じて「身に付けて欲しい力」を明示化・周知するにあたり、受講した学生がどのような力が備わったと実感できているのかを把握する必要がある。そこで、平成 25 年度に、コーディネーター教員を含む拡大LA会議、FD・学習支援部門、リベラル・アーツ教育部門の構成員が合同で、教養科目専用のアンケート項目の見直しを行った。平成 26 年度は、FD・学習支援部門が中心となり、リベラル・アーツ教育部門が協力するという形で、さらに項目の表現等を見直した。

本報告では、教養科目アンケートで学生が回答した「そう思う」「ややそう思う」の項目をグラフ化した図を使用する。それにより、各学修領域・リテラシー分野が、それぞれどのような「強み」を持っているのか、どのような項目をさらに伸ばしていけるのかを、整理することを試みる。「強み」の把握は、多様な専門性から成り立つ教養科目が、ひとつのプログラムとして、どのような能力育成に寄与できるのかを検討するための材料となると考える。

### 留意点

1) 教養科目固有の質問項目は、平成 25 年度：問 3～問 8、平成 26 年度：問 3～問 9 が該当する。授業改善のためのアンケート全体の結果については、各学修領域・分野ごとに、文末にまとめて掲載することとする。

2) 報告中に挿入されているグラフは、150 人を基本軸としているが、平成 25 年度の基本概念学修領域、現代的課題学修領域、感性・創造学修領域に限っては、履修者数が多いことから 200 人に設定している。本報告の趣旨は、人数を把握することではなく、各カテゴリーの「強み」を探ることにあることから、人数軸を共通化していない。

◎アンケート項目抜粋（簡略表現は報告者による）

平成 25 年度(1 年前期履修分)		平成 26 年度(2 年前期履修分)	
問3:自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	関連づけ	問3:自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	関連づけ
問4:この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解して他者とコミュニケーションをとる力が身についた。	差異理解・コミュニケーション	問4:この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解した。 問5:この授業を通じて、他者とコミュニケーションをとることの重要性を理解した。	差異理解 コミュニケーション
問5:この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考える力が身についた。	論理的思考	問6:この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考えたり、表現したりすることの重要性を理解した。	論理的思考
問6:この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から比較し判断する力が身についた。	複眼的視点	問7:この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から判断する重要性を理解した。	複眼的視点
問7:この授業を通じて、想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法が身に付いた。	創造力	問8:この授業を通じて、知識や想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法を考えた。	創造力
問8:この授業を通じて、社会の課題を発見し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	行動力	問9:この授業を通じて、日常生活や社会の課題を認識し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	行動力
①そう思う ②ややそう思う ③どちらとも言えない ④あまりそう思わない ⑤そう思わない(該当しない) ⑥無回答			

◎学修領域・分野の「目標」（リーフレットより抜粋）

A) 課題を発見する力		B) 情報を読み取る力	
C) 複眼的に物事をとらえる力		D) 他者と協働する力	
リテラシー学修領域	市民リテラシー分野	<b>理解:</b> 各授業テーマに沿った基本概念の理解を通じ、社会で生活したり社会に参画したりする上で必要な知識、および現実の社会を読み解き、課題を発見する力を身に付けることを目指します。	
		<b>クリティカル・シンキング:</b> テキストや映像の読解・分析、フィールドワーク等を通じて、距離を置いて世界に向き合い、既存の現実社会や支配体制に対して自己の考察を深めることを目標とします。	
		<b>市民としての社会への関わり:</b> 対話や討論を通じて「他者」と「自己」を理解し、一人の市民として社会に関与するための基礎的素養を備え、さらに広く課題を追究してゆく姿勢の修得を目指します。	
	多文化リテラシー分野	<b>理解:</b> グローバル化した世界に存在する、様々な文化に関する知識・情報を収集・理解し、他者とコミュニケーションをとりながら対話により問題処理・解決するための基礎を備えることを目標とします。	
		<b>他文化との接触:</b> 映像分析、生活様式の体験、聞き取り調査等を通じて、自己のものとは異なる文化に実際に接し、文化の差異を理解してコミュニケーションをとるための基礎を修得することを目指します。	
		<b>文化を相対的に捉える:</b> 自文化・自国文化を中心化した思考から脱却し、多様な文化の存在を承認し、対等・平等に考える姿勢を身に付け、他者との意見交換する力を備えることを目標とします。	



科学リテラシー分野	<p><b>理解:</b>多様な自然現象や進歩する科学技術を理解するために、自然科学の基本的な知識や概念を理解することを目標とします。</p>
	<p><b>知識や概念を活用する方法の修得:</b>実験・観察の手続き、データの解釈とその限界、事象の相関や原因、科学を支える諸理論を学び、知識や概念を活用する能力を備えることを目標とします。</p>
	<p><b>意思決定・行動力:</b>科学技術に深く根ざす今日の社会を生き抜くために、科学や技術に関わる政策や日常生活に関する問題に興味・関心を持ち、意思決定や行動をする力を身に付けることを目標とします。</p>
ものづくりリテラシー分野	<p><b>理解:</b>素材・材料に対する科学的知識、素材・材料を加工し、組み立てる技術、「もの」が作られた背景や歴史、環境・食糧・エネルギーなど「もの」の背後にある諸問題を理解することを目標とします。</p>
	<p><b>ものづくりのプロセスの体験:</b>問題発見→論理的思考→問題解決→批判的思考といった「ものづくり」における一連の流れを理解し、経験を通じてそれらの能力を修得することを目標とします。</p>
	<p><b>社会における応用:</b>問題解決の様々な可能性を考察し、制作や実験等の経験を通じて、解決に必要な手段を自分で発見できる力を備えることを目標とします。</p>
基本概念学修領域	<p>基本概念学修領域では、私たちの知識や考え方の根源にどのような基本的概念が存在するのか、その概念の形成過程・時代背景・変遷も探りながら考えていきます。さらに、抽象性の高い「概念」が、どのように言語化、記号化、数式化されているかについても学びます。私たちの知識や考え方は、自然科学、社会科学、人文科学などのなかで体系化されていますが、それらの学問分野を超えて使われる普遍的な概念もあります。また、同じ「用語」で表現されているものの、異なる使い方や意味づけがされている事例もあります。各授業を通じて、基本的な概念について掘り下げて考え、客観的に物事を見る力を身に付けることを目指します。</p>
現代的課題学修領域	<p>現代的課題学修領域では、課題の存在を認識することを出発点に、課題に関連する情報を収集する力を備えることを重視します。新聞、テレビ、インターネットなど異なるソースで、話題の扱われ方がどのように違うのかを認識し、それをもとに課題の本質を的確に把握する素養の修得を図ります。収集した情報をもとに課題の所在を深く追求し、メリットとデメリットと両方を考察することで、ひとつの課題について多面的に見る力が備わります。グループ・ディスカッション、プレゼンテーション、レポート等の文章化の作業を通じて、複数の立場から考えをまとめ、解決策を他者にも提案する力を身に付けることを目標とします。</p>
感性・創造学修領域	<p>感性・創造学修領域では、感性と創造力の両方を育むことで、総合的な直観力を高めることを目指します。事物や作品に触れ、その「よさ・魅力」を感じ取ろうとする心を高め(鑑賞力)、「よさ・魅力」を踏み込んで考察し、他者に語り伝える力(批評力)を備えることを目標とします。鑑賞力を高めるために、歴史、技法、哲学・思想について学び、批評力を身に付けるために討論、作品分析、批評文作成等を行います。知識を整理し、実践を通じて応用する機会として、実践演習を伴う授業もあります。</p>

## (1) リテラシー学修領域

### 1. 市民リテラシー分野

#### ◎教員の授業構想の傾向

市民リテラシー分野は、社会に参画するための知識や姿勢を備えることに力点を置く目標が設定されている。その目標に呼応して、テキストの読解とディスカッションを組み合わせる授業を構想する事例が多く見られた。授業のなかで、教員が情報や問題提起を与え、それを土台に、学生が知識を広げたり考えたりすることを期待する傾向があった。また、学生が自分の意見を定める過程で、「自己」と「他者」の差異を理解し調停する作業を、社会参画のための重要な技能と捉え、それが「話し合う」ことに軸足を置く根拠とする趣旨の記述も目立った。

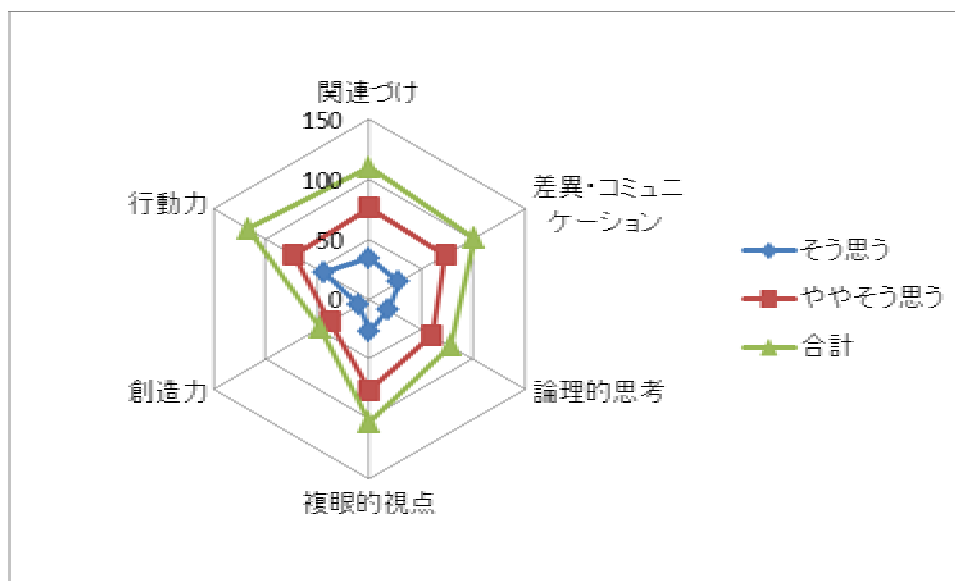
また、問題設定として、「どのような問題点があるのだろうか」「〇〇することは可能なのだろうか」「なぜ、このような状況が生まれたのだろうか」「なぜ、△△が導入されたのだろうか」「どのように理解するべきなのだろうか」など、複数の意見が存在することを前提に、出来事や現象に疑問を持ち、自分なりの考えを持つことを重視する記述が目立った。意見の複数性を理解するために、「相対化」「対象化」「複数の視点」「中立性」など、立ち位置や関係性の認識をあらわす用語が、鍵概念として提示される傾向があった。市民リテラシー分野は、少数派の意見や状況の配慮・理解を、教育目標のひとつとしている。そのため、上記の鍵概念が有効性を持っていると判断する教員が多かったようである。

#### ◎授業を受けた学生の実感の傾向

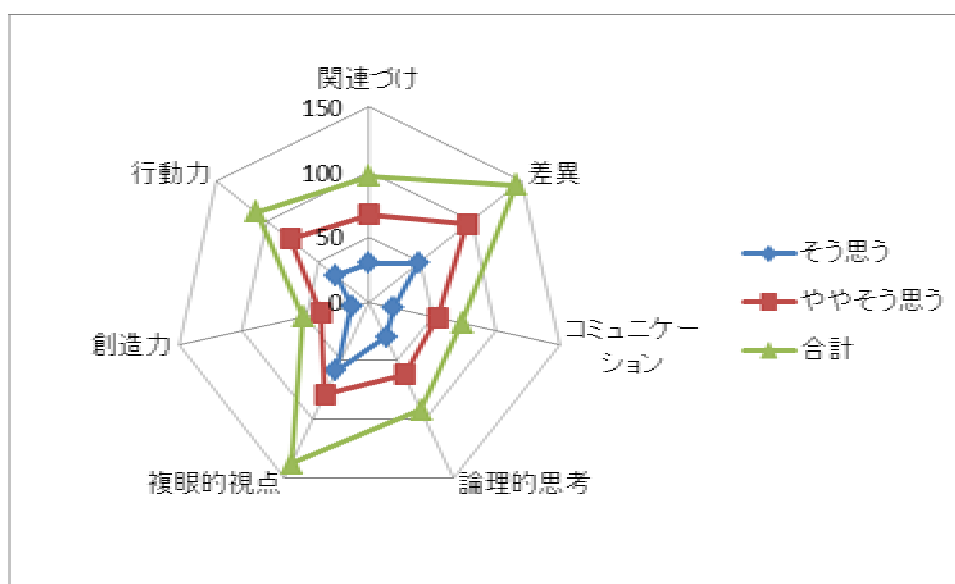
「関連づけ」が、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成 25 年度は 54.1%、平成 26 年度は 44.5%と、やや低下したものの、概ね、半数程度の学生は、自分の既知の知識等を踏まえながら、授業に取り組むことできたようである。また、「複眼的視点」が、平成 25 年度が 50.7%、平成 26 年度が 63.3%と、他の学修領域・分野と比較して、理解度が高く出る傾向があった。「行動力」についても、平成 25 年度が 57.7%、平成 26 年度が 50.9%と、過半数以上の学生がその重要性を認識している。身近にある課題を見つけ出して解決策を考えるグループディスカッションの導入による、受講者同士の話し合いや、意見交換のプロセスが、「複眼的視点」や「行動力」の重要性を認識する契機になったと考えられる。

平成 25 年度は、「差異理解・コミュニケーション」が 51.8%であり、それは多文化リテラシー分野に続く高い数値である。グループディスカッションの導入は、自他の違いや対話することの重要性を認識する契機のひとつとなったと思われる。しかしながら、平成 26 年度のアンケートで、「差異理解」と「コミュニケーション」を区分したことにより、前者は 66%、後者は 33.5%と、「コミュニケーション」の重要性の理解が十分に浸透していないことが見えてきた。市民リテラシー分野を特徴づける、グループディスカッションの導入は、コミュニケーション力の実感の向上につながるのみならず、当該分野が重点化している文化の価値観や差異

の理解の定着にも寄与するため、より積極的に導入を進めていくことが期待される。



平成25年度（1年後期）：市民リテラシー



平成26年度（2年前期）：市民リテラシー

◎補足

後述するが、例えば、自然科学系の授業を中心に構成される科学リテラシー分野の場合も、事象の法則や数式を理解するために、ディスカッションを導入する教員が目立った。この場合、学生同士で「教え合う」ことにより、解答を導き出していくという趣旨で、ディスカッション

が導入されている。同時に、市民リテラシー分野は、多文化リテラシー分野や現代的課題学修領域と主題が重複している事例もあり、それぞれの特性を明確に打ち出す必要がある。ディスカッションの導入方法・意図の差異を把握し、それぞれに適した方法を特化していくことにより、他の学修領域・分野との個別化がより推進されると思われる。

## 2. 多文化リテラシー分野

### ◎教員の授業構想の傾向

多文化リテラシー分野は、市民リテラシー分野と同様に、テキスト読解とディスカッションを組み合わせる授業の構想が目立った。愛知県の地域的特性を反映した、外国人居住者を取り巻く諸問題を主題とする授業が含まれていることから、関係者に聴き取り調査をする、現地調査を実施する（自学自習の一環として学生個人が自主的に赴くものも含む）など、フィールドワークを構想する事例も見られた。

また、大学初年次において文化に関する知識は、その多様性や衝突を含めて十分に得られていないと想定し、まず知識・情報を提供することを重視する傾向が強いように思われた。それゆえ、あえて講義を中心に授業を構想する教員も見られた。それと関連して、安易にディスカッションを導入することは、深い理解や思索につながらないのではないかと、直ちにアクティブラーニングを導入することに対する危惧を示す記述もあった。

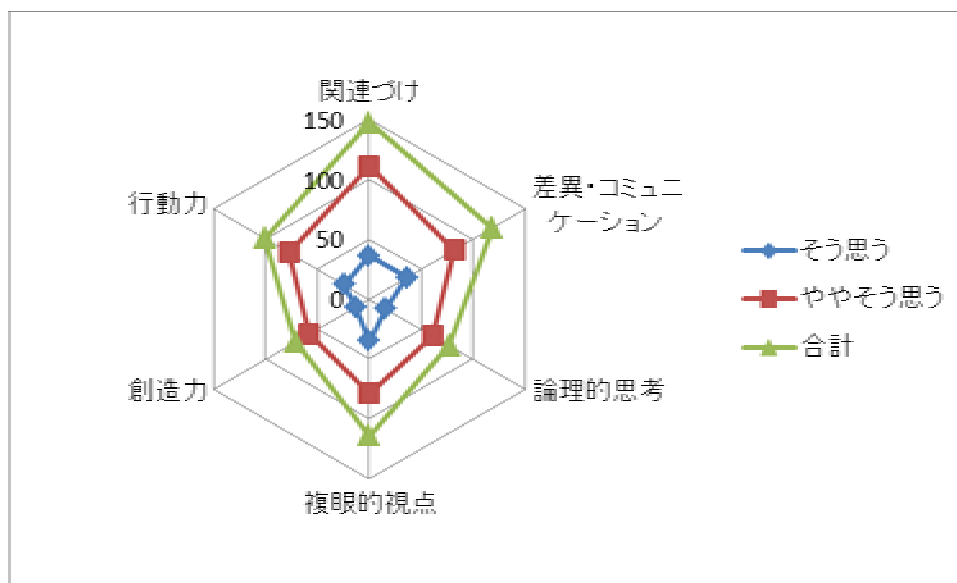
授業を通じて学生に考えて欲しい事として、「なぜ～なのだろうか」というように、市民リテラシー分野と共通する問いかけを挙げる事例が大部分であった。言語（日本語・外国語）が持つ力に注目し、議論をする、考えをまとめるなど、言語を問題発見の契機とする事例もあった。また複数の言語を学ぶことで、グローバル化した社会におけるコミュニケーションの幅を広げることを望む声も強かった。加えて、言語の社会的な差異を学ぶことで、将来的に文化や価値観の差異等の理解（「比較する力」「相対化する力」）に発展させて欲しいとする記述も見られた。

### ◎授業を受けた学生の実感の傾向

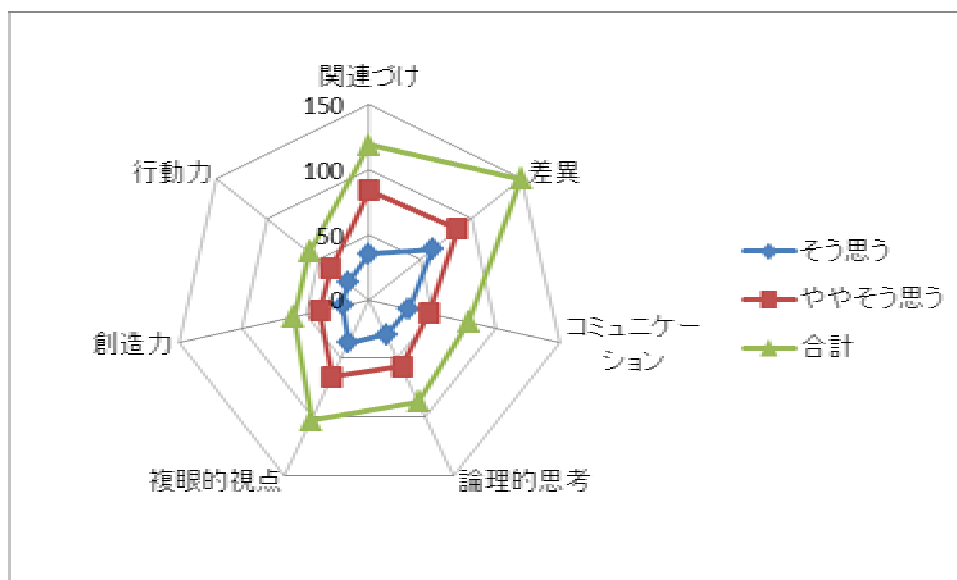
多文化リテラシー分野は、「関連づけ」が、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成25年度64.5%、平成26年度55.7%と、感性・創造学修領域に続いて高く出る傾向があった。テレビやインターネットなど間接的な事例も含めると、日常生活のなかで異文化に触れる機会は極めて多い。それゆえ、授業で得た知識を、自分の経験のなかで関連づけやすく、それが授業に対する積極性を高めたのではないかと考える。

また、「差異理解・コミュニケーション」が、平成25年度は51.8%、平成26年度は、「差異理解」は69.7%と、授業を通じて、異なる分野や価値観の存在を理解することの重要性を認識するに至っている。多文化リテラシー分野は、外国文化・歴史を取り上げる授業の他、比較文化の視点をとった授業や、日本国内の多文化状況を扱う授業が含まれている。国内で接する

身近な事象を視野に入れながら、文化の差異の存在に気が付く契機となったのではないかと考える。しかしながら、市民リテラシー分野と同様、「コミュニケーション」に限定した場合、36.5%と理解度が低下している。授業で得た知識を、日常生活や対人関係のなかで、どのように応用することができるのかを、実践を含めて考えさせることで、授業内容の理解の深化がさらに図れるのではないかと考える。



平成25年度 (1年後期) : 多文化リテラシー



平成26年度 (2年前期) : 多文化リテラシー

「複眼的視点」は、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成25年は50%、平成26

年度は48.1%であり、概ね半数の学生が、授業を通じて理解できたという実感を持っていることが分かる。外国の歴史・文化を学ぶ、文化の特性の違いを比較する、地域の多文化状況を知る等の授業設定が、自分の帰属先とは異なる文化の情報を収集する機会となり、複数の視点を獲得したという実感につながったのではないかと考える。

#### ◎補足

市民リテラシー分野と同様、授業内にディスカッションを導入し、それを、異文化理解のプロセスの一部としていくという構想が多く見られた。学生同士の意見交換は、異なる価値観の存在、それらの調停の困難性を、体験的に理解する機会となる。そのため、ディスカッションを導入する際、コミュニケーション力の重要性を意識化できるように方向づけることで、多文化リテラシー分野の教育目標の達成度のさらなる向上が期待できる。

### 3. 科学リテラシー分野

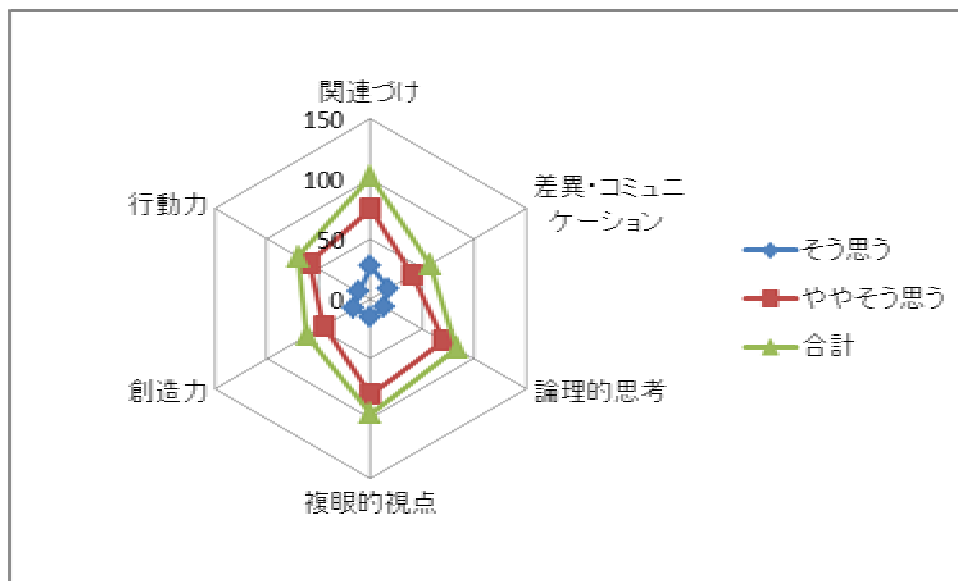
#### ◎教員の授業構想の傾向

科学リテラシー分野は、自然科学系の授業が多く配置されたカテゴリーである。そのため、物理・化学・地学・生物の高校時の履修状況を踏まえて、授業内容を構想する必要があるという難しさがある。受講者が持っている基本的な知識には、ふり幅があるという想定に基づき、講義を中心に授業を計画する傾向があった。講義を通じて、科学の基本的な知識を習得し、社会や日常に関心を広げるための足掛かりにして欲しいという趣旨の記述が目立った。

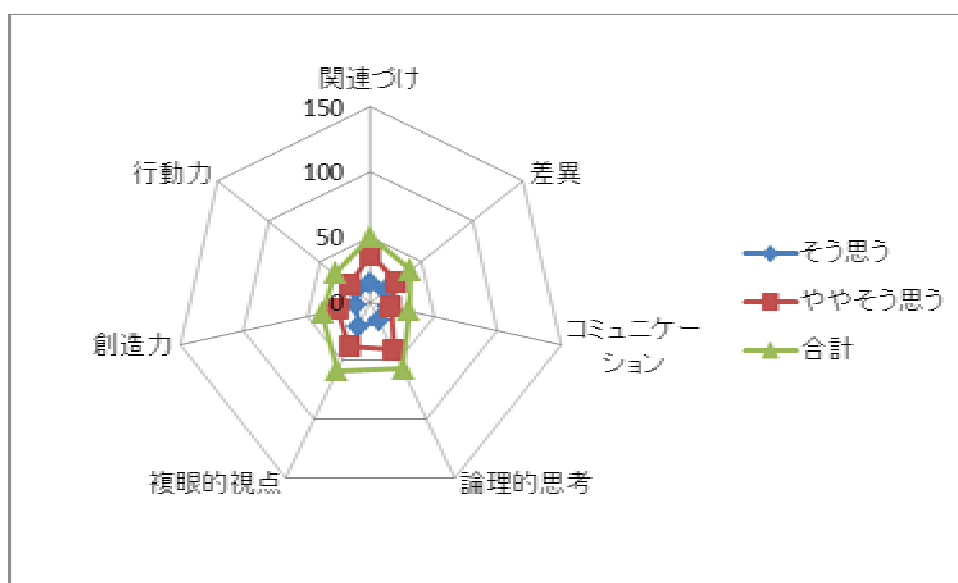
加えて、自然現象を自分の言葉で説明できるようになるなど、コミュニケーション力・表現力の向上を期待する記述も多かった。さらに、学生の授業参画を促すために、実際に「問題を解く」という活動を構想する記述も目立った。実験や観察など、自然科学の領域を特徴づける活動を、アクティブラーニングとして導入することを試みる事例が多く見られた。ディスカッションの導入を視野に入れているが、科学リテラシー分野の授業の場合は、授業内容を論点に話し合うのではなく、問題の解き方などを教え合うことを想定する事例が多いようであった。

#### ◎授業を受けた学生の実感の傾向

「関連づけ」は、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成25年度は50.7%であったが、平成26年度は33.6%に低下しており、構想時に教員が期待していた、興味を持って自分なりに学びを発展させたという実感には至らない事例も少なからずあったようである。科学リテラシー分野のなかで、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成25年度は47.8%、平成26年度は39.6%と、学生による重要度の理解が高く出たのが「複眼的視点」である。科学リテラシー分野を構成する自然科学は、日常生活のなかで接する自然現象を、原理や法則という別の次元で考察する契機となることから、複数の視点が備わったという実感が得られやすく、教養科目全体としては高い数字ではないが、今後伸ばしていくべき要素として着目できる。



平成25年度（1年後期）：科学リテラシー



平成26年度（2年前期）：科学リテラシー

◎補足

科学リテラシー分野は、ものづくりリテラシー分野や現代的課題学修領域と、担当教員の専門分野が重複する傾向が強く、それらとの差異が認識できるような授業を設計することが求められる。現代的課題の場合、情報収集能力に特化する傾向があるため、科学リテラシー分野は、自然科学領域を俯瞰できる網羅性および原理・法則を理解するためのグループワークを特化することで、2つのカテゴリーの特性をより生かしていくことができるのではないかと。

また、先述したように、科学リテラシー分野では、市民リテラシー分野や多文化リテラシー分野のように、価値観や考え方の複数性を理解するためではなく、「教え合い」を通じて正解を導き出すことを趣旨にディスカッションが導入される傾向がある。人文科学系、社会科学系、自然科学系の学問分野の特性を整理し、情報共有を進めることにより、科学リテラシー分野におけるアクティブラーニングの多様な展開が可能になると思われる。

#### 4. ものづくりリテラシー分野

##### ◎教員の授業構想の傾向

ものづくりリテラシー分野の目標は、ものづくりを実際に経験することで、その歴史や意味、背後にある文脈を理解することである。とくに、「もの」が持つ性質などを体験的に理解できるように、観察や実験を授業に組み込む構想が多く見られた。ものづくりリテラシー分野を構成する授業は、概ね、それぞれの授業で扱う素材や材料に関する知識・方法の習得が重視されている。素材や材料に対する理解を深めることにより、物流や経済、環境、倫理など、思考を広げていくための基礎を築くことを期待する記述が目立っている。

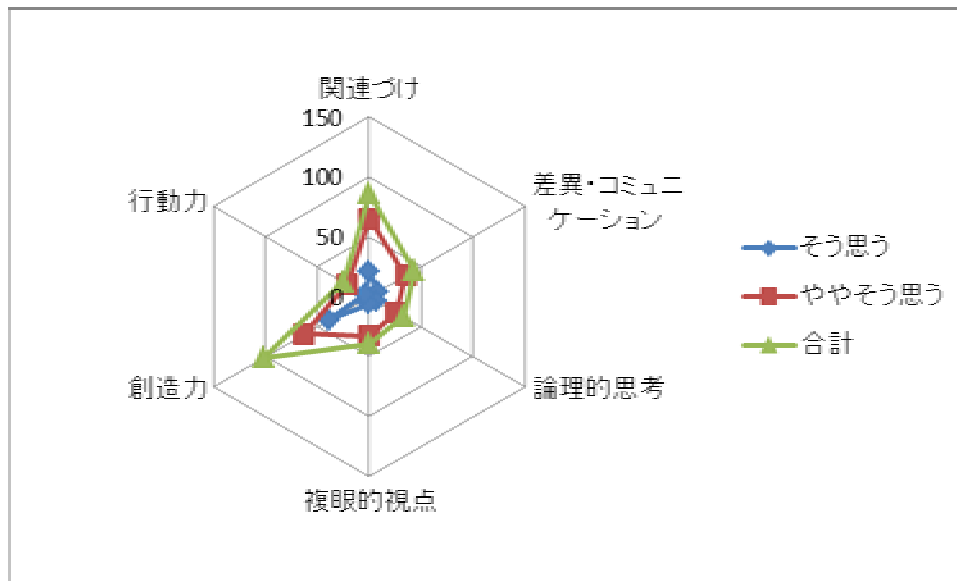
アクティブラーニングの実践として、実際にもものを作る作業よりも、観察や実験に比重が置かれたことの一因として、教養科目で使用されている教室の多くが、作業に対応していなかったことが考えられる。とはいえ、教室の都合により小規模ではあるが、実際に作業を導入する試みも行われている。作品制作を導入する場合、作品の完成度ではなく、どのようなアイデアを出したか、それをいかなる創意工夫により実現しようとしたかなど、問題発見・問題解決のプロセスを、評価の基準として明示する傾向があった。

実験系・制作系共に、歴史を振り返りながら、素材、材用、実験の理解を深める内容が構想される事例も含まれていた。また、一部、写真などの図版を使って、創作物の意図を読み解くことに重きを置く授業もあった。教室の制約を踏まえて、当該分野の趣旨にかなうように、各授業の特性を活かして、臨機応変に対応されていることをこれらの構想から読み取ることができる。

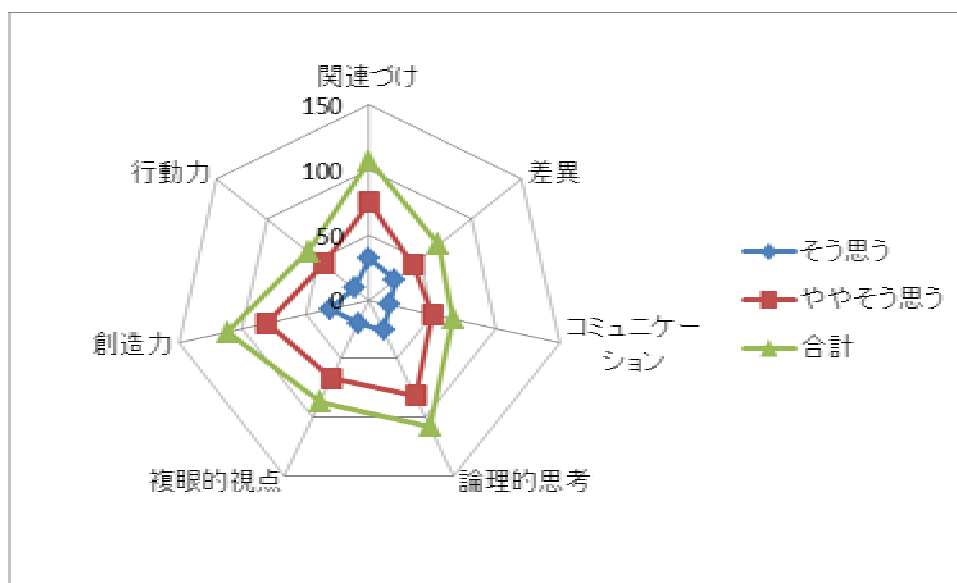
##### ◎授業を受けた学生の実感の傾向

ものづくりリテラシー分野は、芸術、技術、実験科学と、特性が異なる学問分野から構成されている。学生が選択できる授業が限られていることから、履修した授業がどのような学問分野に属するのかにより、関心の一致／不一致があらわれる可能性が高いという印象があった。そのようななか、「関連づけ」については、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成25年度は47.2%、平成26年度は51.2%と、約半数の学生が、授業内容に対して積極的に臨むことができた実感している。また、制作や実験・観察に不慣れであるという想定もあり、また、特徴的なカテゴリーであることから、教員・学生双方の試行錯誤があったと思われるが、最終的には、学生は各自の関心に引き付ける形で授業に臨むことができたようである。





平成 25 年度 (1 年後期) : ものづくりリテラシー



平成 26 年度 (2 年前期) : ものづくりリテラシー

ものづくりリテラシー分野は、ものづくりのエッセンスを取り込むことを推奨するカテゴリーであり、ディスカッションやプレゼンテーションとは異なる性質のアクティブラーニングを導入する挑戦が要された。ものをつくる行為を特化する教育目標は、当初は授業の方法上の試行錯誤があったようで、それが平成 25 年度の学生の自己評価にも影響した可能性が高いが、平成 26 年度は、全ての設問において自己評価が向上しており、カテゴリーの趣旨に即した授業展開が安定してきたことを読み取ることができる。

とくに学生の自己評価が高く出たのが「創造力」で、「そう思う」「ややそう思う」をあわせると、平成 25 年度が 56%、平成 26 年度が 53.6%と、全ての学修領域・分野のなかで突出する結果となった。また、「論理的思考」は、18.1%から 51.6%に、「複眼的視点」は 21.4%から 41.7%に向上しており、ものをつくる行為を通じて、汎用的な能力を備えうる可能性が示された。

#### ◎補足

シンポジウム等で、ものづくりリテラシー分野の教育内容を充実させるためには、使用する教室の設備や材料等の確保など、インフラ整備も同時に進めていく必要があるという意見が多く聞かれた。この点は、教育目標の共有や教育方法の開発とは別に、教員のニーズを把握しながら改善していく必要があるのではないかと思われる。

### (2) 基本概念学修領域

#### ◎教員の授業構想の傾向

基本概念学修領域は、学問分野の基礎となる概念を深く学ぶことを趣旨に、数学に関連する授業を中心としながらも、言語、哲学、自然科学を含めた構成となった。とくに際立ったのが、特定の現象を数字、数式、データ等と比較したり、事象を数的に分析・証明したりする作業の導入である。例えば、数学系の授業の場合、特定の現象を通じて数字や数式に親しみ、数学が身近な学問であることを、気づいてもらえるように方向づける傾向があった。

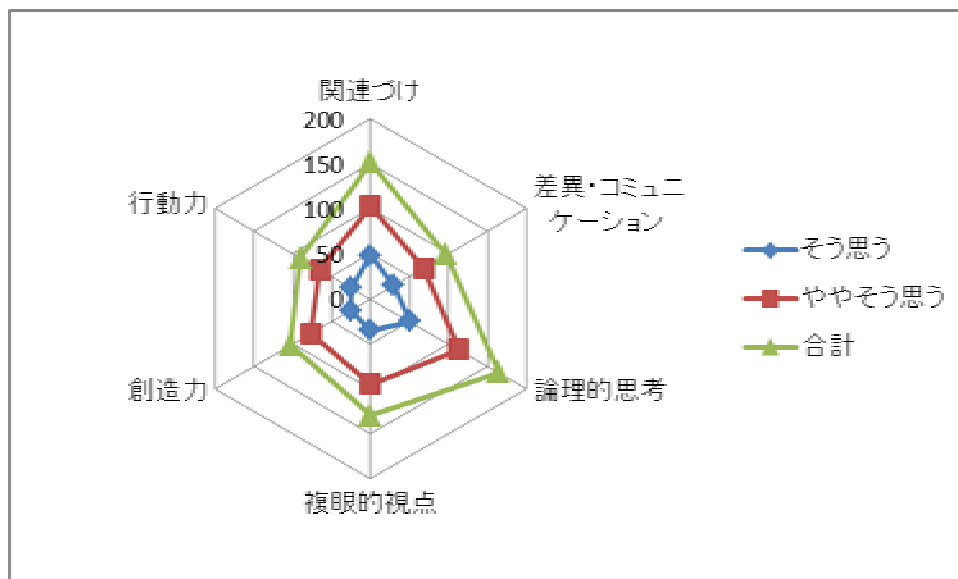
授業内でグループワークの導入を計画する教員も少なからず見られた。とくに、問題を解く作業の一環として、ディスカッションやプレゼンテーションを導入するという選択がとられる傾向があった。グループの構成員が、知識や意見を出し合いながら、問題を解くための方法を見つけていく、共同的な問題解決が目指されていた。多様な意見や方法を見出しながら、解答を導き出していくために、アクティブラーニングが導入されたと言える。

また、言語を扱う授業の場合は、言語学の特定の概念を深く掘り下げていく方法がとられていた。哲学の場合は、仮説、推論、証明など、思考のプロセスに関わる理論が取り上げられていた。自然科学の場合は、科学の基本的知識を解説するという内容であった。学問分野の違いに関わらず、特定の概念を深く掘り下げる授業、複数の概念を並列して扱う授業というように、概念の捉え方が授業ごとに違いがある。また、抽象的な思考に重きを置く場合と、現実社会の理解に重きを置く場合があるというように、思考の方向性についても、授業間で捉え方が異なっている。

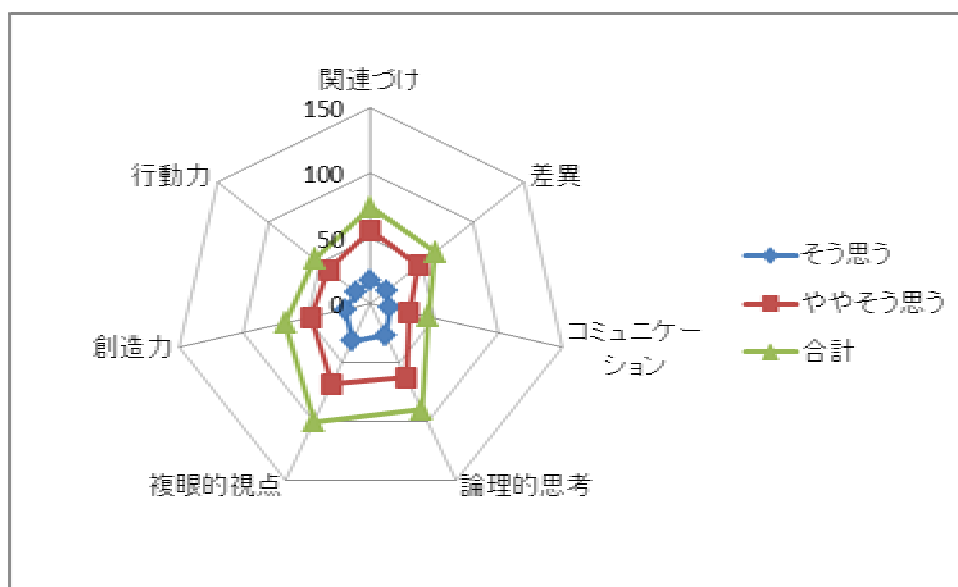
#### ◎授業を受けた学生の実感の傾向

基本概念学修領域は、「関連づけ」が、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成 25 年度は 46.5%、平成 26 年度は 36.5%と、やや低くなる傾向があった。基本概念学修領域は、

数学を中心に、言語、哲学、自然科学が含まれているが、学生の選択肢に全ての領域が含まれているわけではない。また、人文系・社会科学系の学生は、とくに数学に対する苦手意識が強い可能性が高い。それゆえ、授業内容と学生の関心との結びつき方に、一致／不一致があらわれやすくなり、自己評価が低く出るという結果につながったと思われる。



平成 25 年度 (1 年後期) : 基本概念



平成 26 年度 (2 年後期) : 基本概念

一方、学生の自己評価が高く出たのが「論理的思考」である。平成 25 年度は 50.5%、平成 26 年度は 44.3%が、「そう思う」「ややそう思う」と自己評価している。とくに数学関連の

授業が多いことから、数式を通じて現象を理解するという点に、論理性を見出す傾向があったのではないかとと思われる。

また、「複眼的視点」も、平成 25 年度は 40%、平成 26 年度は 49.3%と、概ね高く出る結果となった。数学に触れる機会が少ない学生が多いなか、数字や数式に触れること自体が、事象を日常とは異なる視点で読み解く契機となり、それが自己評価につながったのではないかと考える。

#### ◎補足

基本概念学修領域を構成する授業は、学問領域に偏りがあり、かつ、履修の選択肢も限定されるため、人文科学系と自然科学系のどちらの授業を履修したのかにより、学んだこと、身に付けたことの印象が大きく変わったと思われる。それゆえ、学問分野を限定する、あるいは、人文科学系・社会科学系・自然科学系の選択肢を豊富にする等、学修領域の機能を何らかの方向性を定めて明確化する必要があるように思われる。

### (3) 現代的課題学修領域

#### ◎教員の授業構想の傾向

現代的課題学修領域は、現代社会のなかにどのような課題があるのか（あるいは将来的に発生しうるのか）を、身近なメディア等を活用した情報収集を通じて学ぶことを目標としている。具体的には、授業で基礎的な知識を得たうえで、身近なメディアを使って複数の情報を収集し、その妥当性を見極めていくという流れを想定する授業が目立った。

インターネット情報の収集を課題とする記述が多いものの、聴き取り調査や記録（日誌）のように、それとは異なる情報収集を推奨する授業も見られた。当該学修領域には、人間の心理や健康に関連する授業が含まれていることから、心理テストや自分の健康の記録など、自分自身の状態と向き合うことから始めるという構想も見られた。

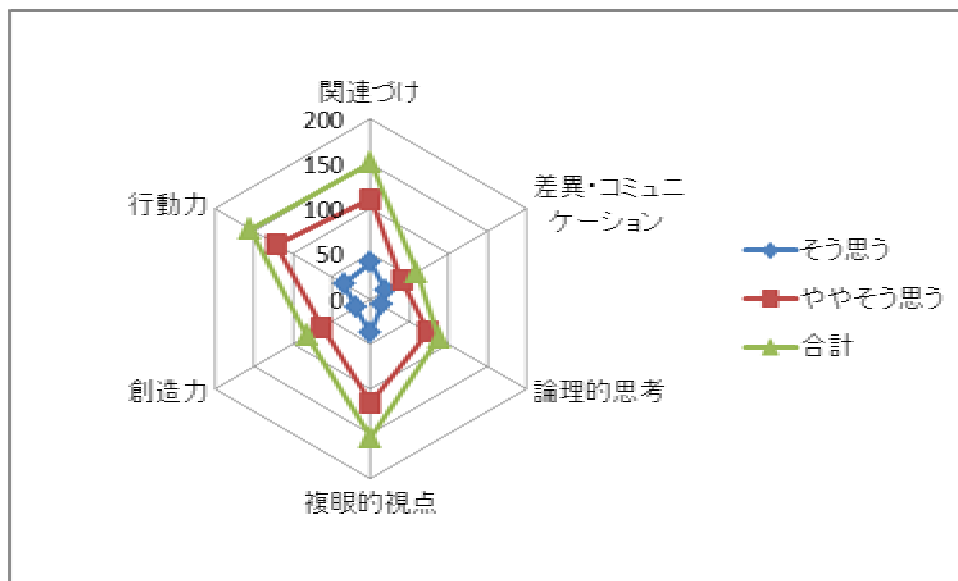
情報を収集するための手段は、インターネット等を介して得るものと、自己チェックのように、自分自身の体や心理から情報を得るものと、概ね2種類に分かれていた。当該学修領域では、情報収集と同じ程度に、ディスカッションを伴うグループワークが導入される傾向があった。情報を収集していく過程に、グループワークを取り入れることにより、複数の意見に触れることができるように配慮している事例もあった。

グループワークを導入するという選択は、市民リテラシー分野と共通しているが、当該学修領域の場合、特定の問題について議論するというよりも、情報収集のプロセスの一環として実施するという傾向があった。

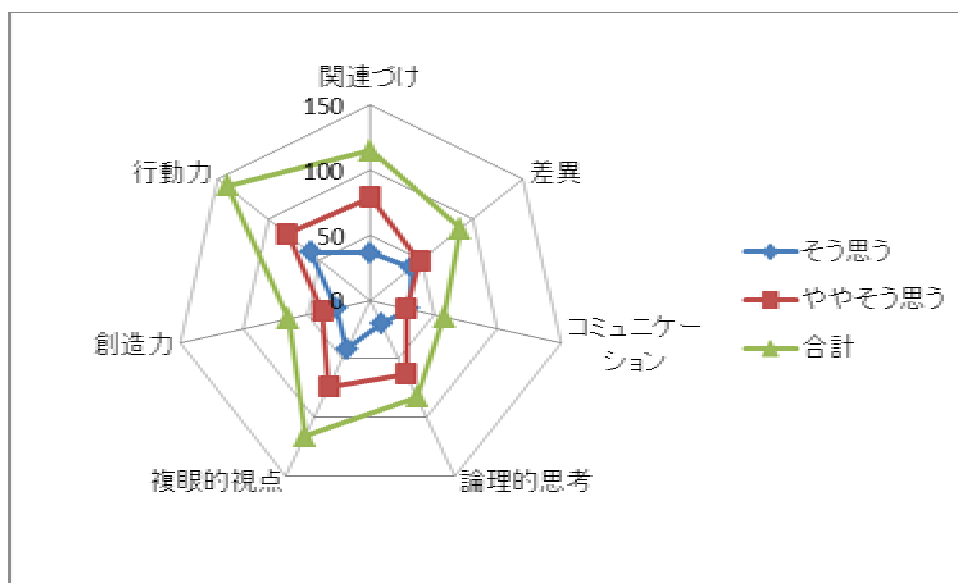
#### ◎授業を受けた学生の実感の傾向

「関連づけ」は、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成 25 年度は 50.3%、平成

26年度は53%と、半数以上の学生が、自分の知識や関心と結びつけながら受講できたと実感している。「複眼的視点」については、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成25年度が51.4%、平成26年度が53.5%であった。現代的課題学修領域は、とくにインターネット等のメディアを利用して、現代の課題に関連する情報を収集し、その内容の妥当性を検証する力を備えることが目標とされている。それゆえ、半数以上の学生が「複眼的視点」の重要性を認識できたという結果は、概ねカテゴリーの教育目標が達成できたことを裏づける。



平成25年度（1年後期）：現代的課題



平成26年度（2年前期）：現代的課題

また、「行動力」の場合は、平成 25 年度 51.6%、平成 26 年度 65%と、全ての学修領域・分野のなかでも、学生がその重要性をとくに強く認識できたことが読み取れる。現代的課題学修領域のなかに配置された授業の多くは、環境問題や人間の健康など、学生の生活に直接に関わる主題を取り扱っている。そのため、自分の行動の方向性や指針を、授業を通じて考えるきっかけになり、それが問題の解決に向けて行動するための基礎が備わったという感触を持つ根拠になったと思われる。

#### ◎補足

カリキュラム編成上の問題であるが、一部、科学リテラシー分野やものづくりリテラシー分野と、学問分野が重複している傾向がある。そこで、情報収集に重点を置く授業づくりを進めることで、趣旨の違いがいつそう明確になるとと思われる。

#### (4) 感性・創造学修領域

##### ◎教員の授業構想の傾向

感性・創造学修領域は、芸術を対象とする授業から構成されており、その内容は、美術、音楽、小説、映画など多岐に渡っている。いずれの主題においても、作品に触れるという経験が重視されている。そのため、CDを聴く、映像を見る、小説を読むなど、大部分の授業において、作品鑑賞の機会が設けられていた。作品を鑑賞する経験を介して、作品の良い所を自分なりに見つける、作品の制作方法や構造を分析しようとする姿勢が求められた。

具体的には、音楽の授業の場合、鑑賞を通じて「目」や「耳」を養い、「聴き方」を習得することに重点が置かれていた。書道や漢文を扱う場合は、「漢字」に触れることにより、意味や含意を感じ取り、それを他者に伝える力を備えることが目標に掲げられる傾向があった。また、小説のような文字テキストを扱う授業の場合は、言葉や文体が持つ力や、その背後に隠された意味を見つめる作業を通じて、感性を高めることを目標に授業が計画されていた。

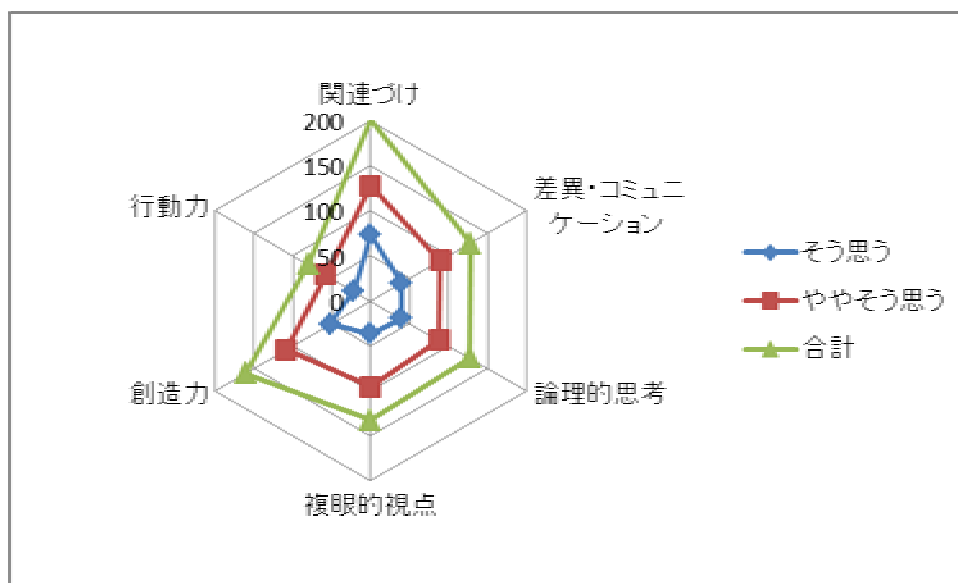
また、作品が制作（執筆）された時代的背景や作者の意図など、視覚化されない部分を読み解く力を強調する授業もあった。演奏や書道の実践を導入する授業も含まれたが、ものづくりリテラシー分野と同様に、教室など設備や受講者の人数の問題からか、簡単な作業にとどめる傾向があった。そうであるとはいえ、ディスカッションやプレゼンテーション等とは異なるアクティブラーニングの試みとして、実践重視の授業は、感性・創造学修領域に独自の方向性を与えることに強く寄与している。

##### ◎授業を受けた学生の実感の傾向

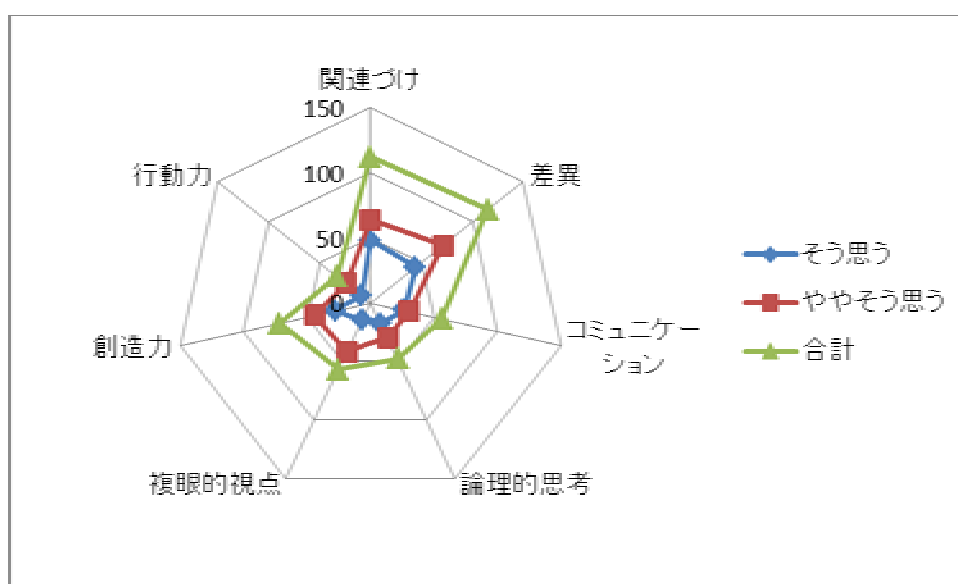
「関連づけ」については、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて、平成 25 年度は 57.9%、平成 26 年度は 73.7%という高結果であり、受講した学生の相当数が、自分の関心・興味に引き付けて授業を受講できたということが分かる。感性・創造学修領域は、美術、音楽、小説、

映画など、学生と何らかの接点がある主題を扱っているため、各自の関心を授業内容に反映させやすかったのではないかとと思われる。

また、平成 25 年度の「差異理解・コミュニケーション」は、36.8%が「そう思う」「ややそう思う」と回答しており、それほど重要度の認識には至っていないが、平成 26 年度は、「差異理解」については 75.6%という高い数値が出た。その理由として、当該学修領域の授業に共通する力点が「鑑賞」であることから、自分の感性と作品・作者の感性の比較、あるいは、作品間の構成の比較など、比較する機会が多く持たれ、それが「差異理解」に対する高い意識が持たれる要因となったと考えられる。



平成 26 年度 (1 年後期) : 感性・創造



平成 26 年度 (2 年前期) : 感性・創造

また、「創造力」については、平成 25 年度は 46.4%、平成 26 年度は 47.3%と、概ね高い数値が出たが、「関連づけ」の好結果を踏まえると、さらに「創造力」に対する意識を伸ばすように、授業を構想することができるのではないかと考える。具体的には、「鑑賞」だけではなく、鑑賞した作品を分析し、批評文を作成する作業により力を入れる、その過程で感性を磨くことにどのような意味があることを適確に伝える等がありうる。

#### ◎補足

感性・創造学修領域は、学修領域・分野のなかで、ものづくりリテラシー分野と同じく、実践に重きを置いた特殊なカテゴリであることから、能力の育成の方向性を特化することにより、その役割がいつそう明確になるという可能性が、この結果から読み取ることができる。実践を伴うか否かで、学生が授業を通じて得た達成感の質は大きく変わる。そのため、実践の導入を重視していいのか、それとも大部分の授業で行うことができる作品分析・批評等に特化するのか、ある程度の方向性を定めていくことにより、履修の選択肢の制限に左右される側面が和らぐのではないかと考える。



平成 25 年度 教養科目アンケート（学修領域・リテラシー分野別）

回答数 203

科目名称 L 市民リテラシー

回収率 88.6%

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	36.5	34.5	13.3	10.3	5.4	0.0
	回答数	74	70	27	21	11	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	10.8	27.6	27.1	20.7	13.8	0.0
	回答数	22	56	55	42	28	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	16.7	37.4	21.7	12.8	10.8	0.5
	回答数	34	76	44	26	22	1
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解して他者とコミュニケーションをとる力が身についた。	%	13.8	36.0	20.7	17.2	12.3	0.0
	回答数	28	73	42	35	25	0
問 5 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考える力が身についた。	%	8.9	29.6	35.0	17.7	8.9	0.0
	回答数	18	60	71	36	18	0
問 6 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から比較し判断する力が身についた。	%	13.3	37.4	26.6	13.8	8.9	0.0
	回答数	27	76	54	28	18	0
問 7 この授業を通じて、想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法が身についた。	%	4.9	18.7	32.5	27.1	16.7	0.0
	回答数	10	38	66	55	34	0
問 8 この授業を通じて、社会の課題を発見し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	21.7	36.0	18.7	12.3	10.8	0.5
	回答数	44	73	38	25	22	1
問 9 教員の説明はわかりやすい。	%	27.1	27.6	20.7	15.3	9.4	0.0
	回答数	55	56	42	31	19	0
問10 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等)はうまくとれている。	%	13.3	22.7	33.0	18.7	11.3	1.0
	回答数	27	46	67	38	23	2
問11 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	12.8	24.1	34.5	17.2	11.3	0.0
	回答数	26	49	70	35	23	0
問12 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	10.3	36.0	28.6	14.3	10.8	0.0
	回答数	21	73	58	29	22	0
問13 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	25.6	32.0	25.1	9.4	7.9	0.0
	回答数	52	65	51	19	16	0
問14 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	0.5	3.9	44.3	26.1	5.9	19.2
	回答数	1	8	90	53	12	39
問15 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートの費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	3.4	6.4	15.3	35.0	21.7	18.2
	回答数	7	13	31	71	44	37

回答数 228

科目名称 L 多文化リテラシー

回収率 89.8%

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	37.7	38.2	18.9	3.9	1.3	0.0
	回答数	86	87	43	9	3	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	11.4	27.6	30.3	23.2	7.5	0.0
	回答数	26	63	69	53	17	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	15.8	48.7	23.7	9.6	2.2	0.0
	回答数	36	111	54	22	5	0
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解して他者とコミュニケーションをとる力が身についた。	%	15.8	36.0	24.6	17.5	5.7	0.4
	回答数	36	82	56	40	13	1
問 5 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考える力が身についた。	%	7.0	26.8	40.4	18.4	7.0	0.4
	回答数	16	61	92	42	16	1
問 6 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から比較し判断する力が身についた。	%	15.4	34.6	28.9	16.7	3.9	0.4
	回答数	35	79	66	38	9	1
問 7 この授業を通じて、想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法が身についた。	%	5.7	25.4	41.2	20.6	7.0	0.0
	回答数	13	58	94	47	16	0
問 8 この授業を通じて、社会の課題を発見し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	10.5	33.8	38.6	13.6	3.5	0.0
	回答数	24	77	88	31	8	0
問 9 教員の説明はわかりやすい。	%	31.6	35.5	24.1	7.5	0.9	0.4
	回答数	72	81	55	17	2	1
問10 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等)はうまくとれている。	%	11.4	23.2	44.3	14.5	6.1	0.4
	回答数	26	53	101	33	14	1
問11 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	7.0	27.6	46.9	14.0	4.4	0.0
	回答数	16	63	107	32	10	0
問12 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	7.5	39.5	40.4	10.5	2.2	0.0
	回答数	17	90	92	24	5	0
問13 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	26.8	28.1	32.5	6.6	5.7	0.4
	回答数	61	64	74	15	13	1
問14 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	3.5	7.5	59.2	9.2	0.4	20.2
	回答数	8	17	135	21	1	46
問15 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートの費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	5.3	2.2	11.0	35.5	28.1	18.0
	回答数	12	5	25	81	64	41

回答数 201

科目名称 L 科学リテラシー

回収率 85.9%

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	25.4	49.8	15.9	6.0	1.5	1.5
	回答数	51	100	32	12	3	3
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	9.0	26.4	31.8	21.9	10.4	0.5
	回答数	18	53	64	44	21	1
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	13.4	37.3	30.3	12.4	5.5	1.0
	回答数	27	75	61	25	11	2
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解して他者とコミュニケーションをとる力が身についた。	%	8.5	19.9	36.8	19.4	14.9	0.5
	回答数	17	40	74	39	30	1
問 5 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考える力が身についた。	%	6.5	34.8	36.3	15.9	6.0	0.5
	回答数	13	70	73	32	12	1
問 6 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から比較し判断する力が身についた。	%	8.0	39.8	31.3	15.4	5.0	0.5
	回答数	16	80	63	31	10	1
問 7 この授業を通じて、想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法が身についた。	%	8.0	22.4	38.3	20.4	10.4	0.5
	回答数	16	45	77	41	21	1
問 8 この授業を通じて、社会の課題を発見し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	5.5	29.4	36.3	19.4	9.0	0.5
	回答数	11	59	73	39	18	1
問 9 教員の説明はわかりやすい。	%	25.9	35.8	24.4	8.5	5.0	0.5
	回答数	52	72	49	17	10	1
問10 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等)はうまくとれている。	%	11.4	22.9	36.3	18.9	10.0	0.5
	回答数	23	46	73	38	20	1
問11 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	7.5	23.9	40.8	18.9	8.5	0.5
	回答数	15	48	82	38	17	1
問12 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	10.0	34.3	39.3	12.4	3.5	0.5
	回答数	20	69	79	25	7	1
問13 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	24.9	29.9	29.9	9.5	5.0	1.0
	回答数	50	60	60	19	10	2
問14 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	0.5	4.0	50.7	23.4	6.0	15.4
	回答数	1	8	102	47	12	31
問15 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートの費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	3.5	6.0	15.9	38.3	18.4	17.9
	回答数	7	12	32	77	37	36

回答数 182

科目名称 Lものづくりリテラシー

回収率 76.8%

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	22.0	44.5	15.9	9.9	7.7	0.0
	回答数	40	81	29	18	14	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	6.6	20.9	32.4	22.0	18.1	0.0
	回答数	12	38	59	40	33	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	11.5	35.7	22.5	19.2	11.0	0.0
	回答数	21	65	41	35	20	0
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解して他者とコミュニケーションをとる力が身についた。	%	4.4	19.2	33.5	24.2	18.7	0.0
	回答数	8	35	61	44	34	0
問 5 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考える力が身についた。	%	3.8	14.3	31.3	28.0	22.5	0.0
	回答数	7	26	57	51	41	0
問 6 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から比較し判断する力が身についた。	%	3.3	18.1	29.7	26.9	22.0	0.0
	回答数	6	33	54	49	40	0
問 7 この授業を通じて、想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法が身についた。	%	21.4	34.6	18.1	14.3	11.5	0.0
	回答数	39	63	33	26	21	0
問 8 この授業を通じて、社会の課題を発見し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	2.2	11.5	26.4	32.4	27.5	0.0
	回答数	4	21	48	59	50	0
問 9 教員の説明はわかりやすい。	%	8.8	31.9	31.9	17.0	10.4	0.0
	回答数	16	58	58	31	19	0
問10 教員とのコミュニケーション(質疑, 討論, コメント用紙, ネット等)はうまくとれている。	%	8.8	22.5	29.1	20.9	18.7	0.0
	回答数	16	41	53	38	34	0
問11 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	5.5	16.5	40.1	23.6	14.3	0.0
	回答数	10	30	73	43	26	0
問12 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	7.1	29.7	39.6	13.2	10.4	0.0
	回答数	13	54	72	24	19	0
問13 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	21.4	20.9	30.2	15.9	11.0	0.5
	回答数	39	38	55	29	20	1
問14 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	1.1	6.6	53.8	15.9	3.8	18.7
	回答数	2	12	98	29	7	34
問15 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートの費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	3.8	6.6	12.6	25.3	34.1	17.6
	回答数	7	12	23	46	62	32

回答数 325

科目名称 L 基本概念

回収率 93.9%

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	29.8	40.0	14.5	11.7	4.0	0.0
	回答数	97	130	47	38	13	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	8.6	24.0	26.5	20.6	20.3	0.0
	回答数	28	78	86	67	66	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	14.8	31.7	26.5	16.3	10.2	0.6
	回答数	48	103	86	53	33	2
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解して他者とコミュニケーションをとる力が身についた。	%	8.9	20.9	21.2	25.8	22.8	0.3
	回答数	29	68	69	84	74	1
問 5 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考える力が身についた。	%	15.7	34.8	26.5	14.5	8.6	0.0
	回答数	51	113	86	47	28	0
問 6 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から比較し判断する力が身についた。	%	10.8	29.2	31.7	16.9	11.1	0.3
	回答数	35	95	103	55	36	1
問 7 この授業を通じて、想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法が身についた。	%	8.0	23.7	32.3	18.5	17.5	0.0
	回答数	26	77	105	60	57	0
問 8 この授業を通じて、社会の課題を発見し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	7.7	20.0	28.0	22.2	22.2	0.0
	回答数	25	65	91	72	72	0
問 9 教員の説明はわかりやすい。	%	18.8	34.2	29.5	11.1	6.5	0.0
	回答数	61	111	96	36	21	0
問10 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等)はうまくとれている。	%	12.0	29.8	28.3	17.2	12.0	0.6
	回答数	39	97	92	56	39	2
問11 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	7.7	22.5	36.6	20.9	12.3	0.0
	回答数	25	73	119	68	40	0
問12 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	9.2	25.5	38.8	15.7	10.8	0.0
	回答数	30	83	126	51	35	0
問13 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	22.5	24.9	29.8	11.7	10.8	0.3
	回答数	73	81	97	38	35	1
問14 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	1.8	2.5	41.5	29.5	10.2	14.5
	回答数	6	8	135	96	33	47
問15 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートの費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	2.5	4.0	15.7	39.7	24.0	14.2
	回答数	8	13	51	129	78	46

回答数 300

科目名称 L 現代的課題

回収率 85.7%

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	28.7	49.3	10.3	7.0	4.3	0.3
	回答数	86	148	31	21	13	1
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	7.0	26.3	28.0	24.0	14.3	0.3
	回答数	21	79	84	72	43	1
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	13.3	37.0	31.0	12.3	5.3	1.0
	回答数	40	111	93	37	16	3
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解して他者とコミュニケーションをとる力が身についた。	%	6.3	13.3	29.7	28.7	21.0	1.0
	回答数	19	40	89	86	63	3
問 5 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考える力が身についた。	%	4.7	24.7	33.7	22.7	14.0	0.3
	回答数	14	74	101	68	42	1
問 6 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から比較し判断する力が身についた。	%	12.7	38.7	25.7	15.3	7.0	0.7
	回答数	38	116	77	46	21	2
問 7 この授業を通じて、想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法が身についた。	%	6.3	21.0	32.7	24.3	15.3	0.3
	回答数	19	63	98	73	46	1
問 8 この授業を通じて、社会の課題を発見し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	11.3	40.3	24.3	16.0	7.7	0.3
	回答数	34	121	73	48	23	1
問 9 教員の説明はわかりやすい。	%	26.7	36.0	21.0	8.7	7.0	0.7
	回答数	80	108	63	26	21	2
問10 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等)はうまくとれている。	%	11.0	24.0	30.0	24.0	10.3	0.7
	回答数	33	72	90	72	31	2
問11 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	9.0	31.7	31.7	17.0	10.3	0.3
	回答数	27	95	95	51	31	1
問12 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	9.3	26.0	44.3	13.3	6.7	0.3
	回答数	28	78	133	40	20	1
問13 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	27.7	26.0	24.0	13.3	8.7	0.3
	回答数	83	78	72	40	26	1
問14 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	2.0	5.3	52.7	21.3	4.3	14.3
	回答数	6	16	158	64	13	43
問15 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートの費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	2.3	3.7	10.3	32.7	37.3	13.7
	回答数	7	11	31	98	112	41

回答数 347

科目名称 L 感性創造

回収率 90.1%

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	28.0	49.6	14.4	5.5	2.3	0.3
	回答数	97	172	50	19	8	1
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	10.1	28.5	30.5	20.7	10.1	0.0
	回答数	35	99	106	72	35	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	21.0	36.9	28.0	9.5	4.0	0.6
	回答数	73	128	97	33	14	2
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解して他者とコミュニケーションをとる力が身についた。	%	11.2	25.6	35.4	17.6	10.1	0.0
	回答数	39	89	123	61	35	0
問 5 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考える力が身についた。	%	11.2	25.4	32.9	22.2	8.4	0.0
	回答数	39	88	114	77	29	0
問 6 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から比較し判断する力が身についた。	%	10.7	27.7	34.6	17.6	9.5	0.0
	回答数	37	96	120	61	33	0
問 7 この授業を通じて、想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法が身についた。	%	15.0	31.4	29.4	16.1	8.1	0.0
	回答数	52	109	102	56	28	0
問 8 この授業を通じて、社会の課題を発見し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	6.3	16.7	38.9	21.3	16.4	0.3
	回答数	22	58	135	74	57	1
問 9 教員の説明はわかりやすい。	%	24.5	43.8	22.2	6.3	3.2	0.0
	回答数	85	152	77	22	11	0
問10 教員とのコミュニケーション(質疑, 討論, コメント用紙, ネット等)はうまくとれている。	%	10.4	28.0	40.3	13.5	7.8	0.0
	回答数	36	97	140	47	27	0
問11 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	7.8	27.7	45.0	12.4	6.9	0.3
	回答数	27	96	156	43	24	1
問12 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	11.8	34.9	40.3	10.1	2.9	0.0
	回答数	41	121	140	35	10	0
問13 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	21.0	24.8	31.7	13.5	8.4	0.6
	回答数	73	86	110	47	29	2
問14 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	1.2	7.2	60.2	15.0	2.3	14.1
	回答数	4	25	209	52	8	49
問15 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートの費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	4.6	6.3	11.5	28.0	36.0	13.5
	回答数	16	22	40	97	125	47

平成 26 年度 教養科目アンケート（学修領域・リテラシー分野別）

市民リテラシー全体

回答数 218

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	23.9	41.3	18.8	14.2	1.8	0.0
	回答数	52	90	41	31	4	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	9.6	23.9	29.4	26.6	10.6	0.0
	回答数	21	52	64	58	23	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	13.8	30.7	31.7	17.9	6.0	0.0
	回答数	30	67	69	39	13	0
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解した。	%	22.0	44.0	20.6	9.6	1.8	1.8
	回答数	48	96	45	21	4	4
問 5 この授業を通じて、他者とコミュニケーションをとることの重要性を理解した。	%	8.7	24.8	32.6	23.4	10.6	0.0
	回答数	19	54	71	51	23	0
問 6 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考えたり、表現したりすることの重要性を理解した。	%	13.8	28.4	32.1	19.7	6.0	0.0
	回答数	30	62	70	43	13	0
問 7 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から判断する重要性を理解した。	%	27.1	36.2	22.0	12.4	2.3	0.0
	回答数	59	79	48	27	5	0
問 8 この授業を通じて、知識や想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法を考えた。	%	6.4	17.4	39.4	28.0	8.7	0.0
	回答数	14	38	86	61	19	0
問 9 この授業を通じて、日常生活や社会の課題を認識し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	15.1	35.8	31.2	15.6	2.3	0.0
	回答数	33	78	68	34	5	0
問10 教員の説明はわかりやすい。	%	21.1	28.0	31.2	15.6	4.1	0.0
	回答数	46	61	68	34	9	0
問11 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等で)はうまくとれている。	%	11.0	17.9	43.6	17.9	9.6	0.0
	回答数	24	39	95	39	21	0
問12 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	7.8	17.9	48.2	17.9	8.3	0.0
	回答数	17	39	105	39	18	0
問13 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	6.9	24.8	48.2	16.1	4.1	0.0
	回答数	15	54	105	35	9	0
問14 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	16.1	24.8	39.9	14.2	5.0	0.0
	回答数	35	54	87	31	11	0
問15 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	0.9	3.2	46.3	29.8	4.1	15.6
	回答数	2	7	101	65	9	34
問16 この授業のための週あたりの学習時間 (課題・レポートに費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	6.4	5.0	13.8	25.7	34.4	14.7
	回答数	14	11	30	56	75	32



多文化リテラシー全体

回答数 214

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	27.6	41.1	20.1	9.3	1.9	0.0
	回答数	59	88	43	20	4	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	13.6	23.8	32.7	19.2	10.7	0.0
	回答数	29	51	70	41	23	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	16.4	39.3	24.8	14.5	5.1	0.0
	回答数	35	84	53	31	11	0
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解した。	%	29.0	40.7	18.2	7.9	1.4	2.8
	回答数	62	87	39	17	3	6
問 5 この授業を通じて、他者とコミュニケーションをとることの重要性を理解した。	%	14.5	22.0	33.6	19.2	10.7	0.0
	回答数	31	47	72	41	23	0
問 6 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考えたり、表現したりすることの重要性を理解した。	%	14.0	26.6	32.2	21.0	6.1	0.0
	回答数	30	57	69	45	13	0
問 7 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から判断する重要性を理解した。	%	17.3	30.8	30.4	15.4	5.6	0.5
	回答数	37	66	65	33	12	1
問 8 この授業を通じて、知識や想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法を考えた。	%	9.8	18.2	38.8	21.5	11.7	0.0
	回答数	21	39	83	46	25	0
問 9 この授業を通じて、日常生活や社会の課題を認識し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	9.8	17.8	43.5	20.1	8.9	0.0
	回答数	21	38	93	43	19	0
問10 教員の説明はわかりやすい。	%	16.8	30.8	30.4	13.6	7.5	0.9
	回答数	36	66	65	29	16	2
問11 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等で)はうまくとれている。	%	13.6	25.2	38.3	15.0	7.9	0.0
	回答数	29	54	82	32	17	0
問12 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	5.6	21.0	46.7	18.2	8.4	0.0
	回答数	12	45	100	39	18	0
問13 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	9.8	27.1	42.1	15.9	5.1	0.0
	回答数	21	58	90	34	11	0
問14 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	19.6	23.4	31.8	12.6	11.2	1.4
	回答数	42	50	68	27	24	3
問15 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	0.0	6.1	53.7	26.2	5.6	8.4
	回答数	0	13	115	56	12	18
問16 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートに費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	7.0	4.7	15.4	37.4	29.0	6.5
	回答数	15	10	33	80	62	14

科学リテラシー全体

回答数 149

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	20.1	41.6	16.8	8.7	12.1	0.7
	回答数	30	62	25	13	18	1
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	6.7	20.8	28.9	22.1	21.5	0.0
	回答数	10	31	43	33	32	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	9.4	24.2	32.9	14.1	18.8	0.7
	回答数	14	36	49	21	28	1
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解した。	%	9.4	16.8	23.5	18.1	29.5	2.7
	回答数	14	25	35	27	44	4
問 5 この授業を通じて、他者とコミュニケーションをとることの重要性を理解した。	%	9.4	10.7	24.2	22.8	32.9	0.0
	回答数	14	16	36	34	49	0
問 6 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考えたり、表現したりすることの重要性を理解した。	%	10.7	27.5	32.2	12.8	16.1	0.7
	回答数	16	41	48	19	24	1
問 7 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から判断する重要性を理解した。	%	14.1	25.5	32.9	11.4	16.1	0.0
	回答数	21	38	49	17	24	0
問 8 この授業を通じて、知識や想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法を考えた。	%	8.1	17.4	30.2	20.8	23.5	0.0
	回答数	12	26	45	31	35	0
問 9 この授業を通じて、日常生活や社会の課題を認識し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	9.4	14.1	30.2	18.8	27.5	0.0
	回答数	14	21	45	28	41	0
問10 教員の説明はわかりやすい。	%	8.1	18.8	34.9	16.8	20.8	0.7
	回答数	12	28	52	25	31	1
問11 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等で)はうまくとれている。	%	5.4	16.8	32.9	16.1	28.9	0.0
	回答数	8	25	49	24	43	0
問12 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	6.0	11.4	47.7	14.1	20.8	0.0
	回答数	9	17	71	21	31	0
問13 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	6.0	18.1	35.6	22.1	18.1	0.0
	回答数	9	27	53	33	27	0
問14 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	24.8	21.5	38.3	6.0	9.4	0.0
	回答数	37	32	57	9	14	0
問15 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	2.7	2.7	22.8	39.6	22.1	10.1
	回答数	4	4	34	59	33	15
問16 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートに費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	2.7	2.7	12.1	42.3	34.2	6.0
	回答数	4	4	18	63	51	9

ものづくりリテラシー全体

回答数 209

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	31.6	46.4	12.9	5.7	3.3	0.0
	回答数	66	97	27	12	7	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	8.6	22.0	34.4	21.5	12.9	0.5
	回答数	18	46	72	45	27	1
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	15.3	35.9	31.1	13.4	4.3	0.0
	回答数	32	75	65	28	9	0
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解した。	%	12.0	20.6	38.3	17.7	10.0	1.4
	回答数	25	43	80	37	21	3
問 5 この授業を通じて、他者とコミュニケーションをとることの重要性を理解した。	%	7.7	23.9	37.3	16.7	14.4	0.0
	回答数	16	50	78	35	30	0
問 6 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考えたり、表現したりすることの重要性を理解した。	%	12.4	39.2	29.7	12.0	6.7	0.0
	回答数	26	82	62	25	14	0
問 7 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から判断する重要性を理解した。	%	9.6	32.1	38.8	11.5	8.1	0.0
	回答数	20	67	81	24	17	0
問 8 この授業を通じて、知識や想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法を考えた。	%	14.8	38.8	28.7	12.0	5.7	0.0
	回答数	31	81	60	25	12	0
問 9 この授業を通じて、日常生活や社会の課題を認識し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	7.2	21.5	40.7	21.1	9.6	0.0
	回答数	15	45	85	44	20	0
問10 教員の説明はわかりやすい。	%	33.5	26.8	26.3	6.7	6.2	0.5
	回答数	70	56	55	14	13	1
問11 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等で)はうまくとれている。	%	10.0	28.7	37.3	12.0	10.5	1.4
	回答数	21	60	78	25	22	3
問12 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	9.1	15.3	47.8	12.4	14.4	1.0
	回答数	19	32	100	26	30	2
問13 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	11.5	32.5	33.5	15.3	6.7	0.5
	回答数	24	68	70	32	14	1
問14 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	26.8	19.6	34.9	12.9	5.3	0.5
	回答数	56	41	73	27	11	1
問15 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	1.9	8.6	62.7	14.8	3.8	8.1
	回答数	4	18	131	31	8	17
問16 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートに費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	1.4	3.3	11.0	31.1	44.5	8.6
	回答数	3	7	23	65	93	18

基本概念全体

回答数 203

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	19.2	46.8	16.7	7.9	9.4	0.0
	回答数	39	95	34	16	19	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	7.9	24.1	36.9	14.8	16.3	0.0
	回答数	16	49	75	30	33	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	8.9	27.6	34.0	14.8	13.8	1.0
	回答数	18	56	69	30	28	2
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解した。	%	7.9	23.2	35.5	16.3	15.8	1.5
	回答数	16	47	72	33	32	3
問 5 この授業を通じて、他者とコミュニケーションをとることの重要性を理解した。	%	7.4	14.8	40.9	21.2	15.3	0.5
	回答数	15	30	83	43	31	1
問 6 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考えたり、表現したりすることの重要性を理解した。	%	13.3	31.0	35.0	10.8	9.4	0.5
	回答数	27	63	71	22	19	1
問 7 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から判断する重要性を理解した。	%	15.8	33.5	30.0	12.3	7.9	0.5
	回答数	32	68	61	25	16	1
問 8 この授業を通じて、知識や想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法を考えた。	%	9.9	23.2	39.4	15.8	10.8	1.0
	回答数	20	47	80	32	22	2
問 9 この授業を通じて、日常生活や社会の課題を認識し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	6.9	20.2	38.4	18.2	15.3	1.0
	回答数	14	41	78	37	31	2
問10 教員の説明はわかりやすい。	%	19.2	25.1	27.1	13.3	14.3	1.0
	回答数	39	51	55	27	29	2
問11 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等で)はうまくとれている。	%	9.4	18.2	37.9	17.2	15.8	1.5
	回答数	19	37	77	35	32	3
問12 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	6.9	15.3	42.4	20.7	13.3	1.5
	回答数	14	31	86	42	27	3
問13 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	9.9	24.1	35.5	16.7	12.3	1.5
	回答数	20	49	72	34	25	3
問14 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	14.3	17.7	37.9	14.3	14.3	1.5
	回答数	29	36	77	29	29	3
問15 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	0.0	1.5	41.9	31.5	14.8	10.3
	回答数	0	3	85	64	30	21
問16 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートに費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	5.4	2.0	14.8	36.5	33.0	8.4
	回答数	11	4	30	74	67	17

現代的課題全体

回答数 217

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	34.1	34.6	21.7	6.0	3.7	0.0
	回答数	74	75	47	13	8	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	9.7	29.5	35.0	17.5	8.3	0.0
	回答数	21	64	76	38	18	0
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	16.6	36.4	29.0	12.9	5.1	0.0
	回答数	36	79	63	28	11	0
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解した。	%	18.4	22.1	39.6	12.9	6.0	0.9
	回答数	40	48	86	28	13	2
問 5 この授業を通じて、他者とコミュニケーションをとることの重要性を理解した。	%	13.8	12.9	39.2	19.8	14.3	0.0
	回答数	30	28	85	43	31	0
問 6 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考えたり、表現したりすることの重要性を理解した。	%	9.2	29.0	36.4	17.1	8.3	0.0
	回答数	20	63	79	37	18	0
問 7 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から判断する重要性を理解した。	%	19.4	34.1	30.9	11.1	4.6	0.0
	回答数	42	74	67	24	10	0
問 8 この授業を通じて、知識や想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法を考えた。	%	12.4	17.5	40.1	19.4	10.1	0.5
	回答数	27	38	87	42	22	1
問 9 この授業を通じて、日常生活や社会の課題を認識し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	27.2	37.8	22.6	7.4	5.1	0.0
	回答数	59	82	49	16	11	0
問10 教員の説明はわかりやすい。	%	19.4	31.8	32.7	9.7	6.0	0.5
	回答数	42	69	71	21	13	1
問11 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等で)はうまくとれている。	%	10.6	19.4	38.2	16.6	14.7	0.5
	回答数	23	42	83	36	32	1
問12 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	11.5	20.7	41.9	16.6	8.8	0.5
	回答数	25	45	91	36	19	1
問13 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	12.0	30.4	38.2	12.4	6.5	0.5
	回答数	26	66	83	27	14	1
問14 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	17.5	18.4	44.2	10.6	7.8	1.4
	回答数	38	40	96	23	17	3
問15 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	0.0	4.6	47.9	30.0	7.8	9.7
	回答数	0	10	104	65	17	21
問16 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートに費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	2.3	3.2	18.0	32.3	35.5	8.8
	回答数	5	7	39	70	77	19

感性創造全体

回答数 152

設 問		①そう 思う	②やや そう思う	③どちら ともいえ ない	④あまり そう思 わない	⑤そう 思わな い(該当 しない)	無回答
		%					
問 1 この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた。	%	40.1	46.7	8.6	2.6	2.0	0.0
	回答数	61	71	13	4	3	0
問 2 この授業に触発されて、自分で考えたり調べたりしている。	%	19.7	34.9	27.6	11.2	5.9	0.7
	回答数	30	53	42	17	9	1
問 3 自分の興味や関心と関連づけながら授業に取り組むことができた。	%	31.6	42.1	15.8	6.6	3.3	0.7
	回答数	48	64	24	10	5	1
問 4 この授業を通じて、文化や価値観の差異を理解した。	%	28.9	46.7	18.4	3.3	2.0	0.7
	回答数	44	71	28	5	3	1
問 5 この授業を通じて、他者とコミュニケーションをとることの重要性を理解した。	%	17.1	19.7	32.2	19.1	11.2	0.7
	回答数	26	30	49	29	17	1
問 6 この授業を通じて、ものごとを筋道を立てて論理的に考えたり、表現したりすることの重要性を理解した。	%	11.8	19.7	41.4	15.1	11.2	0.7
	回答数	18	30	63	23	17	1
問 7 この授業を通じて、情報の確かさを複数の視点から判断する重要性を理解した。	%	9.9	27.6	36.2	15.1	10.5	0.7
	回答数	15	42	55	23	16	1
問 8 この授業を通じて、知識や想像力を駆使して新しいアイデアを生み出し、それを形にするための手法を考えた。	%	18.4	28.9	33.6	11.8	6.6	0.7
	回答数	28	44	51	18	10	1
問 9 この授業を通じて、日常生活や社会の課題を認識し、その解決に向けてどのように行動するべきかを考えた。	%	5.9	15.8	44.1	19.7	13.8	0.7
	回答数	9	24	67	30	21	1
問10 教員の説明はわかりやすい。	%	38.8	40.1	17.1	2.0	1.3	0.7
	回答数	59	61	26	3	2	1
問11 教員とのコミュニケーション(質疑、討論、コメント用紙、ネット等で)はうまくとれている。	%	20.4	38.8	26.3	9.9	3.3	1.3
	回答数	31	59	40	15	5	2
問12 この授業のシラバスは、授業の内容理解を深めるにあたり役に立った。	%	11.8	28.3	43.4	8.6	6.6	1.3
	回答数	18	43	66	13	10	2
問13 あなたは、この授業で設定された教育目標に到達できたと思いますか。	%	17.8	38.8	31.6	7.9	3.3	0.7
	回答数	27	59	48	12	5	1
問14 自分が選択できる科目以外にも、受講したいと思う科目があった。	%	19.1	22.4	34.9	11.2	10.5	2.0
	回答数	29	34	53	17	16	3
問15 授業の難易度	選択肢	易しすぎる	易しい	ちょうどいい	難しい	難しすぎる	無回答
	%	0.0	4.6	73.7	13.2	2.0	6.6
	回答数	0	7	112	20	3	10
問16 この授業のための週あたりの学習時間(課題・レポートに費やす時間も含む)	選択肢	3時間以上	2~3時間	1~2時間	1時間以内	なし	無回答
	%	0.0	3.9	10.5	34.2	44.7	6.6
	回答数	0	6	16	52	68	10



### Ⅲ 2014年度の取組概要（2）

—情報・議論の場の提供—





## 「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウム 2014

### 1. 開催概要

愛知教育大学教育創造開発機構では、平成 23 年度より、文部科学省特別経費（幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実）プロジェクト「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」を推進してきた。

本取組においては、教員養成カリキュラムの一定の制約条件の下でも実現可能な、文理融合型の教育体系を教養教育において構築すると共に、教員養成系大学である本学固有のリベラル・アーツ型教育の在り方を追究してきた。

平成 25 年度後期から実施に至った新しい教養教育カリキュラムは、「リテラシー」「基本概念」「現代的課題」「感性・創造」の 4 つの学修領域から構成され、幅広い教養の形成とともに、論理的思考や問題解決能力をはじめとする汎用的能力（ジェネリック・スキル）を培い、学生の主体的学びの姿勢を育成することを目標に据えている。

プロジェクトの最終年度となる本シンポジウムでは、各学修領域における教育目標および内容を再確認し、学生が教養教育を学ぶ意義について理解を深めることを目的とした。第一部では平成 26 年度後期の授業担当者 2 名に、授業内容、授業での工夫、成績評価の方法を報告いただき、第二部では平成 26 年度前期の授業担当者 2 名、両授業の受講学生から感想を報告いただき、学修領域の授業のあり方を学生、教員とともに議論した。

### 2. プログラム

テーマ	教員養成系大学におけるリベラル・アーツ ー学生と教員で考える教養教育ー
日時	平成 26 年 10 月 22 日（水）13：30～16：10
場所	愛知教育大学 第一共通棟 201 教室
開会挨拶	後藤 ひとみ（愛知教育大学 学長）
趣旨説明	田村 建一（リベラル・アーツ・プロジェクトメンバー代表）
概要説明	「教養教育における学修領域の教育目標と内容」 長谷川 詩織（愛知教育大学 大学教育センター 研究員）
第 1 部： 教員による授 業報告	報告①現代的課題「現代社会における健康」 福田 博美（養護教育講座 准教授） 報告②基本概念「表現の世界（数と図形）」 井上 歩（数学教育講座 講師）
ディスカッション	
第 2 部：	報告①感性・創造「西洋のクラシック音楽を聴こう」

教員による実践報告と学生からの感想	<p>國府 華子（音楽教育講座 准教授） 受講学生からの感想①</p> <p>報告②ものづくりリテラシー「歴史を変えた物理実験」 伊東 正人（理科教育講座 准教授） 受講学生からの感想②</p>
ディスカッション	
総括コメント	田村 建一（リベラル・アーツ・プロジェクトメンバー代表）
閉会挨拶	野田 敦敬（愛知教育大学 副学長）

### 3. 開催報告

2014年10月22日（水）の午後1時30分より、第一共通棟201教室にて「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウム2014が開催されました。

後藤ひとみ学長による開会挨拶、田村建一教授（プロジェクトメンバー代表）による趣旨説明、長谷川詩織研究員（大学教育研究センター）による教養科目の概要説明のあと、第一部として「教員による授業報告」が行われました。福田博美准教授（養護教育講座）が、現代的課題学修領域の授業「現代社会における健康」について、井上歩講師が、基本概念学修領域の授業「表現の世界（数と図形）」について、教育目標や導入した活動等を含めて報告されました。

第二部では、「教員による実践報告と学生からの感想」として、感性・創造学修領域の授業「西洋クラシック音楽を聴こう」について、国府華子准教授（音楽教育講座）が報告されたあと、初等教育教員養成課程教育科学専修2年の三浦明日香さん、特別支援学校教員養成課程2年の紅谷李緒さんが、授業を受けた感想を述べました。続いて、伊東正人准教授（理科教育講座）による、ものづくりリテラシー分野の授業「歴史を変えた物理実験」の報告を踏まえて、現代学芸課程日本語教育コース2年の鯖戸小鶴さんが、他の受講者の意見を含めて授業の感想を述べました。

高橋真聡教授（理科教育講座）の司会のもと、第一部は小谷健司教授（大学教育研究センター長）を、第二部は久保田祐歌研究員（大学教育研究センター）をディスカッサントに据え、教育目標の達成度や学生参加型の授業のあり方等に関する議論を行いました。田村教授の総括のあと、野田敦敬副学長により閉会の辞が述べられました。参加者は、本学教職員33名、学生3名の合計36名でした。第一部、第二部共に、参加者から質問や意見が活発に出され、教員と学生と双方の立場から、教養教育の意義および可能性を考察する機会となりました。

（報告 長谷川詩織）

文部科学省特別経費プロジェクト事業「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」

# Liberal Arts Project

## 教員養成系大学における リベラル・アーツ

—学生と教員で考える教養教育—

4th

2014  
10.22  
(Wed)

13時30分～  
16時10分

愛知教育大学  
第一共通棟  
201教室

学外の方で、  
シンポジウム  
に参加を希望  
される場合は、  
10月20日(月)  
17:00までに  
問合先(機構  
運営課)まで  
電話にてご連  
絡ください。

13:00 受付開始

13:30 開会挨拶 後藤ひとみ (学長)

13:35 趣旨説明 田村建一 (リベラル・アーツ・プロジェクト代表)

13:45 「教養教育における学修領域の教育目標と内容」  
長谷川詩織 (リベラル・アーツ教育部門研究員)

**第一部 教員による授業報告**

13:50 報告①現代的課題「現代社会における健康」  
福田博美 (養護教育講座准教授)

14:05 報告②基本概念「表現の世界(数と図形)」  
井上歩 (数学教育講座講師)

14:20 ディスカッション

**第二部 教員による実践報告と学生からの感想**

14:50 報告①感性創造「西洋のクラシック音楽を聴こう」  
國府華子 (音楽教育講座准教授)

受講学生からの感想①

15:15 報告②ものづくり「歴史を変えた物理実験」  
伊東正人 (理科教育講座准教授)

受講学生からの感想②

15:40 ディスカッション

16:00 総括コメント 田村建一 (リベラル・アーツ・プロジェクト代表)

16:05 閉会挨拶 野田敦敬 (副学長)



主 催 : 愛知教育大学  
問合先 : 教育創造開発機構運営課 TEL 0566-26-2717 FAX 0566-95-0035  
リベラル・アーツ教育部門: <http://www.aichi-edu.ac.jp/higher-edu/liberal/index.html>

※なお、本シンポジウムの報告内容は、『教員養成系大学におけるリベラル・アーツ—学生と教員で考える教養教育』のなかに採録しているため、併せてご覧ください。

## 教養教育における 学修領域の教育目標 と内容

大学教育研究センターリベラル・アーツ教育部門  
研究員 長谷川 詩織

1

## 教養科目説明会(学生対象)

3つの「問いかけ」

1. 「市民」として行動するには？
2. 「主体的」に学ぶとは？
3. 知識・技能とは？



2

### 課題を発見する力

社会にはたくさんの課題がひそんでいます。まず身近なところから、解決できる課題がないか考える力を身に付けましょう。

### 複眼的に物事をとらえる力

自分の考えにとらわれず、様々な意見や情報を比べることで、公正・公平に物事をとらえる力を身に付けましょう。

### 情報を読み取る力

社会には、多様な媒体を通じて、膨大な情報が流通しています。収集した情報を適確に読み取り、正確性を判断する力を備えましょう。

### 他者と協働する力

私たちの周りには、他者との協働が不可欠なことが多くあります。コミュニケーションをとりながら一緒に課題の解決を図りましょう。

3

## 教養科目の構成

### ◎リテラシー学修領域

4リテラシーの3つから、  
1科目ずつ選択

- 市民リテラシー
- 多文化リテラシー
- 科学リテラシー
- ものづくりリテラシー

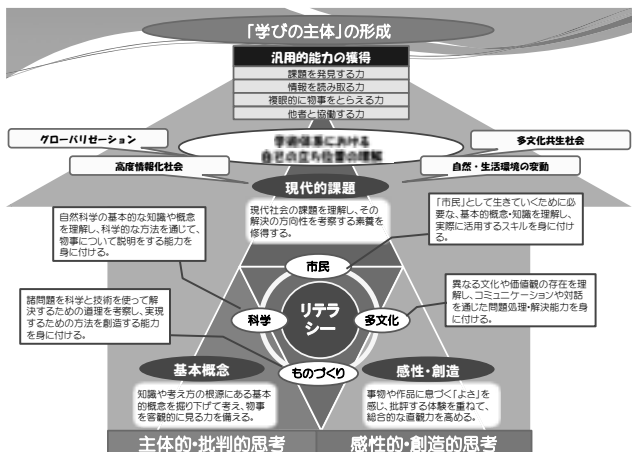
### ◎基本概念学修領域

### ◎現代的課題学修領域

### ◎感性・創造学修領域

各学修領域から、  
1科目ずつ  
選択

4

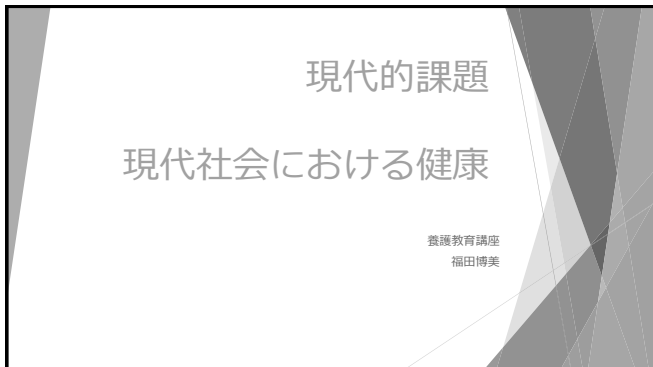


5

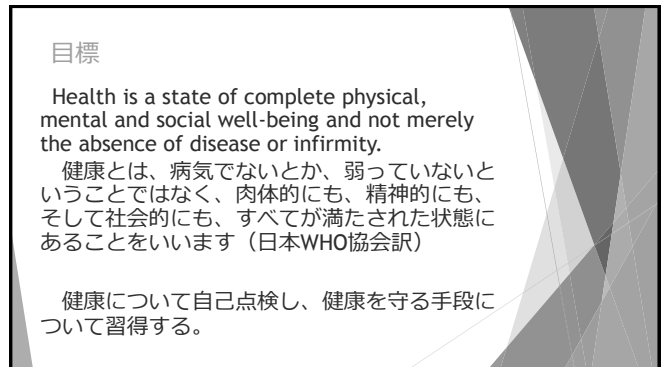
ご清聴ありがとうございました。



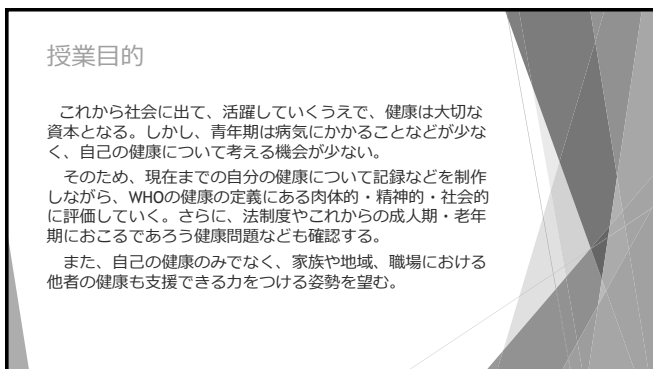
6



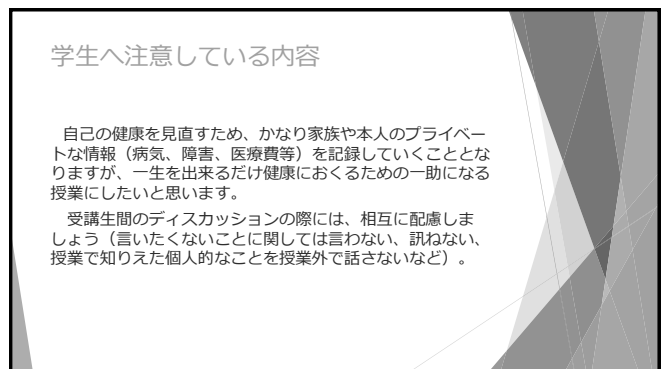
1



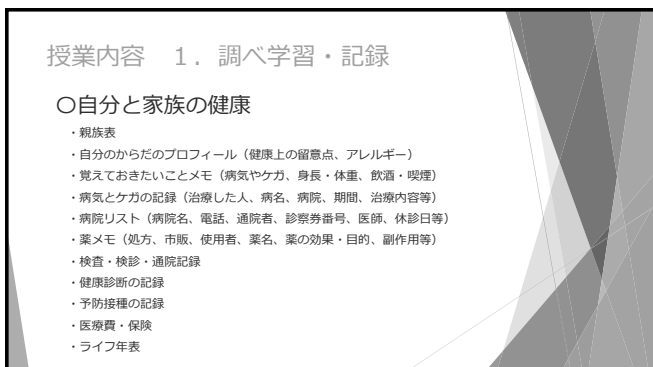
2



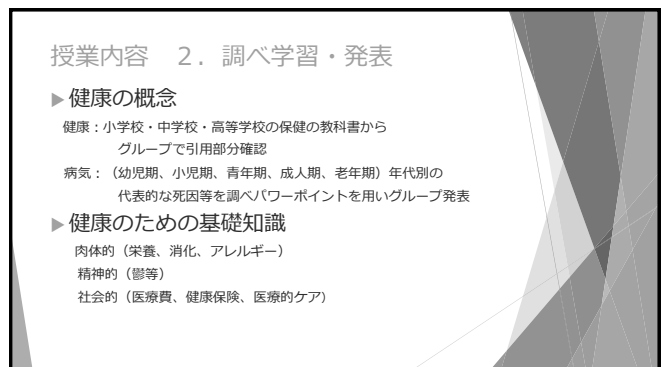
3



4



5



6

## 授業形態

- ▶ 50名を5名ずつの10グループに分け、適宜調べ学習と、発表を行う。
- ▶ 授業終了時、その日の学びを記入

7

## 評価

- ①授業における記録（30%）：授業中に作成する記録の適切性から評価します。  
（概念化、診断）
- ②授業への参加（30%）：授業中のディスカッションへの参加の度合いやその適切性から評価します。（調整、コミュニケーション）
- ③期末レポート（40%）：期末に作成するレポート「現代社会における健康」により評価します。（統合的な相互作用）  
自分の現在の健康状態を評価できる。  
自分の将来の健康を予測し、改善の意欲が見られる。

8

**実践報告**  
**基本概念「表現の世界 (数と図形)」**  
 井上 歩  
 愛知教育大学数学教育講座  
 2014年10月22日

井上 歩 (愛知教育大学数学教育講座) 基本概念「表現の世界 (数と図形)」 2014年10月22日 1 / 7

1

**概要**

▶ 目標  
 数学は自然現象を記述・解明する「言葉」である。  
 日常生活の中から数や図形を見出し、数学を活用してみよう！  
 ⇒ 数学的思考を体験し、身につける

▶ 組み立て

- 身近な疑問からテーマを設定する
- 作業を通して、学生の興味と発想を促す
- 発想を数学で表現・確認してみる

▶ 評価

- 積極的に授業に参加し、自分なりの結論に至ったか
- 授業内容の理解度

井上 歩 (愛知教育大学数学教育講座) 基本概念「表現の世界 (数と図形)」 2014年10月22日 2 / 7

2

**内容**

- 科学の言葉「数」(石戸谷)
- 光と影の幾何学(石戸谷)
- 紐の結び方を区別する(井上)
- ロトの勇者が地球人でないことを証明する(井上)

井上 歩 (愛知教育大学数学教育講座) 基本概念「表現の世界 (数と図形)」 2014年10月22日 3 / 7

3


**ロトの勇者は地球人ではない！(外在的方法)**



井上 歩 (愛知教育大学数学教育講座) 基本概念「表現の世界 (数と図形)」 2014年10月22日 4 / 7

4

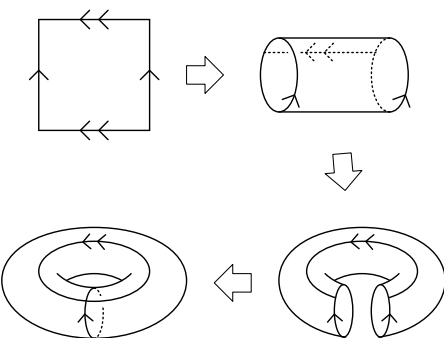
**ロトの勇者は地球人ではない！(外在的方法)**



井上 歩 (愛知教育大学数学教育講座) 基本概念「表現の世界 (数と図形)」 2014年10月22日 4 / 7

5

**ロトの勇者は地球人ではない！(外在的方法)**

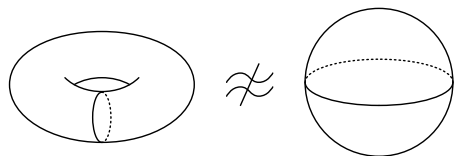


井上 歩 (愛知教育大学数学教育講座) 基本概念「表現の世界 (数と図形)」 2014年10月22日 4 / 7

6



ロトの勇者は地球人ではない！(外在的方法)



7

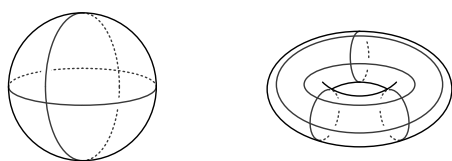
ロトの勇者は地球人ではない！(内在的方法)

オイラー数

1. 曲面を適当に部屋分けする
2. 部屋数を数え  $F$  とする
3. 壁の数を数え  $E$  とする
4. 壁と壁がぶつかっている箇所を数え  $V$  とする
5.  $\chi = F - E + V$  (オイラー数) を計算する

8

ロトの勇者は地球人ではない！(内在的方法)



$F = 4$	$F = 6$
$E = 4$	$E = 12$
$V = 2$	$V = 6$
$\chi = 4 - 4 + 2 = 2$	$\chi = 6 - 12 + 6 = 0$

9

ロトの勇者は地球人ではない！(内在的方法)



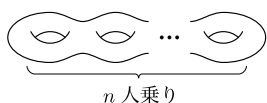
10

ロトの勇者は地球人ではない！(内在的方法)

定理

オイラー数  $\chi$  を計算すれば、曲面の形が分かる：

- $\chi = 2 \Rightarrow$  球面
- $\chi = 0 \Rightarrow$  浮き輪
- $\chi = -2 \Rightarrow$  二人乗りの浮き輪
- $\vdots$
- $\chi = 2 - 2n \Rightarrow$   $n$  人乗りの浮き輪



11

ロトの勇者は地球人ではない！(内在的方法)



12

### 学生の感想（平成25年度後期）

- 実際に手を動かすので楽しく、納得もしやすかった
- 教材が多く、直感的に理解できた
- 不変量という考え方が面白かった、その意義も理解できた
- 数学を身近に感じた
- 数学のイメージが変わった
- また機会があったらもっと学びたい
- 新しい考え方ができた
- 色々な方向から見ると、違った側面が発見できることを知った
- 計算は大事だが、興味を持って考えることも大切だと知った
- 難しかった、分かり辛かった
- 何をしているのか良く分からないときがあった

井上 歩 (愛知教育大学数学教育講座) 基本概念「表現の世界 (数と図形)」 2014 年 10 月 22 日 6 / 7

13

### まとめ

- 作業を多く用意すると、学生は授業へ主体的に参加しやすい
  - 主体的に学ぶことで、学生は興味を育む
- ⇒ 授業の目標はそれなりに達成されているのではないか
- 目先を変えることは発想の転換を促すが、目的を見失わせる反面もある
- ⇒ 教員が柔軟に授業を進める事が重要である

井上 歩 (愛知教育大学数学教育講座) 基本概念「表現の世界 (数と図形)」 2014 年 10 月 22 日 7 / 7

14

教員養成大学におけるリベラル・アーツ


感性・創造「西洋のクラシック音楽を聴こう」

音楽教育講座 国府華子

1

授業の目標

- ・西洋音楽を実際に聴くだけでなく、音楽作品に関わる様々な歴史的・文化的背景を知る。
- ・音楽作品には作曲家の想いが込められており、実際に演奏される時には、演奏者の解釈や想いが音に表現される。その作曲家や演奏者の考えや背景を知る。



作品に近づくための自分なりの方法を見つける  
自分で音楽を探し、聴くためのヒントを得る

2

	講義内容
1	ガイダンス
2	楽器の響き(ラヴェル:ポレロ)
3	物語と音楽
4	楽器の歴史と作曲家(鍵盤楽器)
5	楽曲の聴き比べ("鳥"をテーマにした曲)
6	作曲家の背景と人物関係(シューマンとブラームス)
7	作曲家の背景と人物関係(ベートーヴェン)
8	指揮者の役割
9	演奏の聴き比べ(異なる演奏者の演奏)
10	音楽の中のユーモア
11	バレエ音楽
12	アンサンブル(室内楽曲)
13	編成の違いを聴いてみよう
14	映画と音楽
15	授業の総括

3

評価

◎出席・受講態度

◎提出物

- ・授業で聴いた曲の年表を作成する。
- ・作成した年表に、自分自身で聴いた曲をプラスして加える。(授業で聴いた曲を、再度自分で聴いたものも含めて可。)
- ・自分が気に入った曲から1曲を選び、聴いて欲しい対象を定めて、自分の言葉で紹介するレポートを作成。

4

課題と今後に向けて

課題

- ・「聴く」ことが中心の内容だったが、興味の持ち方により、集中が続かない場面があった。
- ・聴き比べるなどの内容では、違いがわからないという学生も多いた。

今後に向けて

- ・最終課題であった作成した「年表」と「楽曲の紹介」の活用。
- ・映像資料の有効活用。(生演奏も含めて)

5

リベラル・アーツ型教育の展開  
シンポジウム 2014

「第2部 教員による実践報告と学生からの感想」

報告者

現代学芸課程 自然科学コース  
宇宙・物質科学専攻  
伊東正人  
2014.10.22

1

**【報告内容】**

1. 授業題目・授業内容
2. 授業方法と授業の雰囲気
3. 成績評価
4. 反省と課題

2

1. 授業題目・目標・内容

【授業題目】ものづくりリテラシー  
「歴史を変えた物理実験」(H26年 前期実施)

【授業目標】物理学がどのような形で科学技術に貢献しているかを理解する。

授業内容

「歴史を変えた物理実験」は、物理学の発展に貢献した歴史的な実験を紹介し、その背景や意義を学ぶ。また、現代の科学技術における物理学の役割についても学ぶ。授業では、学生が物理学の発展の歴史について、その背景や意義を学ぶ。また、現代の科学技術における物理学の役割についても学ぶ。授業では、学生が物理学の発展の歴史について、その背景や意義を学ぶ。また、現代の科学技術における物理学の役割についても学ぶ。

【学生人数】52名（ほぼ文系クラス）

教育科学（初等3、中等4） 家庭科（初等7、中等2）  
 情報（初等7、中等4） 日本語コース（6）  
 国語（初等13、中等4） 過年度生（1）  
 技術（中等1）

3

【授業内容】過去の有名な物理学実験 ⇒ 現代の科学技術

授業内容・方法	
第1回	ガイダンス
第2回	浮力検証実験
第3回	ニュートンの万有引力実験から自動車へ
第4回	ニュートンのプリズム実験から光ファイバーへ
第5回	ヤングの光の干渉実験からCD・DVD・ブルーレイへ
第6回	ヘムツの光電効果実験から携帯電話へ
第7回	ヘルツの光電効果実験からCCDカメラへ
第8回	中間試験
第9回	ファラデーの電磁誘導実験から発電機へ
第10回	キャベンディッシュの実験から宇宙開発へ
第11回	リウジンの放射線実験から電子デバイスへ
第12回	マイケルソンモーリーの光速測定実験からGPSへ
第13回	アンダーソンの変電圧実験からPETへ
第14回	ハーンらのウラン実験から原子力発電へ
第15回	「EPRパラドックス」から宇宙開発を語る
第16回	総括

・文系の学生に知ってほしい  
・将来の理科授業の話のネタ

4

2. 授業方法・雰囲気

当初の授業方法

- なるべく式を使わない
- 歴史的背景を重点に置く
- 文系学生にとっては豆知識的な講義

教室の雰囲気

- なぜか後列側に座る（前列は空席）
- 3分の1はZzz…（3限だからなあ）
- 学生からの反応がほとんどない

↓ 基礎試験の結果と教室の雰囲気を受けて

授業方法を変更

- 式は絶対に使わない
- 歴史的な背景よりも、身近な電化製品・自然現象と物理のつながりを扱う（スピーカー、ラジオ、LED、虹など）
- なるべく演示実験を行う
- 小テストを実施、評価し週週に返却

5

スクリーン

【演示実験の方法】  
ビデオカメラで実験の様子をライブで撮影しスクリーンに映す

レクチャーテーブル

6

実際に授業で使用したスライドを紹介します

※学生にはスライドのコピーを配布

## スピーカーの仕組み

2014. 6. 2 実施

7



ジョン・フレミング  
(1849-1945)

8

### フレミングの左手の法則



9

### 物理現象：磁場中にある電流は力を受ける

磁場の向き (N → S)  
(磁力線の向き)

と

電流の向き (+ → -)

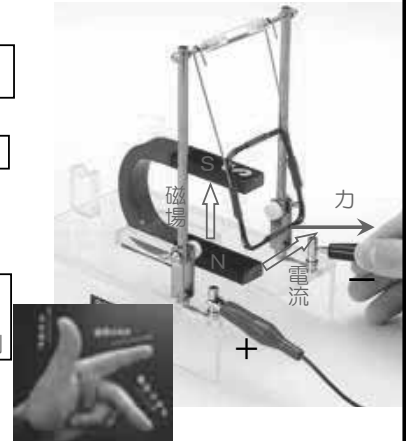
と

力の向き

を

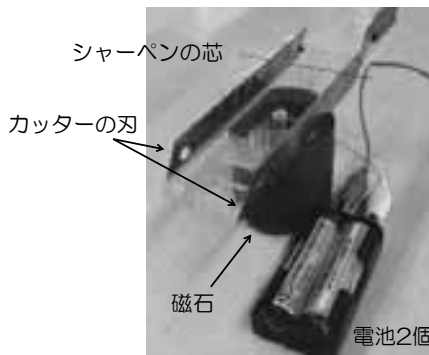
左手の指で表したもの

||  
フレミングの左手の法則



10

### 「フレミングの左手の法則」の演示実験 身近な物で実験



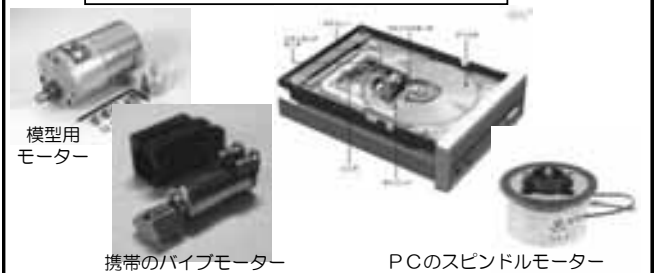
シャープペンが動く様子を見せたが、学生の反応はほとんどなし…

11

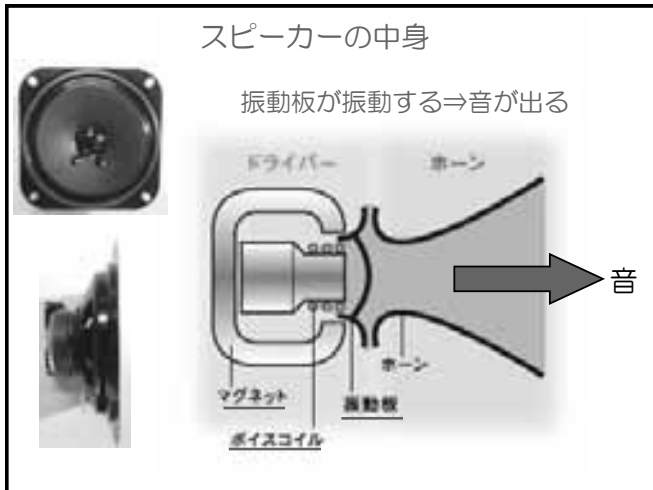
### 磁石の中で電流を流すと力を受ける

↓  
ものを動かすことができる

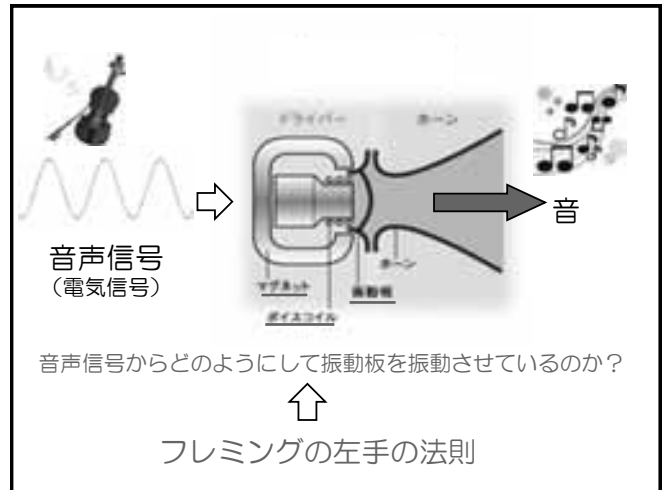
↓  
応用例：スピーカー・モーター



12



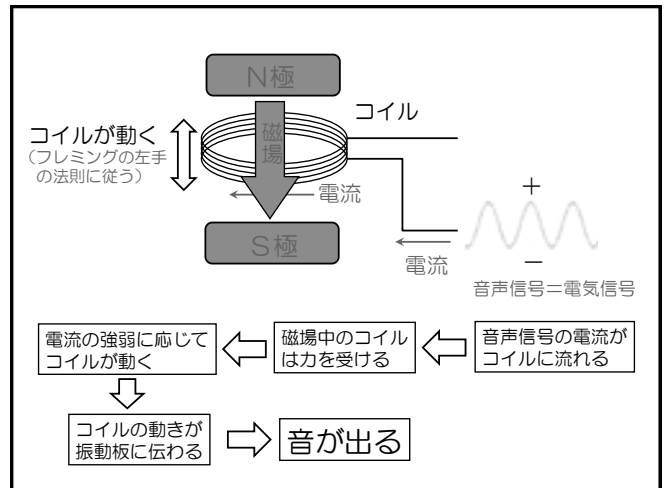
13



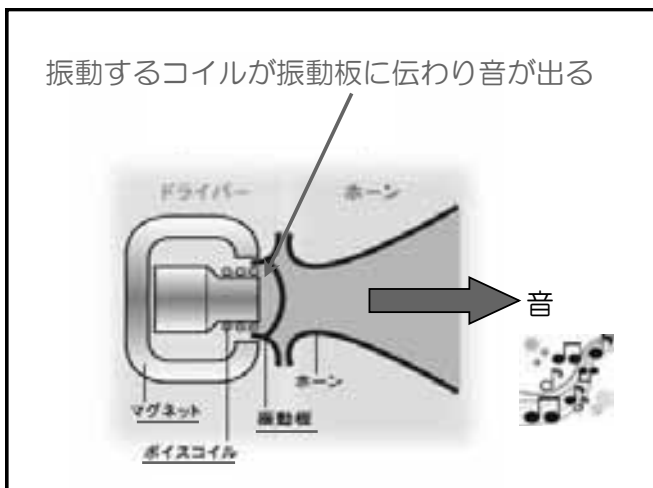
14



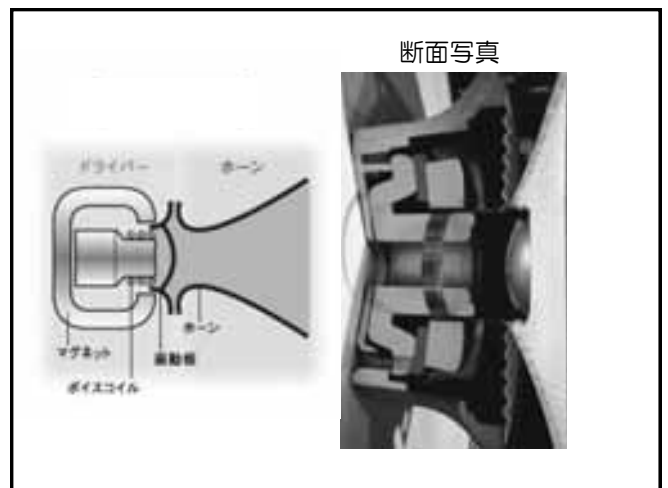
15



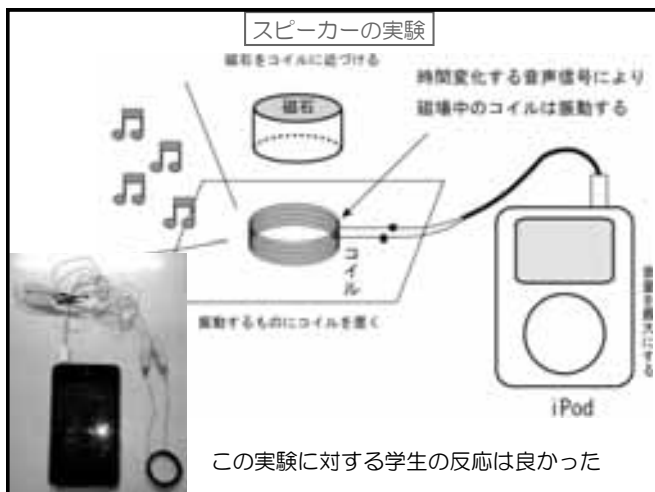
16



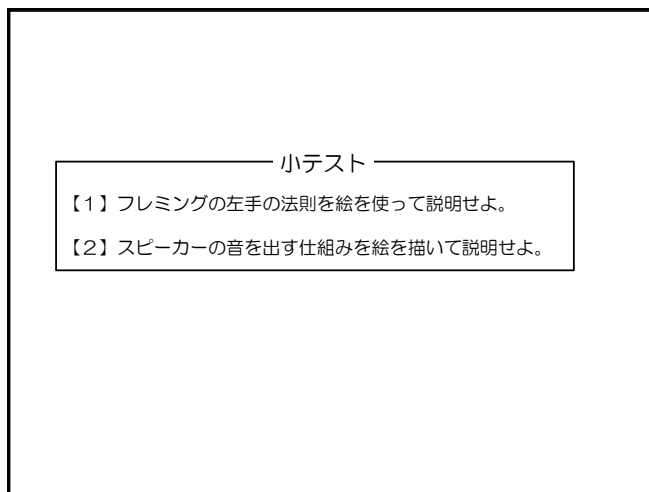
17



18



19



20

過去の物理学実験 ⇒ 現代科学技術 → 製品・現象 ⇒ 物理

変更

第1回	ガイダンス
第2回	学力確認試験
第3回	「電池」⇒ 電圧・電気回路
第4回	「ガリレオ」⇒ 可視光 ⇒ 光の性質
第5回	「ヤング」⇒ 虹 ⇒ 反射・屈折
第6回	「ヘルツ」⇒ 「H」⇒ 電磁誘導
第7回	「ヘルツ」⇒ 「ラジオ」⇒ 電磁波
第8回	中間試験
第9回	「スピーカー」⇒ フレミングの左手の法則
第10回	「LED」⇒ 半導体
第11回	「サーモグラフィー」⇒ 色と温度
第12回	「マイケル」⇒ 光ファイバー ⇒ 全反射
第13回	「アンダー」⇒ 音と楽器 ⇒ 共鳴
第14回	「ハルン」⇒ 「自然に潜む数学」⇒ フィボナッチ数列
第15回	「ハッブル」⇒ 「原子の世界」⇒ 電子・陽子
第16回	試験

21

### 3. 成績評価

授業全体の評価はレポートにした。

- 本授業で行った授業題目の中で、自分が興味を持った1つの題目（「可視光」や「電磁誘導」など）を選び以下の点について答えよ。  
 (1) 何故、その題目を選択したのか理由を述べよ。  
 (2) その題目は現在の技術にどのように応用されているのか調べよ。  
 (3) その題目を理科授業で実践するとき、どのような授業を行いますか？
- 「小学校教員の理科離れ」について、その現状を調査しその対策について意見を述べよ。

成績評価＝出席率（10%）＋小テスト評価（30%）＋レポート評価（60%）

S：0名、A：46名、B：4名、C：1名、D：1名

22

### 4. 反省と課題

当初の授業方法

- なるべく式を使わない
- 歴史的背景を重点に置く
- 文系学生にとっては豆知識的な講義

当初の教室の雰囲気

- なぜか後列側に座る（前列は空席）
- 3分の1はZzz...
- 学生からの反応がほとんどない

授業方法を変更

- 式は絶対に使わない
- 身近な電化製品・自然現象⇒物理
- なるべく演示実験を行う
- 小テストを実施、評価し翌週に返却

変更後の教室の雰囲気

- 変わらなかった…
- 演示実験のときは目覚める
- 変わらなかった…
- “私たち理科が苦手です”という空気が伝わってくる

【自己反省】

- 授業方法の工夫が足りなかった（安易に演示実験に逃げた、理科アレルギーが強い）
- 文系学生に物理を16回授業する難しさを改めて知った（今更ではあるが）

23

### 今後の課題

- 演示実験ではなく、学生達に実験させる？  
実験装置・道具など多数必要
- 学生にプレゼンさせる
  - ・身近にある科学技術とその発展の歴史
  - ・身近にある物理現象を調べる
- 文系学生の理系科目に対する苦手意識が強すぎ  
“物理は嫌い・苦手”という空気がヒシヒシと伝わってくる…

後期も同じ講義が始まり、プレゼンをさせる予定です。

学生人数50名（幼児2、教育学4、情報8、国語27、家庭9）

24

## シンポジウム所感

高橋 真聡

リベラル・アーツプロジェクトでは、2014年度も引き続き、教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育としての教養教育について、シンポジウムを開催しました。今年度の実施目的は、教養科目の教育実践を共有することと、および今後の授業改善に向けての受講学生からの意見集約でした。教養科目は、昨年度の秋以来の共通科目改編により新カリキュラムとしてスタートしておりますが、シンポジウム開催の時点では半期2回（昨年度後期と今年度前期）の講義単位が終了したところです。この期間に、教養科目担当の教員は1～2コマの講義を担当しております。

シンポジウムでは、まず教養教育における学修領域の教育目標とその内容についての概要説明を行いました。今回の改編の特徴は、教養科目での学習を通じて以下の4つの汎用的能力（ジェネリックスキル）育成を全面に掲げ、組織的に行うことにあります。それらの能力とは、（1）問題意識をもち課題を発見できる能力、（2）多様な情報を収集・分析し、主体的に考察できる能力、（3）問題を論理的・実証的に分析し統合することができる能力（いわゆるクリティカル・シンキング）、（4）他者と協働して問題解決にあたるためのコミュニケーション能力です。これらを基盤とする教養科目の構成について、および各々の科目群によってどのような汎用的能力の体得を目指しているかについての説明がなされ、今回のシンポジウムで取り上げるテーマについての全体像を整理しました。

第一部では、教養科目担当教員による2件の「授業報告」がなされました。ここでは、まず授業目的および到達目標についての紹介をして頂き、実際の授業内容や工夫された取り組み等について報告して頂きました。一人目の福田氏は、現代的課題「現代社会における健康」について、健康の定義や健康であることの重要性、また身体や精神の問題のみならず法制度の問題も含めての健康問題を紹介されました。講義においては、学生に対して、自分や家族の健康を観察・調査し記録させるところから、身の回りの健康について関心を持たせるようにされています。さらに、調べ学習や発表会を通じて、家庭のみならず地域社会や国際的規模の健康問題にまで関心を持たせるようにされています。これらのテーマは、社会のグローバル化やサイエンスリテラシーとも深く結びつく内容となっているようです。課題としては、昨今の学生が体の構造や仕組みをそもそも知らない（議論の基盤となる常識的・基礎的知識の欠如）ということが挙げられました。

2人目の井上氏は、基本概念「表現の世界（数と図形）」について、数学的思考方法を通じて物事を論理的・客観的に捉える体験的教育を紹介されました。数学は、自然現象をモデル化し記述する「言葉」であること、また現象を客観視し論理的に扱い解明するためのツールであることを紹介されました。特に、身近な日常生活の中から数や図形を切り取り、数学的思考を体験させる授業展開を実践する報告がなされました。身近な疑問からのテーマ設定と、実際に作業をさせることで学生の興味と発想を促すことを期待しているそうです。評価に際しては、積極的授業参加や授業の理解はもちろん、自分なりの結論に到達で



きたかを重視されています。講義を通じて、教師自身も学びながらの取り組みが重要であるという発言が印象的でした。

第二部では、2名の講義担当教員による実践報告とそれを受けての受講学生からの感想を報告して頂き、教養科目の問題点や今後の修正方向についての意見交換の場としました。従来もアンケート形式で講義に対する意見等の集約は行われていたが、シンポジウムという開かれた場での意見交換には新鮮みがありました。一人目の國府氏は、感性・創造「西洋のクラシック音楽を聴こう」について、音楽作品を聴くことで作品の背景となる歴史や文化をも学ばせようとしています。また、音楽作品の音に表現される作曲家の想いや演奏家の解釈や想いなどについて学びを促そうとされています。毎回の講義で著名な演奏を聴かせることで、作品に近づくための自分なりの方法を見つけさせようとしています。講義においては、作品群の年表を書かせ、さらに自分が関心をもつ曲についても加筆させることで主体的な音楽探しをさせています。また、気に入った曲については自分の言葉で作品紹介させることで深い理解への到達を誘導しています。報告を行った学生からは、様々な視点から音楽というものに接することができ面白かったとの感想が寄せられました。学生達からはまた、教師の得意なところを生かして生演奏が聴きたかったとのリクエストも寄せられました。

2人目の伊東氏からは、ものづくりリテラシー「歴史を変えた物理実験」について報告がありました。物理学とはどのような学問か、私たちは物理学の手法を用いてどのように自然を理解してきたのか、また科学技術として利用してきたのかについて解説が行われています。講義においては、歴史的に有名な科学実験の発想や手法を紹介し、可能なものについては演示実験を行い理解の定着をねらっていました。また、歴史的な科学実験とそこから波及して得られた現代の科学技術への応用について調べさせプレゼンテーションさせるなどの工夫が凝らされていました。個々の学生が行う実験形式は設備等の都合で無理でしたが、教員による実験演示は学生の関心を引き、評判も良かったようです。伊東氏としては、講義理解の前提となる(学生の)科学知識に若干の物足りなさを感じたようですが、学生の理解度に対応して軌道修正していく必要があるとのコメントがありました。

第一部と第二部を通じて、教養科目担当教員からの様々な工夫が紹介され、受講学生の反応および今後の改善項目等について活発な意見交換が行われました。今回は受講学生からの数名の参加もあり、従来のシンポジウムとは異なる切り口の意見も得られました。教員を前にして遠慮がちな発言でもあったかもしれませんが、それでも学生サイドからの有益な情報が得られたと思います。本プロジェクトとしては、これまでの4年間を通じて、「教師力を鍛える教養教育とは」、「教養教育の内容・方法・評価のあり方を考える」、「大学における教養教育とリテラシー」、「新教養カリキュラムにおける『4つのリテラシー』と『ジェネリック・スキル』の検討」など、段階的にリベラル・アーツ型教育を深めてきました。新カリキュラムが始まってまだ1年余りで、成果が現れるにはいまだ少しの時間を要するかもしれませんが、発展と同時に軌道修正を今後も行っていきたいと考えています。

## リベラル・アーツ Edu セミナー

久保田 祐歌

本プロジェクトは、教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の構築を目指し、4年間の事業期間の初年度である平成23年度より、学内教員に教育実践を報告いただき知見や課題を共有したり、学外教員の先進的な取り組みを紹介したりする場として、リベラル・アーツ Edu セミナーを企画してきた。

プロジェクトの最終年度となる平成26年度は、教養教育科目（「リテラシー」「基本概念」「現代的課題」「感性・創造」の4学修領域）の授業を参観した上で、授業担当教員から、授業内容や方法等について報告いただき、参加者の教員とともにディスカッションを行うセミナーを企画した。再編されたカリキュラムによる教養科目は平成25年度後期から開始されており、授業担当教員が学修領域の目標を踏まえて実施した授業について、改善のための振り返りや他の教員との課題共有の機会となることを目指した。なお、第2回、第4～5回のセミナーについては、教務課主催として予定されていた公開授業にディスカッションを組み合わせ、Edu セミナーとして実施した。

第1回セミナーは、「基本概念」学修領域の授業を対象とし、プロジェクト担当の高橋真聡教員の授業「起源と進化」を参観した上で、ディスカッションを行った。授業は、①小テストの実施、②映像教材の視聴、③宇宙についての講義（スライドを使用）により構成されていた。授業の方法としては、映像教材を利用し、クリッカーを用いて視聴した映像に関する小テストを行っていることが特徴的であった。

第2回セミナーは、「現代的課題」学修領域の授業を対象とし、岩崎公弥氏（地域社会システム講座教授）担当の授業「地球環境問題を考える」を参観した上で、ディスカッションを行った。授業は、①「緑の革命」に関する講義（パワーポイントを使用）、②映像資料の視聴により構成されていた。本授業では、学生の事前の予習を促すために、授業内容のレジュメが「まなびネット」に事前に掲示されている点が特徴的であった。

第3回セミナーは、「リテラシー学修領域」のうちの「市民リテラシー」を対象とし、堀内真由美氏（社会科教育講座講師）担当の授業「暮らしのなかのジェンダー」を参観した上で、ディスカッションを行った。授業は、①格差社会についての講義、②映像教材の視聴、③コメントシートへの記入により構成されていた。授業の方法としては、映像資料の使い方という点で、学生にビデオを見せる際に、視聴のポイントをガイドラインとして配布資料に簡潔に明記し伝えている点が特徴的であった。

第4回セミナーは、「感性・創造」学修領域の授業を対象とし、麓洋介氏（幼児教育講座助教）担当の授業「現代の音楽」を気楽に体験してみよう」を参観した上で、ディスカッションを行った。授業は、配布資料による説明と音楽鑑賞が交差する構成となっていた。授業の方法としては、「繰り返し」という切り口で、現代音楽のいくつかの作品が解説され、鑑賞によって「繰り返し」の音楽を実感できるようにされている点が特徴的であった。

第5回セミナーは、「基本概念」学修領域の授業を対象とし、須田庄氏（数学教育講座助教）担当の授業「離散の世界（身近な離散数学）」を参観した上で、ディスカッションを行った。授業は、①講義、②「数学的帰納法」を使って、チェス盤を3枚の正方形から成るタイルで敷き詰めるという課題への

取り組みとその解説、③授業の感想の記入により構成されていた。授業の方法としては、課題を学生に解かせることが中心にあり、学生は自分で取り組んだ後で、周りの学生と話し合いながら、自分の回答でよいかどうか確かめたり、分からない点を教え合ったりしているのが特徴的であった。

第6回セミナーは、「リテラシー」学修領域のうちの「多文化リテラシー」を対象とし、上田崇仁氏（日本語教育講座准教授）担当の授業「日本とアジア～『描かれた日本』」を参観した上で、ディスカッションを行った。授業は、①導入（韓国と日本が併合される前後での教科書の比較）、②ワーク（植民地朝鮮における「国語」教科書を比較し、ワークシートへ記入）、③解説により構成されていた。授業の方法としては、戦前の教科書やそのコピーを学生が手にとって比較し、分かったことをシートに記入するという、直接的経験により知識を得るという方法が取られていたのが特徴的であった。

今後もこうした公開授業とディスカッションを組み合わせたセミナー等を実施し、授業担当者間で課題を共有することで、学生のレディネスを踏まえた授業方法や学修領域の目標に基づいた授業展開へとつなげられるのではないかと考える。

最後に、Edu セミナーとしての公開授業にご快諾いただいた授業担当者の皆様、ならびにセミナーにご参加いただいた教員の皆様に心より御礼申し上げます。

※Edu セミナーの開催報告については、シンポジウム報告書『教員養成大学におけるリベラルアーツ－学生と教員で考える教養教育－』をご参照下さい。

〔第1回セミナー〕

テーマ	基本概念学修領域「起源と進化」の授業
日時	平成26年5月27日(火) 15:00～17:00(120分)
場所	愛知教育大学 第一共通棟2階 215教室
プログラム	第1部 基本概念「起源と進化」公開授業 15:00～16:30(90分) 第2部 ディスカッション 16:30～17:00(30分)
参加対象	本学教員
講師	高橋 真聡 氏（理科教育講座 教授）
参加者数	6名(Edu セミナーを含む、内学生2)

〔第2回セミナー〕

テーマ	現代的課題学修領域「地球環境問題を考える」の授業
日時	平成26年6月10日(火)15:00～17:00(120分)
場所	愛知教育大学 第一共通棟2階 208教室
プログラム	第1部 現代的課題「地球環境問題を考える」公開授業 15:00～16:30(90分) 第2部 ディスカッション 16:30～17:00(30分)
参加対象	本学教員・学生
講師	岩崎 公弥 氏（地域社会システム講座 教授）
参加者数	12名(Edu セミナーを含む)

〔第3回セミナー〕

テーマ	リテラシー学修領域:市民リテラシー「暮らしのなかのジェンダー」の授業
日時	平成26年6月26日(木)10:50～12:50(120分)

場所	愛知教育大学 第一共通棟 1階 103 教室
プログラム	第 1 部 市民リテラシー「暮らしのなかのジェンダー」 公開授業 10:50～12:20(90 分) 第 2 部 ディスカッション 12:20～12:50(30 分)
参加対象	本学教員
講師	堀内 真由美 氏 (社会科教育講座 講師)
参加者数	9 名 (Edu セミナーを含む)

〔第 4 回セミナー〕

テーマ	感性・創造学修領域「“現代の音楽”を気楽に体験してみよう」の授業
日時	平成 26 年 10 月 16 日(木)15:00～17:00(120 分)
場所	愛知教育大学 音楽棟 音楽合奏実習室(611)
プログラム	第 1 部 感性・創造学修領域「“現代の音楽”を気楽に体験してみよう」公開授業 15:00～16:30(90 分) 第 2 部 ディスカッション 16:30～17:00(30 分)
参加対象	本学教員
講師	麓 洋介 氏(幼児教育講座 助教)
参加者数	8 名 (Edu セミナーを含む)

〔第 5 回セミナー〕

テーマ	基本概念学修領域「離散の世界(身近な離散数学)」の授業
日時	平成 26 年 10 月 21 日(火)15:00～17:00(120 分)
場所	愛知教育大学 第一共通棟 2階 211 教室
プログラム	第 1 部 基本概念学修領域「離散の世界(身近な離散数学)」公開授業 15:00～16:30(90 分) 第 2 部 ディスカッション 16:30～17:00(30 分)
参加対象	本学教員
講師	須田 庄 氏(数学教育講座 助教)
参加者数	10 名 (Edu セミナーを含む)

〔第 6 回セミナー〕

テーマ	リテラシー学修領域:多文化リテラシー「日本とアジア～『描かれた日本』」の授業
日時	平成 26 年 11 月 21 日(金) 13:20～15:20(120 分)
場所	愛知教育大学 第二共通棟 412 教室
プログラム	第 1 部 多文化リテラシー「日本とアジア～『描かれた日本』」公開授業 13:20～14:50(90 分) 第 2 部 ディスカッション 14:50～15:20(30 分)
参加対象	本学教員
講師	上田 崇仁 氏(日本語教育講座 准教授)
参加者数	5 名 (Edu セミナーを含む)

## 防災教育の調査と実践

田村 建一

本プロジェクトは2011年4月に開始されたが、ちょうどその直前の3月11日に東日本大震災が発生した。被害を受けた福島県の原子力発電所の問題も深刻であったが、筆者にとっては何よりも出身地である三陸沿岸の津波による被害の状況が最大の関心事であり、当時、電子メディアを中心にさまざまな手段を使って被害の現状や復興の目途に関する情報を得ようと努めた。

当初、それは個人的な関心であって、大学での教養教育と結びつくものではなかったが、あれこれ調べていくにつれて、津波被害を受けた地域の学校関係の情報も目にするようになった。特に岩手県釜石市のいくつかの小中学校では数年前から行われていた防災教育がじっさいの震災時に役に立った、といったニュースを知り、学校での防災教育やそれを担う人材の養成の重要性を強く認識するようになった。そして本学が教員養成を主軸とする大学であることから、教養教育の中に何らかの形で防災教育が位置付けられないか、本プロジェクトで検討を始めることになった。

まず本学の授業の中に防災に関わる内容を含むものがないかが調査され、その結果、理科教育を中心に地震や大雨など自然災害のメカニズムを扱う授業がいくつか存在し、防災教育を意識しながら実施されていることがわかった。そこで2011年度中に、本プロジェクト活動の一環として防災セミナーが何度か開催され、防災教育の科学的側面について本学教員による講演や授業紹介が行われた。また、被災地の市議員を招いて講演会を実施し、被災の具体的な状況や復興に向けての活動、仮設住宅での生活とその問題点などについて実体験に基づく報告をしていただいた。

また、本学の学生にとっては、学校という職場において自然災害にどのように備えるべきか、また災害が発生した時に教師としてどのような行動が要求されるのか、という点を学ぶことも重要であるため、東日本大震災で津波被害を受けた学校の関係者から取材し、その被災体験と教訓を将来教員を目指す学生たちに伝えることも必要であると思われた。そのため、筆者は2011年度と2012年度に岩手県沿岸部のいくつかの学校を訪問し、校長先生をはじめとする学校関係者からの聴き取り調査を行った。

調査内容は、以下のとおりである。

- ・震災時および震災後数日間の対応（児童生徒と教員の行動。避難所での状況、健康状態等）
  - ・学校再開までの教員の業務（児童生徒および教職員の被災状況、健康状態等）
  - ・学校再開後の状況（特別な取り組み、児童生徒へのケア、教職員へのケア、外部からの支援等）
  - ・防災教育の内容と導入の経緯（実施までの経緯、教員への説明会や研修、教育内容や時間数、実施にあたって留意した点、当初の内容から変更した点、成果の公表等）
- もちろん学校によって調査内容は異なる。例えば、特別な防災教育を行っていなかった

学校に関しては、震災時の避難の状況や学校再開までの業務を中心に質問した。またある学校は、中心的な避難所として使用せざるをえなかったため、それに関わる教員の業務についても質問した。

調査の報告は、各年度のプロジェクト活動報告書に掲載されたほか、加筆修正し文体等を換えた上で本学ホームページの中の本プロジェクトのサイトにも掲載した。ただし、プライバシーに関わる事柄など様々な理由から、サイトには掲載しなかったものもある。

2013年度後期から始まった本学の新しい教養教育カリキュラムの中で、防災教育は現代的課題学修領域の中の「自然災害と防災・減災の科学」という科目として実施されている。この授業は毎学期1クラスずつ、月曜5限（16：40～18：10）という通常の授業が行われない時間帯に開講されており、どの学生も履修できるようになっている。授業内容としては、防災・減災に関する様々な問題を考えるさいに必要な科学的知識の獲得を目的とする授業が本学理科教育講座の教員数名によって実施されるほか、外部講師による、自然災害に関わる訴訟事件等の法律上の問題や災害時における自治体の役割、被災地での救助活動から得られた教訓など、多面的な内容が扱われている。

筆者も2014年度前期の授業を1回だけ担当し、被災地の学校関係者への聴き取り調査から得られた教訓を学生に直接伝える機会をもつことができた。それとともに、授業ではマスメディアのネット情報から震災時の学校の状況や関連する問題（訴訟など）についてどの程度知ることができるのか、という情報入手の方法も扱った。授業内容は以下のとおりである。

「自然災害と防災・減災の科学」（2014年7月23日）

「震災時の学校」授業計画

1. 自己紹介と講義内容、聴き取り調査の経緯（5分） ※板書：岩手県地図
2. 東日本大震災の被害状況（10分）  
岩手県釜石市の写真を見せながら説明。
3. 被災時の学校1（10分）  
プリント教材（河北新報HP「わがこと震災・減災」、毎日新聞HPより震災時の児童生徒の避難についての記事）に基づいて説明。
4. 被災時の学校2（15分）  
プリント教材（本学HPの「被災地調査レポート」より釜石東中学校の部分）に基づいて説明。
5. 釜石市の防災教育（放映20分＋説明5分）  
NHKのHPで公開されている「クローズアップ現代」のアーカイブの中から2012年1月17日放映の釜石小学校での防災教育の取り組みを見せる。
6. 津波訴訟の例（10分）  
Diamond Online等のHPより宮城県石巻市大川小学校の事例を中心に学校に関わる津波訴訟の動きを説明。

7. 他の文献紹介 (5分)

8. 授業内容の振り返りレポート (15分)

上記の授業の最後に課した振り返りレポートで、受講した学生に、高校までの間に学校で受けた防災関連の授業や活動の内容とその意義や改善すべき点について書いてもらった。避難訓練が形骸化していたことや消火器をはじめとする防災設備の使い方を学べなかったことなどの指摘がある一方で、災害食を作ったり布でロープを作ったりした体験やビニール製の滑り台で避難した体験を有意義だったと評価している学生もおり、学校によって取り組み方にかなりの違いがあることがわかった。その他、学生の防災教育に対する意識や考えを垣間見ることができる記述として、概ね以下のような傾向があった。

児童生徒に対する教え方	防災グッズや身近な物の活用法をどのように教えるか。 映像など視覚的な教材をどのように活用するのか。 身近なものを使って、どのように身を守ることができるのか。 学年ごとに適した教え方はあるのか。 子供自身でも判断できるように、どのように教えるか。
避難訓練の仕方	避難訓練のバリエーションの重要性 (教室、時間帯、避難経路) 疑似体験する機会の重要性。 教師がいない状態でも実施する必要性。 避難訓練と事例紹介の組み合わせ方。 避難後の行動に関する情報。
命の教育	自分の命は自分で守ることの自覚のさせ方。 訓練することの意味の教え方。 避難訓練に対して緊張感を持たせるための方法。

学生が体験した先進的な防災教育の内容については、何人かに体験を発表してもらって、それを全員で共有するというやり方も有効であろう。

筆者が調査したのは、地震後の津波で被災した学校であり、そこで行われていた防災教育は津波を想定したものであったが、自然災害からどのようにして児童・生徒の身を守るかという目的はどんな種類の災害にも共通しており、調査内容は将来の教員が環境に応じて創意工夫をしていくための材料になると考える。

調査レポートにも書いたが、被災地にはマスメディア関係者や研究者が次から次へと押し寄せる。その対応にも学校関係者、特に管理職にある人は忙殺される。そうした状況が一段落ついた時期ではあったが、さらに追い打ちをかけるように聴き取り調査を申し込んだ筆者に現場の先生方は心よく応じてくださった。それは将来教職を目指す学生たちに自らの体験を伝えたいとの思いからである。協力された方々に心から御礼を申し上げます。

※次頁に、今年度作成のニュースレターを添付している。

# AME Liberal Arts Project

## 被災地調査レポート

### 大槌高等学校

(岩手県釜石市)

- はじめに
- 学校の位置
- 震災当日の状況
- 安否確認
- 避難者に対する対応
- 大槌町の状況
- 保護者が迎えに来るまで
- 震災時の気候
- 学校の再開
- 始業式に向けた準備
- 校舎の使用状況
- 自衛の駐留
- 教職員の生活
- 授業開始時の生徒の状況
- ある教諭の話

Vol. 5 2014年9月12日

#### ■はじめに

大槌町（おおつちちょう）は釜石市の北、山田町の南に隣接する町で、沿岸部は大槌湾の北半分と船越湾の南半分を擁しています。大槌町は、東日本大震災において人口 15,277 人のうち 1,409 人が死亡あるいは行方不明となり、また住宅の 4 分の 3 が全半壊するなど、大きな被害を受け、町役場や県立病院を含め町の中心部が壊滅状態となりました。大槌高校は少し内陸に入った地区の高台にあり、津波の被害を受けませんでしたので、震災後しばらくの間、町の主たる避難所として使用され、それにとまない学校の運営にはさまざまな問題がのしかかりました。

以下では、2012年3月7日の訪問調査で高橋和夫校長（当時）から伺った話、またその時にいただいた『月刊高校教育』（学事出版株式会社）に校長が投稿された原稿（2011年12月号から2012年3月号までの4回分、ただしスペースの関係で掲載されなかった部分も含む）や新聞記事、その他の資料に基づき、避難所運営や学校再開に至るまでの問題点に関わる部分を、校長の談話の形でまとめます。

（聞き取り：日本語教育講座 田村建一）

#### 学校の位置



(Google Map より)



(Google Map より)



## 震災当日の状況

震災当日、3年生はすでに卒業しており、1・2年生は午前授業でした。地震の時刻（14時46分）に学校にいたのは、教職員の他、部活動等で残っていた約100名の生徒（1・2年生の半数以上）でした。校舎内にいた教職員と生徒をすぐに中庭に避難させました。14時50分すぎに津波警報が出されました。

過去の事例に倣って安全に帰れる数名の生徒は帰りましたが、その後15時20分頃に町を襲った津波を見たとき、生徒がほんとうに安全な方向に帰ったのか不安になり、自責の念にかられました。幸いこの時帰した生徒たちは無事に避難してくれましたが、後で思うと、たとえ保護者が迎えに来ても、安全な方向であっても、帰すべきではなかったと思いました。

## 安否確認

生徒の安否確認には一週間かかりました。道路の寸断やガソリン不足のため、震災直後は限られた避難所にしか行けず、しかも教員が山道を通ったり瓦礫をかき分けたりしてやっと行くことができました。結局、2年生の1名と卒業したばかりの3年生の5名が死亡または不明のままとなりました。平成23年度当初（生徒数317名）において死亡または不明の家族のいる生徒は37名でした。また、被災生徒（保護者の死亡または不明、住居の全半壊、保護者の失職に該当する生徒）は209名に及びました。教職員は全員無事でしたが、およそ3分の2が住宅の被災にあいました。

## 避難者に対する 対応

震災一日目（3月11日）の大地震の後、近くの小学生や幼稚園児、町民が次々に大槌高校へ避難してきて、高校の教職員・生徒と合わせ約500名がその夜を過ごしました。

お菓子をのぞき食料の備蓄はまったくなく（お菓子は子どもたちに配りました）、翌日早朝に自衛隊と遠野市役所から乾パンや缶詰、飲料水が提供されるまでは何も食べられませんでした。寝具は約40組の布団しかありませんでしたので、毛布代わりに暗幕やカーテンを、またマット代わりにダンボールを使用しました。

避難者数は、二日目の12日に約700名、13日に約870名と増えていき、ピーク時には1000名近い避難者がいました。一般避難者は二つの体育館に、近くの小学校の児童と教職員は普通教室に入れました。乳幼児のいる家族は一般避難者から切り離し、畳のある作法室に入れました。13日には大槌病院の入院患者30名と医療スタッフ70名が避難して来たので、普通教室に入れました。彼らは一部をのぞき15日の夕方に別の施設に移りましたが、残った医療スタッフにはその後診療に従事していただきました。

## 大槌町の状況

大槌町は、町長をはじめ30名以上の職員が震災で亡くなっており、町の行政が一時は機能しなくなったため、大槌高校の避難所は、4月19日までの約40日間は高校の教職員が運営の主たる担い手とならざるをえませんでした。経験もマニュアルもない中、ただ目の前の難しい業務に誠意をもって臨むだけで精一杯でした。住民の中には、ここが災害対策本部であると誤解してやって来る人もいて、対応に苦慮することもありました。

## 保護者が迎えに来るまで

震災から5日間は教職員がローテーションを組んで24時間対応の体制をとりましたが、その後は、朝6時半のミーティングに始まり、三度の食事の配膳と食器洗い、夜のミーティングと見回り（避難者の状況確認等）が終わって夜11時の就寝までの勤務体制を、原則5日勤務2日休暇のローテーションで行いました。ただし、夜11時の就寝というのはあくまでも努力目標であって、じっさいには夜中もトラブルが発生して眠れないことがしばしばありました。

最初100名ほどいた避難所内の大槌高校の生徒は、翌日から保護者が迎えに来た者から帰宅させ、1週間後には37名になりました。生徒たちは、初日の暗幕やカーテン、段ボールの配布、その後の食事の配膳や食器洗い、コピー機が使えない中での避難者名簿の用紙作り、プールからのトイレ用の水の運搬など、自分たちができることを見つけてよく働いてくれました。

## 震災時の気候

震災の年は4月に入ってから雪が降るなど、例年より寒い春でした。体育館には学校にあった14台のストーブを配置しましたが、灯油の提供がわずかで、残りが少なくなってきたため、3月20日に第一体育館の避難者をボイラー使用が可能な普通教室に移動させました。第一体育館は物資の置き場にしました。物資は避難者の人数分揃わないと配給ができず、物によっては性別、年齢を限定して配給しました。生活必需品がまったくない中、避難者からの注文も多く、物資の仕分けと配給は教職員のストレスになりました。県教委から派遣されて来た支援部隊の教員には主としてこの仕事を担当していただきました。

## 学校の再開

平成22年度の終業式は、場所の確保ができず、また生徒の登校手段もないため、実施することができませんでした。その代わり3月28日から4日間の登校日を設け、都合のいい日、都合のいい時間帯に生徒に登校してもらいました。登校日の連絡は各避難所にチラシを掲示したり、電話のつながる生徒には電話で知らせたりしました。この4日間にほぼすべての生徒に登校し、体調や家族、住居の状況、避難先、制服や教科書の有無等の状況確認ができました。震災以来初めて会った生徒たちが抱き合って喜ぶ姿を何度も目にしました。

状況確認を通して学校がいつ再開されるのか不安を抱えている生徒や保護者がたくさんいることが分かりました。そうした不安に配慮し、始業式を4月20日に、入学式を22日に行うことを発表しました。実現の可能性を疑問視する声も学校の内外にありましたが、これ以上学校再開を遅らせるわけにはいかないと判断しました。なお、高校入試は震災前に行われており、合格者発表は予定より一週間遅れて3月22日に行いました。

## 始業式に向けた準備

始業式等の日程を受けて避難所の再編作業に着手しました。教室と第二体育館に入っていた約440名の避難者の移動先について町の避難所担当者と教育委員会が原案を作成し、避難者に対して説明と要請がなされました。若干の調整の後、約170名が4月17日に他の避難所へバスで移動し、約270名が18日に校内の第一体育館に移動しました。移動については一部不満の声も聞かれましたが、基本的には協力していただけました。避難者が退去した後の教室の黒板には感謝の言葉が書かれていました。第一体育館に移動した避難者には、1人1畳分の計算で世帯ごとに区分けをしました。後にプライバシーへの配慮から、パーティションで間仕切りを行いましたが、これに対しては、お互いの顔が見えない、閉じこもって出てこない人がいる等の理由から反対する意見もありました。

## 校舎の使用状況

4月19日に避難所の自治会が組織され、会長および副会長2名が選出され、また同時に班も編成されて班長と副班長が決められました。これ以降、避難所は自治会が運営することになり、高校の教職員は学校の運営に専念できることになりました。

こうして4月下旬に新学年度が始まったわけですが、学校運営や学習環境の上でさまざまな問題を抱えてのスタートでした。上述のように第一体育館が避難所となっている他、大槌中学校の3年生4クラスのために教室を貸し、また医療チームの診察や宿泊のための部屋を提供し、さらに2つの金融機関にも場所を提供していました。さらにグラウンドは、6月10日まで自衛隊に駐留拠点としての使用を認めざるをえませんでした。

グラウンドに関しては、震災後まもなく町から仮設住宅のために使用させてほしいとの依頼がありました。そうなった場合、数年はグラウンドが使えなくなり、教育活動に支障をきたすことから、県教委とも相談してこの依頼は断りました。また、5月中旬には非公式ではありますが、町内小中学校の仮設校舎のために使うという話も浮上しました。これについても県教委と相談して断りました。

## 自衛隊の駐留

3月下旬に町からグラウンドに自衛隊を駐留させてほしいとの依頼があった時は、学校再開の頃までということでした。ところが、4月上旬になって町から自衛隊の駐留をさらに2~3ヶ月延期させてほしいとの要請があり、この件をめぐるやり取りの中で、私〔高橋校長〕がつい感情的になって「そんなことをしたら、生徒の夢をつぶしますよ。」という発言をしたこともありました。

グラウンドの使用がかなり制限される野球部やサッカー部の生徒たちの無念さを感じてのことでしたが、後になって反省しました。町が置かれた状況から結局は受け入れざるをえなかったのですが、生徒たちは不平不満を一切言わず、「自衛隊は町の復旧のために尽くしてくれている。」と駐留延期を受け入れてくれました。私よりも生徒たちの方がずっと大人でした。

6月10日に自衛隊が撤収したさい、生徒会、野球部、サッカー部から自衛隊幹部に感謝の色紙と手紙が送られました。また、5月下旬のある夕方には、吹奏楽部の有志が自衛隊員のためのミニコンサートを開きました。何の予告もないイベントでしたが、テントから自衛隊員が一人また一人と出てきて、聴いてくれたということです。

## 教職員の生活

上述のように教職員の約3分の2が住む家を失いました。学校再開に向けて、教職員の住居確保も重要な問題でした。私は盛岡市からの単身赴任の身でしたが、1ヶ月間校長室で寝泊りした後、4月11日からは期限付き講師の住んでいた教員住宅に入りました。

他の教職員は、校長室、印刷室、放送室など校舎内に適当な場所を探して寝泊りしましたが、そのうち釜石市や宮古市にアパートを借りてそこから通うケースも出てきました。若い男性教員たちは、古い教員住宅が改修されて住めるようになった6月中旬まで、校舎の向かいにある同窓会館で共同生活を送りました。

## 授業開始時の 生徒の状況

本格的に授業が始まったのが4月25日からでしたので、授業の遅れが心配されました。その点は教職員も生徒も意識しており、課外学習も実施されました。特に3年生は例年以上に図書館等で自主学習に取り組む生徒が多く、夏休み中もほとんど休みなく登校しました。

生徒が抱える問題として特に目立つのは、仮設住宅での生活に関わる問題です。これは生徒本人よりも、両親の離婚や父親の暴力といった家庭の問題です。こうした問題に対しては、町の福祉課や児童相談所などと相談しながら対応を検討しています。

震災を通してマスコミの力の大きさを実感しました。学校の窮状が伝えられると全国からすぐに支援物資が届いたり、避難所での生徒たちの活躍が取り上げられ、それが生徒たちの励みになったりしました。ただし、家族を失いながらも頑張っているある生徒が新聞で取り上げられた後、その生徒の取材にたくさんのテレビ局が殺到し、その生徒が逆に追い込まれるという事態も起きました。また、マスコミへの対応には多くの時間が取られました。

## ある教諭の話

以上が高橋校長から伺った話、および資料から得た内容のまとめです。震災後の生徒さんたちの学校での様子については、一人の教諭から次のような話を伺いました。

平成23(2011)年度の大槌高校1年生(震災時は中学3年生)を見てみると、例年よりも聞き分けがよく、いい子たちという印象をもちます。被災した周囲の状況を見て、我慢しているのかもしれませんが、運動部の顧問をしています。いつもなら練習中にただただ動く生徒にはきびしい言葉をかけるところ、今年は教員の方も気を使って、なかなか強い指導がしにくい状況です。何人か気がかりな生徒がいます。例えばある女子生徒は、震災で祖父母を失いましたが、授業中に急に泣き出したり、部活動のときに泣きながら練習していたりしたことが何度かありました。話を聴くと、どうしても祖父母を思い出すとのことでした。

生徒たちの多くは、表面上は心の傷があるようには見えませんが、アンケートを取ると、いろいろな症状が出ているのがわかります。心のケアが必要です。

以上が大槌高校での聴き取り調査で得られた内容です。町の主要部がほとんど被災し、一時的に役場が機能しなくなった中で、大槌高校の教職員は、被災した他の地域の学校関係者よりも長い期間、避難所の運営にも携わらなければなりません。時間の関係で具体的な話は聞けませんでした。学校再開へ向けた準備を進める中でそのような業務が教職員にかなりのストレスをかけたことは想像にかたくありません。将来教員を目指す学生のみなさんには、専門職として要求される知識や技能のほかに、緊急時に発生するさまざまな需要に対応できる能力と覚悟も必要であることを銘記してほしいと思います。(田村)

## 被災地調査レポート Vol. 5

愛知教育大学教育創造開発機構 大学教育研究センター

リベラル・アーツ教育部門

URL: <http://www.aichi-edu.ac.jp/higher-edu/liberal/index.html>

発行日: 2014年9月12日

編集: 長谷川詩織(リベラル・アーツ教育部門 研究員)



## おわりに

田村 建一

愛知教育大学は、文部科学省特別経費「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」の支援を受けて、2011年度から4年間、「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」プロジェクトを推進し、教養科目の再編を行うとともにその教育内容の在り方について検討してきました。教養科目の再編は、本来、大学改革の一環として計画されていましたが、プロジェクト期間中に本学におけるミッションの再定義が行われ、それに沿った大学改革を行う必要があることから、全体的な改革に関してはさらに検討を重ねることになり、2013（平成 25）年度からまずは教養科目を含む共通科目の改革が先行して実施されました。

今回の改革の特長は、本報告書の中でも記されているように、全体の教育目標として汎用的能力、いわゆるジェネリック・スキルにあたる次の4つの能力の育成を掲げていることにあります。

1. 問題意識を持ち課題を発見できる能力
2. 多様な情報を収集・分析し、主体的に考察することができる能力
3. 問題を論理的・実証的に分析し統合することができる能力（いわゆるクリティカル・シンキング）
4. 他者と協働して問題解決にあたるためのコミュニケーション能力

これらの能力が専門教育の中で活用され、また大学卒業後においてもさまざまな場面で活かされることを視野に入れています。汎用的能力は、すべての市民が身に付けるべきものですが、とりわけ市民的教養を必要とする教員にこそ求められる能力です。

今後、点検・改善していくべき点については、本報告書の「I 取組総括報告」の「6-2 今後の課題」（12頁）に記したとおりですが、再編後の教養科目を履修した学生たちの学びの実態をよく見据えながら、引き続き改善に取り組みたいと思います。

本プロジェクトの活動は、多くの人たちの協力の下でなされました。シンポジウムや各種セミナーにおいては、学外・学内の多くの先生方に講演や発表、公開授業を担当していただきました。また、新教養科目の各学修領域・リテラシー分野のコーディネーターの先生方には、教育目標の設定や授業の調整に多大な労をとっていただきました。活動を支えてくださったすべての方々に、ここに改めて御礼申し上げます。



## 組織体制





## 組織体制

(2011年6月～2012年3月)

愛知教育大学教育創造開発機構

機構長：松田 正久 学長

副機構長：折出 健二 理事

教育担当：岩崎 公弥 理事

### <リベラル・アーツプロジェクト・メンバー>

大澤 秀介 (現代学芸課程国際文化コース/社会科教育講座 教授、大学教育・教育養成  
開発センター センター長) ※プロジェクトメンバー代表

佐々木 守寿 (現代学芸課程情報科学コース/情報教育講座 教授)

高橋 真聡 (現代学芸課程宇宙・物質科学専攻/理科教育講座 教授)

田村 建一 (現代学芸課程日本語教育コース/日本語教育講座 教授)

内山 弘美 (プロジェクト研究員)

久保田 祐歌 (プロジェクト研究員)

### <協力>

現代学芸課程

国際文化コース (欧米文化履修モデル、アジア文化履修モデル、国際社会履修モデル)

日本語教育コース

臨床福祉心理コース

造形文化コース

情報科学コース

自然科学コース (宇宙・物質科学専攻、分子機能・生命科学専攻)

### <担当事務局>

稲吉 隆 (教育創造開発機構運営課 課長)

近藤 修 (教育創造開発機構運営課 副課長)

満田 清恵 (教育創造開発機構運営課)

安藤 操 (教育創造開発機構運営課)

## 組織体制

(2012年4月～2013年3月)

愛知教育大学教育創造開発機構

機構長：松田 正久 学長

副機構長：折出 健二 理事

教育担当：岩崎 公弥 理事

### <リベラル・アーツプロジェクト・メンバー>

田村 建一 (現代学芸課程日本語教育コース/日本語教育講座 教授) ※10月～3月まで

プロジェクトメンバー代表

大澤 秀介 (現代学芸課程国際文化コース/社会科教育講座 教授) ※4月～9月まで

プロジェクトメンバー代表

高橋 真聡 (現代学芸課程宇宙・物質科学専攻/理科教育講座 教授)

久保田 祐歌 (大学教育研究センター リベラル・アーツ教育部門 研究員)

長谷川 詩織 (大学教育研究センター リベラル・アーツ教育部門 研究員)

### <担当事務局>

稲吉 隆 (教育創造開発機構運営課 課長)

近藤 修 (教育創造開発機構運営課 副課長)

井成 浩文 (教育創造開発機構運営課 係長)

知久 あさみ (教育創造開発機構運営課 事務補佐員)

## 組織体制

(2013年4月～2014年3月)

愛知教育大学教育創造開発機構

機構長：松田 正久 学長

副機構長：折出 健二 理事

教育担当：岩崎 公弥 理事

### <拡大LA会議構成員>

清田 雄治 (学長補佐)

野田 敦敬 (教務企画委員会担当学系長)

藤井 啓之 (大学教育研究センター長)

渡邊 英幸 (社会科教育講座 講師/市民リテラシー)

川口 直巳 (日本語教育講座 講師/多文化リテラシー)

中野 博文 (理科教育講座 教授/科学リテラシー)

佐々木雅浩 (美術教育講座 准教授/ものづくりリテラシー)

加藤淳太郎 (理科教育講座 准教授/現代的課題)

橋本 剛 (音楽教育講座 准教授/感性・創造)

高橋 真聡 (理科教育講座 教授/基本概念)

### <リベラル・アーツ プロジェクト・メンバー>

高橋 真聡 (現代学芸課程宇宙・物質科学専攻/理科教育講座 教授) ※プロジェクトメンバー代表

大澤 秀介 (現代学芸課程国際文化コース/社会科教育講座 教授)

田村 建一 (現代学芸課程日本語教育コース/日本語教育講座 教授)

久保田祐歌 (大学教育研究センター リベラル・アーツ教育部門 研究員)

長谷川詩織 (大学教育研究センター リベラル・アーツ教育部門 研究員)

### <担当事務局>

稲吉 隆 (教育創造開発機構運営課 課長)

近藤 修 (教育創造開発機構運営課 副課長)

井成 浩文 (教育創造開発機構運営課 係長)

原田 美佳 (教育創造開発機構運営課 事務補佐員)

## 組織体制

(2014年4月～2015年3月)

愛知教育大学教育創造開発機構

機構長：後藤 ひとみ 学長

副機構長：野田 敦敬 副学長

教育・学生担当：中田 敏夫 理事

<リベラル・アーツ・プロジェクトメンバー>

田村 建一 (現代学芸課程日本語教育コース/日本語教育講座 教授)

※プロジェクトメンバー代表

高橋 真聡 (現代学芸課程宇宙・物質科学専攻/理科教育講座 教授)

久保田祐歌 (大学教育研究センター リベラル・アーツ教育部門 研究員) ※4月～11月まで

長谷川詩織 (大学教育研究センター リベラル・アーツ教育部門 研究員)

※4月～12月まで

<研究協力員>

渡邊 英幸 (社会科教育講座 講師/市民リテラシー)

川口 直巳 (日本語教育講座 講師/多文化リテラシー)

中野 博文 (理科教育講座 教授/科学リテラシー)

遠藤 透 (美術教育講座 教授/ものづくりリテラシー)

上田 琢哉 (学校教育講座 講師/現代的課題)

橋本 剛 (音楽教育講座 准教授/感性・創造)

<担当事務局>

稲吉 隆 (研究推進部 次長)

伊藤 純一 (研究推進部機構運営課 課長)

近藤 修 (研究推進部機構運営課 副課長)

井成 浩文 (研究推進部機構運営課 係長)

教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開  
プロジェクト活動最終報告書

発行日 2015年3月31日

制作 大学教育研究センター リベラル・アーツ教育部門

発行 国立大学法人 愛知教育大学 教育創造開発機構

(〒448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢1)

電話 0566-26-2717

印刷製本 株式会社 コームラ

住所 岐阜県岐阜市三輪ふりんとびあ3

電話 058-229-5858

